

科学技術振興調整費  
「女性研究者支援モデル育成」  
平成 19～21 年度

リーダーシップを育む  
広大型女性研究者支援

成果報告書

平成 22 年 3 月  
広島大学女性研究者支援プロジェクト

## 目次

1. はじめに .....	1
2. 広島大学における女性研究者支援の拡がり .....	2
2-1. 「猫の手プロジェクト」から CAPWR へ .....	2
2-2. 基盤整備 .....	4
2-3. テキスト・リーフレット .....	5
3. 女性研究者支援プロジェクト研究センター (CAPWR) .....	6
3-1. 平成 19 年度のメンバー .....	6
3-2. 平成 20 年度のメンバー .....	7
3-3. 平成 21 年度のメンバー .....	8
4. 「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」の実施内容 .....	9
4-1. 実施体制図 .....	9
4-2. 実施内容図 .....	9
4-3. 取組み履歴 .....	10
5. 人材育成リーダーシッププログラム .....	11
5-1. 学生を対象とした人材育成プログラム .....	11
5-1-1. 平成 19 年度 .....	11
5-1-2. 平成 20 年度 .....	12
5-1-3. 平成 21 年度 .....	12
5-1-4. フェニックスサポーター数 .....	12
5-1-5. 学生対象テキストの作成 .....	13
5-1-6. レポートの概要 (受講によって何を学んだか) .....	13
5-2. 女子学生・院生の情報交換・交流会の開催 .....	15
5-3. 女性研究者対象のリーダーシップ育成セミナーの実施 .....	17

5-3-1. 女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー .....	17
5-3-2. 女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー参加者からの声 .....	18
5-3-3. 広島大学女性研究者奨励賞 .....	20
5-3-4. 女性研究者奨励賞受賞者の内訳と研究活動への効果 .....	20
5-3-5. 女性研究者のためのスキルアップ講座 .....	21
5-3-6. 女性研究者のためのスキルアップ講座の参加者の声 .....	22
5-4. プロフェッサーシフト制とポストアップ制の実施 .....	24
<b>6. 両立支援環境形成プログラム.....</b>	<b>25</b>
6-1. 支援者バンクの運営 .....	25
6-1-1. 登録者数と利用者数 .....	26
6-1-2. 利用者および支援員からの報告書概要 .....	26
6-1-3. 利用者の内訳と研究活動への効果 .....	28
6-2. キャリア支援担当員の配置 .....	29
6-3. 子育て支援.....	30
6-3-1. 学童保育 .....	30
6-3-2. 学童保育の利用者の声 .....	30
6-3-3. 病後児保育 .....	32
6-4. ユビキタス研究環境の整備 .....	33
6-4-1. ユビキタス環境整備制度利用者数 .....	33
6-4-2. ユビキタス環境整備制度利用者の声 .....	33
<b>7. 意識改革プログラム .....</b>	<b>35</b>
7-1. 次世代育成支援.....	35
7-1-1. 高校への出前講義 .....	35
7-1-2. 女子高生のための体験科学講座 .....	41
7-1-3. 化学展にコーナー出展 .....	45
7-1-4. 女子高校生むけの相談コーナー .....	47
7-1-5. ペアリングチューター .....	50
7-2. 他機関の男女共同参画関連シンポジウム等への参加.....	51
7-2-1. 平成 19 年度 .....	51
7-2-2. 平成 20 年度 .....	51
7-2-3. 平成 21 年度 .....	53

7-3. 意識啓発セミナー・シンポジウムの開催 .....	54
第1回広島大学男女共同参画シンポジウム.....	55
第2回広島大学男女共同参画シンポジウム.....	61
第3回広島大学男女共同参画シンポジウム(第1回中国四国男女共同参画シンポジウム).....	67
～『協働』社会へ～ 中国四国地方からのアピール.....	75
第1回CAPWRセミナー .....	76
第2回CAPWRセミナー .....	77
第3回CAPWRセミナー .....	78
第4回・第5回CAPWRセミナー .....	79
第6回CAPWRセミナー .....	80
第7回・第8回CAPWRセミナー .....	81
第9回CAPWRセミナー .....	82
第10回CAPWRセミナー .....	83
7-4. 地方自治体等との連携 .....	84
7-5. 中国四国地方への拡がり .....	85
7-6. 女性研究者ネットワークの活性化.....	86
7-7. 学内職場環境調査 .....	87
<b>8. 男女共同参画に関する学内意識調査.....</b>	<b>89</b>
<b>9. 広島大学の女性教員の採用割合の年次変化 .....</b>	<b>102</b>
9-1. 女性教員採用に関する決定事項 .....	102
9-2. 女性教員の採用割合 .....	102
9-3. 女性教員の割合 .....	103
<b>10. 広島大学の教職員の職名別在職状況.....</b>	<b>104</b>
<b>11. 広島大学における女性の歩み .....</b>	<b>106</b>
11-1. 女子教育の歴史(広島大学の創立まで) .....	106
11-2. 広島大学の女性の教授.....	108
11-3. 広島大学の女子学生数.....	110

1 1 - 4. 広島大学の女性教員 .....	117
<b>12. 広島大学の男女共同参画推進 .....</b>	<b>119</b>
1 2 - 1. 広島大学における男女共同参画推進体制 .....	119
1 2 - 2. 広島大学男女共同参画推進委員会規則 .....	119
1 2 - 3. 広島大学男女共同参画宣言 .....	120
1 2 - 4. 広島大学男女共同参画基本方針 .....	121
1 2 - 5. 男女共同参画推進委員会の「行動の目標」と「行動計画」 .....	121
1 2 - 6. 「行動の目標」「行動計画」「平成 19・20・21・22 年度行動項目」一覧表 .....	122
1 2 - 7. 男女共同参画推進室の広島大学における位置付け .....	125
<b>13. 女性研究者支援プロジェクト実施担当者の, 研究者への軌跡 .....</b>	<b>126</b>
<b>14. 今後に向けて .....</b>	<b>132</b>



## 1. はじめに

『リーダーシップを育む広大型女性研究者支援』は、平成 19 年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に採択され、スタートいたしました。女性研究者支援のプロジェクトとしては、広島大学で最初であるだけでなく、中国四国地方で最初のものでした。手探り状態ではありましたが、多くの先生方からの支援、また、事務系の方々の支援を受けて、本プロジェクトは歩み始めました。

女性研究者支援の取組みを全学組織として進めるために、「女性研究者支援プロジェクト（CAPWR）研究センター」を母体といたしました。広島大学では、「広島大学プロジェクト研究センター」という新しいセンター組織が平成 15 年 4 月に始まりました。プロジェクト研究センターの設置は「自立的で自由な発想の下で展開される学部や研究科の枠を超えたプロジェクト型の研究活動を推進し、一層の活性化を促すことを目的とする」と謳われています。「女性研究者支援プロジェクト研究センター」は広島大学プロジェクト研究センターの一つとしてスタートし、多くの研究科の先生方にメンバーとなっていただきました。

本プロジェクトがスタートして 3 年がたち、科学技術振興調整費としてのプロジェクトは終了いたします。この間、広島大学内にとどまらず、学外の多くの先生方やプログラム関係者、また、コーディネータの方々にも、大きな支援を受けてきました。本報告書は、このように多くの内外の方々からの支援を受けて、私達がどのような取組みを実施したのか、どのような効果があったのか、について、3 年間の成果をまとめたものです。この報告書から、私達がおこなった支援プログラムの全体像と中身、育った学生や女性研究者の姿が浮き彫りになってくることと思います。

本支援プログラムはこれで終了いたしますが、この 3 年間の経験と成果を生かして、これからも、よりよい人材を育てていきたいと考えております。ぜひ、さらなるご支援・ご鞭撻をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

平成 22 年 3 月 8 日

女性研究者支援プロジェクト代表  
広島大学大学院理学研究科 教授  
相田 美砂子

## 2. 広島大学における女性研究者支援の拡がり

### 2-1. 「猫の手プロジェクト」から CAPWR へ

子育てをしていると、あまりの忙しさに「猫の手も借りたい！」という思いにかられることがあります。研究者も例外ではありません。むしろ、研究者、特に女性研究者は、駆け出し（研究員、助教）の時期と出産・子育ての時期がちょうど重なるので、就業と家庭の両立に苦慮する職種の一つです。とりわけ、冬、風邪が流行りだすと、保育園や学童保育から体調を崩した子供の迎えを依頼する電話が職場にかかるようになり、研究を中断して帰宅することが度々あります。多くの場合、女性にその負担がかかりがちです。そのような悩みを抱えていた平成 17 年の暮れも押し迫った 12 月 27 日に、男女共同参画学協会連絡会の大隈典子委員長より、文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル」の公募が始まるというメールが全国に送信されました。そこには、女性研究者が出産・育児等を両立し、研究を継続できる仕組みを構築するモデルとなる取組みを支援するとありました。

このメールを見逃さなかったのが、理学研究科附属両性類研究施設の竹林公子研究員でした。竹林研究員は、平成 18 年 1 月 4 日、直ちに理学研究科の若手女性研究者に「女性研究者支援モデル」への応募を呼びかけました。地方にある広島大学の特徴の一つに、教職員の職任近接があります。この呼びかけは、小学生や保育園児の送迎に携わる女性教員のなかですぐに広がりました。その結果、理学研究科の中坪敬子助手に加えて、キャリアセンターの森玲子助教授、ハラスメント相談室の横山美栄子教授が呼びかけに賛同し、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル」への採択を目指すワーキンググループが形成されました。科学技術振興調整費というのは、総合科学技術会議の方針に従って文部科学省が運用する政策誘導型の競争的資金です。平成 18 年 4 月に施行が開始した第 3 期科学技術基本計画の中で、女性研究者の活躍促進を図る「女性研究者支援モデル」育成事業の公募が始まりました。

ワーキンググループのメンバーは、猫の手も借りたいほど忙しい出産・育児・介護期間中の女性研究者に対して、個々のニーズに合わせたサポートを提供することにより、女性研究者が生き生きとして研究・教育活動に取り組むことを可能にし、大学の活性化と研究活動の質の向上を目指す「猫の手プロジェクト」が始まりました。プロジェクトの最初の仕事は、広島大学所属の女性研究者が子育て・介護と研究の両立のために何を必要としているかの調査と広島大学の男女共同参画に関する基礎データを収集することでした。現在、広島大学のホームページには男女共同参画に関する様々なデータが掲載されていますが、当時はまだ整備されておらず、ワーキンググループ自らデータを収集しました。この時の調査が、広島大学の男女共同参画の出発点となりました。

科学技術振興調整費の申請は、機関の長である学長が行いますが、そこには核となる実施責任者を必要としています。ワーキンググループから相談を受けた森川副学長（当時学生担当）は、研究室のスタッフとして女性を助手に採用していた経験から、リーダーシップがとれる実績のある理系の女性研究者が中心になるべきであると考え、長年アメリカで

研究生を送った後広島大学に着任した田島文子理学研究科教授に、実施責任者として参加してもらうことを示唆しました。田島教授は、二人の子育てを中心に、家庭生活と研究生のバランスを実践してきた研究者であり、子供たちが社会人として独立した後は、次世代の研究者の育成にも力を注いでいます。田島教授の参加とともにワーキンググループは「これからの大学は、バランスの取れた家庭生活を送り、かつ優れた研究実績を創出する研究者を育成する風土を造っていくことが、女性のみならず男性研究者を対象としても必要としている」という基本方針を確認しました。

その後、アンケート調査と大学構成員の現状分析の結果に基づき、猫の手プロジェクトワーキンググループと大学首脳部が会合を持ち、広島大学としてどのようなプログラムが必要とされ、現実可能か議論しました。その結果、猫の手を確保する研究環境の整備と意識改革策の二つを柱とすることにより、優れた女性研究者がその能力を最大限に発揮できる「Equality platform（男女平等な研究・教育の場）」の全学的な構築をめざすプランが提案されました。この広島大学最初の女性研究者支援プランは、田島教授により、CAPWR(Career Advancement Project for Women Researchers)と命名されました。

この最初のプランの申請は、初年度は採択には至りませんでしたでしたが、これが契機となり、広島大学の男女共同参画の基盤が整備されるようになりました。平成18年10月には、男女共同参画宣言が出され、平成19年2月には、広島大学男女共同参画推進委員会が設置されました。猫の手プロジェクトワーキンググループも、平成19年2月に、女性研究者支援プロジェクト（CAPWR）研究センター（センター長 田島文子 理学研究科教授）として正式に発足しました。あわせて、このプロジェクトの認知を広げる目的でロゴマークが、ニューヨーク在住の若手アーティスト Mika Tajima により制作されました。学内でこのロゴマークを目にされた方も多いと思います。



そして、平成19年5月、広島大学が提案した「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」が科学技術振興調整費女性研究者支援モデルとして採択されました（平成19年度から21年度）。その内容は、最初の提案から更に進化した①研究と育児・介護の両立支援環境プログラムと②意識改革プログラムの基盤の上に、③女性研究者・学生を対象とした広島大学独自の人材育成リーダーシッププログラムを展開することにより、女性研究者の育成を目指すものとなっています。

## 2-2. 基盤整備

平成 18 年度 (2006 年度)

広島大学男女共同参画宣言	平成 18 年 10 月 17 日
男女共同参画推進委員会の設置	平成 19 年 2 月 1 日
女性研究者支援プロジェクト (CAPWR) 研究センターの設置	平成 19 年 2 月 8 日

平成 19 年度 (2007 年度)

男女共同参画担当学長補佐の新設	平成 19 年 5 月 21 日
男女共同参画担当副理事に職名変更	平成 19 年 7 月 1 日
男女共同参画ホームページの開設	
全学ホームページ教員公募欄に女性の応募を促す表現を記載	平成 19 年 6 月
各部局等の教員, 研究員の公募文書にポジティブアクションを記載“同等と認められた場合は女性を採用”	平成 19 年 9 月 25 日 (教育研究評議会)
女性教員 ML の運用開始	平成 19 年 10 月
男女共同参画に関する行動の目標及び行動計画 (平成 19 年度～平成 22 年度の 4 年間) を決定	平成 19 年 10 月 15 日 (役員会承認)
広島大学女性研究者奨励賞の設置	平成 19 年 11 月 20 日 (教育研究評議会)

平成 20 年度 (2008 年度)

男女共同参画推進室の新設 (CAPWR を包含)	平成 20 年 4 月 1 日
学生の氏名表記の取扱い(旧姓使用の許可)	平成 20 年 4 月 14 日
女性教員採用割合の部局別目標値設定	平成 20 年 5 月 20 日 (教育研究評議会)
女性教員の部局別採用割合および部局別女性教員割合の四半期ごとに公表の開始 (以後, 実行中)	平成 20 年 7 月 15 日 (教育研究評議会)
プロフェッサーシフト制の実施 (研究員⇒助教)	平成 20 年 10 月 1 日
広島県仕事と家庭の両立支援企業への登録	平成 20 年 11 月 10 日
第 2 回広島大学女性研究者奨励賞	平成 20 年 11 月 18 日 (教育研究評議会)

平成 21 年度 (2009 年度)

理系女性研究者活躍促進プロジェクト設置	平成 21 年 11 月 17 日
第 1 回中国四国男女共同参画シンポジウム を開催 ～『協働』社会へ～ 中国四国地方からのアピール を採択	平成 21 年 12 月 21 日
教員人件費ポイントにおいて女性教員採用支援分の配分決定 (平成 22 年度分)	平成 21 年 12 月 22 日 (役員会承認)
ポストアップ制の実施 (助教⇒准教授)	平成 22 年 2 月

## 2-3. テキスト・リーフレット

平成 19 年度

「広島大学男女共同参画の取組み」のリーフレット	平成 19 年 11 月
生徒・学生むけの啓発リーフレット	平成 20 年 3 月
広島大学の男女共同参画 2007 ～平成 19 年度成果報告書～	平成 20 年 3 月

平成 20 年度

生徒・学生むけの啓発リーフレット（改訂版）	平成 20 年 8 月
学生むけテキスト「あなたがあなたの道を歩むために ～広島大学の男女共同参画～」	平成 21 年 2 月
広島大学の男女共同参画 2008 ～平成 20 年度成果報告書～	平成 21 年 3 月

平成 21 年度

教職員むけリーフレット「広島大学の子育て支援」	平成 21 年 4 月
学生むけテキスト「あなたがあなたの道を歩むために ～広島大学の男女共同参画～」(改訂版)	平成 22 年 2 月
広島大学の男女共同参画 2009 ～平成 21 年度成果報告書～	平成 22 年 3 月
広島大学の職場環境に関する調査報告書	平成 22 年 3 月
科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」 “リーダーシップを育む広大型女性研究者支援” (平成 19～21 年度) 成果報告書 (本報告書)	平成 22 年 3 月

### 3. 女性研究者支援プロジェクト研究センター(CAPWR)

女性研究者支援プロジェクトの実施には、全学的な取組みが不可欠である。そのために、学長の強いリーダーシップのもと、「広島大学男女共同参画推進委員会」と連携を図ることを目的として、「女性研究者支援プロジェクト (Career Advancement Project for Women Researchers : CAPWR) 研究センター」が設置された。

#### 3-1. 平成19年度のメンバー

CAPWR(2007年度)

◎センター長

田島 文子 (大学院理学研究科/教授)

○センター教員

相田 美砂子 (大学院理学研究科/教授)

泉 俊輔 (大学院理学研究科/准教授)

北仲 千里 (ハラスメント相談室/准教授)

坂田 桐子 (大学院総合科学研究科/准教授)

中坪 敬子 (大学院理学研究科/助教)

中矢 礼美 (留学生センター/准教授)

野崎 祐子 (大学院社会科学研究科/助教)

升島 努 (大学院医歯薬学総合研究科/教授)

横山 美栄子 (ハラスメント相談室/教授)

○センタースタッフ

澤 和子 (キャリア支援担当員)

杉浦 孝雄 (キャリア支援担当員)

井上 幸恵 (研究支援コーディネーター)

加来 千寿子 (研究支援コーディネーター)

池田 美奈子 (事務担当)

「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」業務主任者

横山 美栄子 (ハラスメント相談室/教授)

※男女共同参画推進委員会

委員長 工藤 敏夫 理事 (総務担当)

副委員長 相田 美砂子 副理事 (男女共同参画担当)

委員 (部局等より19名(内:女性10名,男性9名))

※男女共同参画推進委員会の運営事務組織

男女共同参画推進委員会 総務部総務グループ法規主担当

教育グループ 教育室教育企画グループ

制度グループ 人事部人事グループ職員人事主担当

社会グループ 総務部総務グループ法規主担当

ホームページ担当 総務部総務グループ法規主担当

### 3-2. 平成20年度のメンバー

#### CAPWR(2008年度)

##### ◎センター長

田島 文子 (大学院理学研究科/教授)

##### ○センター教員

相田 美砂子 (大学院理学研究科/教授)

泉 俊輔 (大学院理学研究科/教授)

北仲 千里 (ハラスメント相談室/准教授)

坂田 桐子 (大学院総合科学研究科/准教授)

中坪 敬子 (大学院理学研究科/助教)

中矢 礼美 (留学生センター/准教授)

野崎 祐子 (大学院社会科学研究科/助教)

升島 努 (大学院医歯薬学総合研究科/教授)

横山 美栄子 (ハラスメント相談室/教授)

##### ○センタースタッフ

井上 幸恵 (キャリア支援担当員)

加来 千寿子 (キャリア支援担当員)

澤 和子 (キャリア支援担当員)

杉浦 孝雄 (キャリア支援担当員) (4月まで)

池田 美奈子 (キャリア支援担当員) (5月から)

「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」業務主任者

相田 美砂子 (大学院理学研究科/教授)

#### ※男女共同参画推進委員会

委員長 河本 朝光 理事 (総務担当)

副委員長 相田 美砂子 副理事 (男女共同参画担当)

委員 (部局等より19名(内:女性10名,男性9名))

#### ※男女共同参画推進委員会の運営事務組織

男女共同参画推進委員会 総務室職員福利グループ

教育グループ 教育室教育企画グループ

制度グループ 総務室サービスグループ

社会グループ 総務室職員福利グループ

ホームページ担当 総務室職員福利グループ

#### ※男女共同参画推進室

室長 相田 美砂子 (副理事(男女共同参画担当))

室員 林 文泰 (総務室職員福利グループ主査(男女共同参画・保育園主担当))

清水 絵美 (総務室職員福利グループグループ員)

### 3-3. 平成21年度のメンバー

#### CAPWR(2009年度)

##### ◎センター長

相田 美砂子 (大学院理学研究科/教授)

##### ○センター教員

泉 俊輔 (大学院理学研究科/教授)

北仲 千里 (ハラスメント相談室/准教授)

坂田 桐子 (大学院総合科学研究科/教授)

中坪 敬子 (大学院理学研究科/助教)

中矢 礼美 (留学生センター/准教授)

升島 努 (大学院医歯薬学総合研究科/教授)

横山 美栄子 (ハラスメント相談室/教授)

##### ○センタースタッフ

井上 幸恵 (キャリア支援担当員)

加来 千寿子 (キャリア支援担当員) (平成22年2月まで)

東 真由美 (キャリア支援担当員)

文野 千加 (キャリア支援担当員)

池田 美奈子 (事務担当)

「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」業務主任者

相田 美砂子 (大学院理学研究科/教授)

#### ※男女共同参画推進委員会

委員長 河本 朝光 理事 (財務・総務担当)

副委員長 相田 美砂子 副理事 (男女共同参画担当) (平成21年12月まで)

坂田 桐子 副理事 (男女共同参画担当) (平成22年1月から)

委員 (部局等より19名(内:女性9名,男性10名))

#### ※男女共同参画推進委員会の運営事務組織

男女共同参画推進委員会 財務・総務室職員福利グループ

教育グループ 教育室教育企画グループ

制度グループ 財務・総務室サービスグループ

社会グループ 財務・総務室職員福利グループ

ホームページ担当 財務・総務室職員福利グループ

#### ※男女共同参画推進室

室長 相田 美砂子 (副理事(男女共同参画担当)) (平成21年12月まで)

坂田 桐子 (副理事(男女共同参画担当)) (平成22年1月から)

室員 松岡 直子

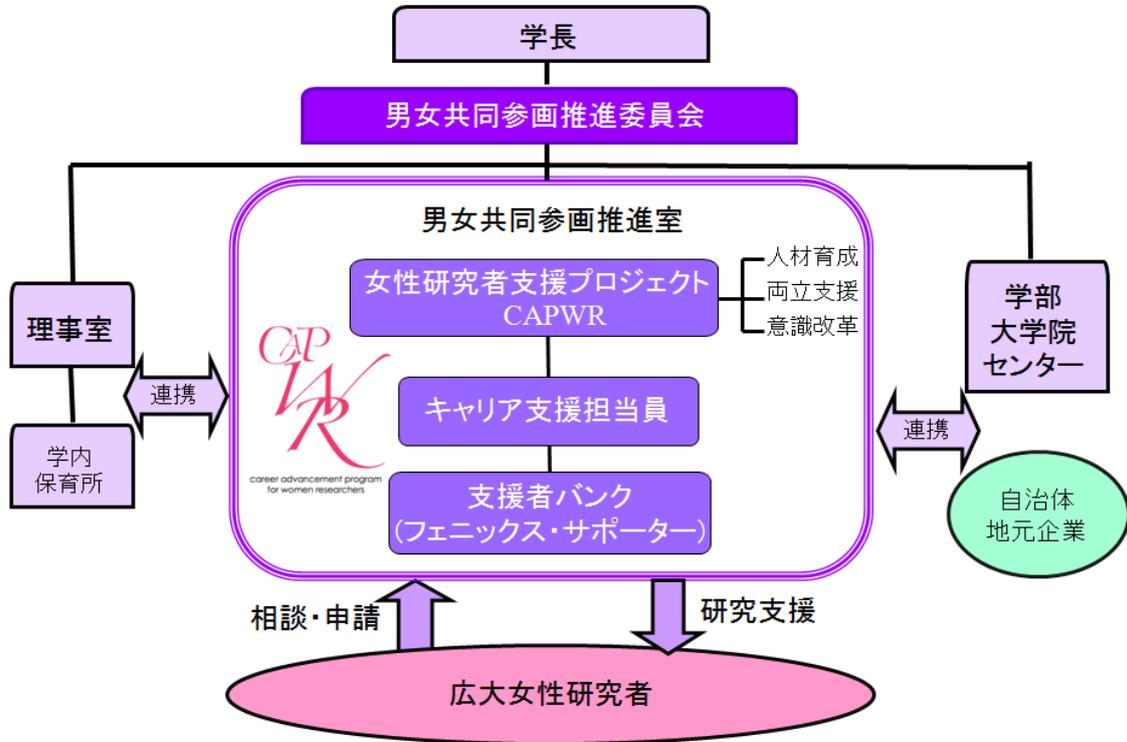
(財務・総務室職員福利グループ主査(男女共同参画・保育園主担当))

清水 絵美 (財務・総務室職員福利グループグループ員)

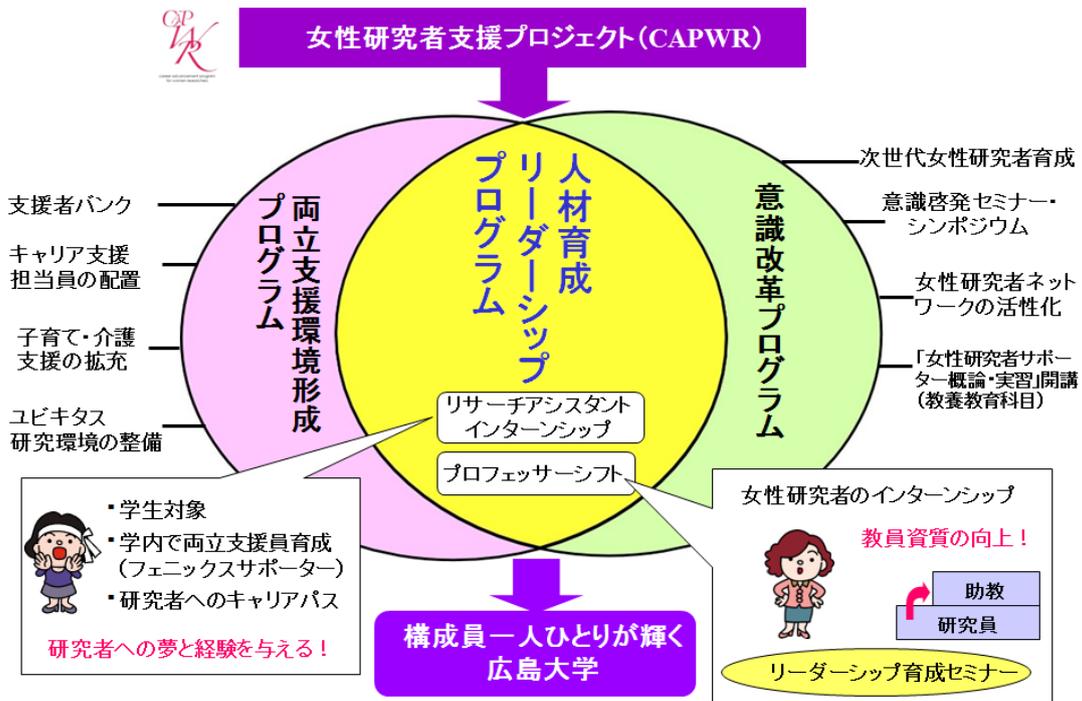
澤 和子

#### 4. 「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」の実施内容

##### 4-1. 実施体制図



##### 4-2. 実施内容図



4-3. 取組み履歴

取組内容	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
【実施体制】			
女性研究者支援プロジェクト CAPWR			→
【人材育成リーダーシッププログラム】			
リサーチアシスタントインターンシッププログラム	(試行) →	(継続実施)	(継続実施) →
リーダーシップ育成セミナーの実施および女性研究者奨励賞の採択	(実施)	(定期的実施)	(定期的実施) →
プロフェッサーシフトプログラム	(希望調査) →	(継続実施)	(継続実施) →
女子学生・院生の情報交換・交流会の開催		(実施)	(継続実施) →
【両立支援環境形成プログラム】			
支援者バンクの運営	(試験的運用) →	(定常運用)	(定常運用) →
キャリア支援担当員によるキャリア相談と本プログラムの利用促進	(実施)	(定常運用)	(定常運用) →
子育て支援	(ニーズ調査) →	学童保育(試行)	学童保育(試行) 病後児保育(試行)
ユビキタス研究環境の整備	(実施)	(継続実施)	(継続実施) →
【意識改革プログラム】			
次世代育成支援(出前講義・科学教室・ペアリングチューター等)	(実施)	(継続実施)	(継続実施) →
意識啓発セミナー・シンポジウムの開催	(実施)	(継続実施)	(継続実施) →
女性研究者ネットワークの活性化	(ML構築)	(定常運用)	(定常運用) →
学内研究環境調査	(調査実施)	(集計・分析) →	(学内意識調査) →

## 5. 人材育成リーダーシッププログラム

地方にある総合大学の特徴を活かし、優れた女性研究者の育成とリーダーとしての資質向上を図るため、次の四項目を実施した。

(1) 学生を対象とした「リサーチアシスタントインターンシップ」・「フェニックスサポーター認定プログラム」実施

担当責任者： 田島 文子（理学研究科／教授）（平成 19～20 年度）

担当責任者： 坂田 桐子（総合科学研究科／教授）（平成 21 年）

(2) 女性研究者対象のリーダーシップ養成セミナー及び広島大学女性研究者奨励賞の実施

担当責任者： 升島 努（医歯薬学総合研究科／教授）

(3) 女性研究者を対象とした「プロフェッサーシフト」の試行

担当責任者： 坂田 桐子（総合科学研究科／教授）

(4) 女子大学院生の情報交換・交流会の実施

担当責任者： 横山 美栄子（ハラスメント相談室／教授）

### 5-1. 学生を対象とした人材育成プログラム

子育て・介護等を担う女性研究者の研究活動の両立支援について理解し、研究活動の支援ができる学生を「フェニックスサポーター」として認定する。広島大学の教養教育科目として、全学部 2 年次生以上を対象とした「女性研究者サポーター概論」と「女性研究者サポーター実習」（それぞれ 1 単位）の 2 科目を平成 20 年度から開講し、この 2 科目を「フェニックスサポーター認定講義」とした。フェニックスサポーター認定者は、研究支援員（支援者バンクに登録し、女性研究者の研究・実験補助を行う）としてのフェロー種別のランクがアップする。

#### 5-1-1. 平成 19 年度

このプログラムの開始に際し出来るだけ広く周知を図るため、9 月末には学内のコミュニティーを対象に事業の説明会を開催し、11 月に行われた大学祭ではブースを設置し、在学生や地域住民を対象にチラシを配布するなどの広報活動を行った。また、フェニックスサポーター認定講義を実施するため、12 月までに講義内容の検討を行った。

##### ○フェニックスサポーター認定講義

平成 19 年度は試行として、次のセミナーを実施した。

日時 平成20年2月23日（土）9：30-16：20

場所 情報メディア教育研究センター・1階TV会議室（東広島キャンパス）

および原医研・会議室（霞キャンパス）

参加者数 8名（東広島キャンパス）、6名（霞キャンパス）

##### ○フェニックスサポーターの認定

上記セミナーの受講により、14 名をフェニックスサポーターとして認定した。

### 5-1-2. 平成 20 年度

○フェニックスサポーター認定講義

教養教育科目として「女性研究者サポーター概論」と「女性研究者サポーター実習」（それぞれ1単位）の2科目を開講した。

[1] 女性研究者サポーター概論（対象：学部2年次生以上）

日時 平成20年6月7日（土）・14日（土）8：45－16：05

場所 総合科学部J棟J306, 理学部B棟B603

受講者数 42名（単位取得 26名）

[2] 女性研究者サポーター実習（対象：「女性研究者サポーター概論」履修者）

日時 平成20年10月11日（土）・平成21年1月24日（土）9：00－12：00

場所 総合科学部J棟J306, A棟A704

この日時の他、受講生は随時6－7時間分の女性研究者支援実習を行った。

受講者数 10名（単位取得 10名）

○フェニックスサポーターの認定

上記2科目の受講により、平成20年度は10名をフェニックスサポーターとして認定した。

### 5-1-3. 平成 21 年度

○フェニックスサポーター認定講義

教養教育科目として「女性研究者サポーター概論」と「女性研究者サポーター実習」（それぞれ1単位）の2科目を開講した。

[1] 女性研究者サポーター概論（対象：学部2年次生以上）

日時 平成21年6月6日（土）・13日（土）8：45－16：05

場所 総合科学部J棟J306

受講者数 7名（単位取得 5名）

[2] 女性研究者サポーター実習（対象：「女性研究者サポーター概論」履修者）

日時 平成21年10月3日（土）9:00-12:00・平成22年1月22日（金）14:35-16:05

場所 総合科学部J棟J306, 男女共同参画推進室

この日時の他、受講生は随時7時間分の女性研究者支援実習を行った。

受講者数 1名（単位取得 1名）

○フェニックスサポーターの認定

上記2科目の受講により、平成21年度は1名をフェニックスサポーターとして認定した。

### 5-1-4. フェニックスサポーター数

実施期間のフェニックスサポーター数および男女別の内訳は次のとおりである。

	計	男性	女性
平成 19 年度	14	2	12
平成 20 年度	16	1	15
平成 21 年度	7	1	6

### 5-1-5. 学生対象テキストの作成

「女性研究者サポーター概論」の講義内容を元にして、学生対象のテキスト「あなたがあなたの道を歩むために ～広島大学の男女共同参画～」を作成（平成21年2月に初版，平成22年3月に改訂版を作成）し，これらの講義を受講しない学生にも広く配布した。

### 5-1-6. レポートの概要(受講によって何を学んだか)

女性研究者サポーター概論，女性研究者サポーター実習とも，成績評価のためにレポートを課している。レポートでは，「受講によって何を学んだか」を書くように求めている。それらの概要を示す。

○ 平成 20 年度

#### [1]女性研究者サポーター概論

単位取得者 26 名（女性 22 名，男性 4 名）中，受講の動機として，研究者という道を自分の進路の 1 つとして視野に入れていることを挙げた女性が 16 名いた。この 16 名中，講義を受けて，「女性が研究職に就くのは厳しいのではないか」という漠然とした不安が軽減された，または「自分も研究者としてやっていける」と感じた者が 8 名（例 1），女性研究者のイメージがポジティブになった者が 3 名（例 2），その他が 5 名であった。その他の者も，女性研究者支援の必要性和意義を理解した旨が記載されていた（例 3）。特に自分の進路等と関わりなく受講した女性 6 名についても，男女共同参画社会の重要性を再認識したり，仕事と家庭の両立に関する不安が低減されたり，女性研究者のプラス思考の生き方に感銘を受けたりなど，それぞれに本科目から学んだところは大きいようであった（例 4）。男性受講者 4 名は，女性研究者支援の意義と重要性を理解していた。また，受講者の大部分で，女性研究者支援という施策の必要性和男女共同参画社会実現の必要性を強調する記述があった。

このレポートでは，「受講動機」と「受講によって何を学んだか」を書くよう指示しただけであり，自分の進路に及ぼす影響について書くことを求めたわけではない。それにもかかわらず，大学院を進路の一つと考える女性受講者の半数（8 名）が自発的に研究職への見通しの改善について記述したことは，本科目が女性を研究職に向けてエンカレッジする効果を持っていたことを示すものであり，この点は特に大きな成果であると考えられる。

<例 1>

・自分が女性だから研究者への道をためらっているというわけではないが，将来の結婚や出産のことなどどうしても性別が関わってくるところは不安でもあった。しかし先生方のお話を聞いて，どちらかを考えるのではなく，仕事と家庭を両立させていくことも自分の努力次第で可能なんだと思えた。

・研究者を目指しているのであればあれこれ難しく考えずまずはやってみることに，その上で不都合が生じたらその時考えればよいとわかり，進路を考える上で気持ちが非常に楽になった。インターンシップに参加して研究生活を体験したり，後期の授業（女性研究者サポーター実習）も受講したりして，女性研究者として生きる道を模索したい。

<例 2>

・私は，研究している人達は人生研究一筋というイメージがあったが，今回講義をして下

さった先生方は皆とてもいきいきとして、とてもかっこいいと感じた。

<例3>

・この授業を受講して、このプロジェクトは女性研究者の支援を行うのではなく、家庭を持っている全ての研究者がそれぞれの能力を発揮しやすい研究環境をつくったり、支援者も自分の専門とは全く違った分野でも自分の研究スキルを磨くことにつながっていくということがよくわかった。

<例4>

・「仕事か育児・結婚の二択ではない」という話を聞き、将来家庭を持ったら自分は仕事はどうするのだろうという不安も和らいだ。

[2]女性研究者サポーター実習

単位取得者10名（女性9名、男性1名）中、自分の支援員としての成長やキャリアへの刺激を得たという者が4名（例1）、女性研究者支援の必要性を実感した者が6名（例2）いた。

<例1>

・今回研究支援の実習先となった先生の研究が私の専門分野ではないが関心があるものであったため、研究に少しでも携われたことが本当に嬉しく、またより関心が強くなった。支援実習は実習先の助けにはもちろんのこと、私たち支援サポーターの成長も促すことができるとてもよいものであると思う。

<例2>

・出産時にはどうしても一時的に職場を離れる必要があるし、研究が途切れるために仕事を辞めてしまう女性研究者もいるかもしれない。しかし、そういった出産・育児の期間を研究支援員がフォローすることでスムーズな研究ができる体制が当たり前のようになれば、出産および仕事復帰のしやすい職場環境ができると思うし、そうあるべきであると感じている。

○ 平成21年度

女性研究者サポーター概論単位取得者5名（全員女性）・女性研究者サポーター実習単位取得者1名は、ジェンダーへのこだわりがあった自分に気付いたり、女性研究者の生き方にエンカレッジされたり、男女共同参画推進の施策の必要性を理解したり、それぞれに授業の成果を述べていた（例）。平成21年度は、平成20年度よりジェンダー概念に関する講義の部分を増やしたため、自分の中の固定観念に気付いた学生が目立った。キャリア意識の涵養に効果があったと思われる。

<例>

・子どもを産むことは女性しかできないので、産休を男性が取ることはできない。だが、外にも協力できることはあると思う。社会のせいにして自分の現状を嘆くのではなく、自分で挑戦していきたいと、今回の授業を受けて思った。

・ビデオや先生方のお話を聴いて、仕事と子育ての大変さと、逆にそれを両立できる、ということを実感した。心のどこかで、仕事か子どもかと考えていた自分が、古い慣習に囚われていることに気づいた。

## 5-2. 女子学生・院生の情報交換・交流会の開催

教員を交えず、キャリア支援担当員と女子学生だけの会（BBC）を開催している。

【BBC=Brown Bag Chat=茶色の紙袋にランチを入れて集まっておしゃべりしよう！】

平成 19 年度 計 2 回 （東広島キャンパス：2 回，霞キャンパス：0 回）

13 名の女子学生が参加した

平成 20 年度 計 10 回 （東広島キャンパス：8 回，霞キャンパス：3 回）

各回 5～10 名 のべ 50 名の女子学生が参加した

平成 21 年度 計 10 回 （東広島キャンパス：9 回，霞キャンパス：1 回）

各回 1～7 名 のべ 24 名の女子学生が参加した

### 【総括】

- (1) BBC が定着するまでに、開催場所，周知方法，など様々な試みがあったが，平成 21 年度にはほぼ毎月 1 回，東広島キャンパスで開催する形となった。霞キャンパスは，昼食時に時間的ゆとりのある学生があまりないこと，共通の場所の確保も東広島に比較して困難であることなどから，定期的開催はなくし，セミナー等を交流の機会とすることとした。
- (2) 学生の感想としては，専攻の異なる女子院生どうしが知りあう機会は実際にはほとんどなく，自分の研究室以外のことが全然わからなかったという感想が多くみられた。研究生生活をしている人との情報交換や，お互いの悩み等を話して気分転換する場として機能していた。
- (3) 学部生の参加もあったが，大学院生活を知りたくて参加する学生が多かった。

### 【参加者の感想（抜粋）】

・今日は BBC に参加させて頂き，ありがとうございます。普段では絶対に聞くことのできない話を聞くことができ，参考になりました。研究者という職業の厳しさを生で知ることができて，とても有意義でした。

・私は大学生になったばかりで，何をすればいいのか分からずに不安に思っていたが，「今のうちにいろんなことを経験してみたらいいよ」とアドバイスを頂き，確かに今しかできないことってあるなあ，いろいろやってみればいいんだ，と思えるようになりました。本当に有意義な会をありがとうございました。

・ただ漠然と大学院までは進学したいという考えを持っていたので，実際に大学院へ進まれた先輩方のお話は現実味があって大変勉強になりました。また，文系の大学院についてのお話は全く聞いたことがなかったので大変興味深かったです。今後も，自分の将来について考えを深めていこうと思います。

・他の女子大学院生の方々のざっくばらんなお話が聞いてとても面白かったです。就職した周りの友だちや男子学生にはなかなか理解され難いことなどを話しあえる場として今後もまた，都合の合うときには是非参加できればと思います。

・進学となると周りの態度も変わり、悩み事も増えて来たときに、いろいろな話が聞け、話す場があったのでうれしかったです。研究室では、院生の数は多いもののドクターに進む数は、極端に少ないので、もう少し頻繁にあるとうれしいです。

・BBCに参加して、博士後期への進学とか、研究機構での就職とかなどについて、先輩から色々なアドバイスを聞かせていただいて、本当に楽しかったです。また、ぜひ参加させていただきたいと思います。

・BBCに参加して、友達も出来ましたし、ゴールがよくわからないままがんばっているのは、自分ひとりじゃないんだなと思えました。何か困ったことがあったら、頼る場所があるという安心感ができたことも、BBCに参加した意味があったと思います。幸いなことに、実際には、大した問題は起きませんでした。参加していた学部生が、サークルの後輩ということもあり、後輩に、研究や進路に関するアドバイス(?)ができたこともうれしかったです。これから、女性研究者としてがんばって行きたいと思います。どうもありがとうございました。

・時間があまりなくみなさんとも、なかなかゆっくりお話出来なくて少し残念でしたが、ご家庭をお持ちの院生の方のお話など、大変興味深かったです。

・20代後半になり、私の周りは結婚・出産ラッシュで色々考えることもあるのですが、私は編入学の道を選び卒業後もまだまだ勉強したいという考えは、年配の方や男性になかなか理解してもらえないこともあったので、このように女性のスキルアップを応援して下さる方がいるというのはとても心強かったです。

・過去のBBCで出会った人の中で、私は数名の友人を得ました。中にはひと月に1回くらい個人的にお会いして、将来のことや私生活のことを含めて励まし合っている友人もいます。BBCでなければ出会えなかった友人ですので、とても感謝しています。私のような人もきっといると思いますので、ぜひこの活動は今後も続けていっていただけたらと思います。

・大学院修了後、県外在住ですが、在学中にBBCには1度だけ参加して、そこで知り合った一人の方とはいまだに連絡を取り続けて、お互いに励ましあって研究を続けています。このような場を提供していただきまして、ありがとうございました。

### 5-3. 女性研究者対象のリーダーシップ育成セミナーの実施

#### 5-3-1. 女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー

女性研究者が独自に研究資金を獲得し、研究リーダーとして活躍できる機会を広げることがを目的として、連続3回の「女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー」を実施した。升島 努教授(広島大学大学院医歯薬学総合研究科)が全回を通じて講師を担当した。各回の内容は次のとおりである。

第1回 今年度の科研費の企画ワークショップ(各自の企画内容に対する発表と相互評価、研究企画とは何かについての講義と討議)

第2回 申請書書き上げワークショップ(第1回を踏まえて申請書を書き上げ、相互評価、企画と研究展開のあり方に関し講義と討議の上、各自改善)

第3回 申請書完成ワークショップ(完成させた申請書の相互評価を試み、評価結果を全員で考察、申請書の仕上げに関するノウハウの講義と討議)

セミナー参加対象は本学で研究を行う女性研究者であり、常勤、非常勤、職位は問わない。

#### 平成19年度

第1回 平成19年8月24日(金) 15:00-17:00

第2回 平成19年8月29日(水) 15:00-17:00

第3回 平成19年9月11日(火) 15:00-17:00

今年度は東広島キャンパスでのみ、開催した。セミナー参加者は21名であった。

#### 平成20年度

対策セミナー 3回シリーズに先立ち、前年度に申請した科研費等の採択結果を踏まえ、今後に向けて必要な準備や心構え(主にリベンジ対策)を目的としたセミナーを開催した。

平成20年4月28日(月) 15:00-17:00(東広島キャンパス)

対策セミナーの参加者は、7名であった。

第1回 平成20年8月19日(火) 15:00-17:00(東広島キャンパス)

平成20年8月22日(金) 15:00-17:00(霞キャンパス)

第2回 平成20年9月2日(火) 15:00-17:00(東広島キャンパス)

平成20年9月5日(金) 15:00-17:00(霞キャンパス)

第3回 平成20年9月16日(火) 15:00-17:00(東広島キャンパス)

平成20年9月19日(金) 15:00-17:00(霞キャンパス)

3回のセミナー参加者は38名(東広島:17名, 霞:21名)であった。

#### 平成21年度

対策セミナー 前年度の科研費等の結果を踏まえて、今後に向けてのセミナーを開催した。

平成21年4月30日(木) 15:00-17:00(東広島キャンパス)

平成21年5月1日(金) 15:00-17:00(霞キャンパス)

対策セミナーの参加者は、10名であった。

○東広島キャンパス

第1回…8月17日(月) 15:00-17:00

第2回…9月14日(月) 15:00-17:00

第3回…10月14日(水) 15:00-17:00

○霞キャンパス

第1回…8月19日(水) 15:00-17:00

第2回…9月15日(火) 15:00-17:00

第3回…9月 ~~28~~日(月) 15:00-17:00

3回のセミナー参加者は33名(東広島:18名, 霞:15名)であった。

### 5-3-2. 女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー参加者からの声

各年度の参加者からのアンケート結果の抜粋と、各年度に提出した科研費申請の採択結果を次に示す。

○平成19年度

・霞から東広島キャンパスまでは遠いので、参加するかどうか迷ったが、いただいた参考資料を見ているうちに次回への期待が高まり、2回目・3回目への参加意欲が湧いてきた。他分野間の研究者による評価は参考になったし、何より講師の先生の熱意のこもったお話に感動した。気持ちを込めること、自分の売りをアピールすることなど、今後の研究生活にも役立つことが多く、セミナーに参加してよかったと思う。

・まだ暑い中、霞から西条までバスと列車を乗り継いで3回、セミナーに参加しました。参加前は怯む気持ちが多々ありましたが、ワークショップ形式の会で女性研究者の方々とともに学ぶことで、どんどん前向きになることができました。具体的な科研費申請戦略を学んだことも大変重要な事でしたが、「夢に向かって自分らしさを積み重ねる研究」「研究はその人の人生そのもの」とのメッセージがこれからの研究生活の大きな糧になると思います。

・セミナーではお忙しい中ご指導いただき、心よりお礼申し上げます。萌芽研究に申請し、交付内定をいただきました。がんばって取り組んでまいりたいと思います。ありがとうございました。

○平成20年度

・昨年度「研究資金獲得実践セミナー」に参加させていただいた者です。平成21年度科学研究費補助金(若手研究(スタートアップ))の交付内定のお知らせが、学術企画グループより届きました。これも、升島先生や井上さん、いっしょにセミナーに参加された研究者の方々からの、ご指導、ご助言があったからこそだと思います。本当にありがとうございました。科研について分からないことだらけですが、とりあえず、今後がんばって研究できそうです。今後もセミナーに参加し、さらにいろいろと学びたいと思います。

・21年度科学研究費で、基盤研究B海外の内定をいただきました。これも先生の研究費取得セミナーでのご教示のおかげです。ありがとうございます。申請時の職名が助教でもあり、基盤研究Bはかなり敷居が高いとほとんど諦めておりましたが、先生からアドバイスいただいたことを忘れずに盛り込んだことが功を奏したものと思います。とても勉強になりました。今後ともご指導ご教示をお願い致します。

・このたび、科学研究費の内定をいただくことができました。ほとんど諦めていたので、結果を知りびっくりし、感激です。これもひとえに、研究資金獲得実践セミナーに参加させていただき、升島先生に科研費獲得に向けての心構えや細やかなテクニックをご指導いただいたおかげと、心からお礼申し上げます。本当に有難うございました。

#### ○平成21年度

・申請書作成のノウハウを得るという当初の目的を達成できたのはもちろんのこと、それ以外にも、升島先生の高い志を感じることができ、また、広島大学では多くの女性研究者が夢を持ち、様々な分野で努力しているということがわかり、大きな「やる気」をいただけたと思う。研究に対する姿勢、これからの戦略などを考えなおすきっかけになった。予想以上に得るところが多いセミナーだった。

・2年連続の参加です。いつも升島先生の申請書を参考に、お話しくさるので、とても参考になります。「タイトルや方法に自分らしさを出しなさい」との言葉に、研究の真髄をみた気がしました。このセミナーは、一度参加しただけで十分なものではなく、参加する度に何かを得て帰ることができるものだと感じました。

・参加させていただき、研究に対するモチベーションが急上昇しました。また、升島先生のお人柄と研究に対する真摯な態度にいたく感銘を受けました。もっと前から参加しておけばよかったと悔やまれますが、今回の参加を機に、いい申請書をつくっていけるよう努力したいと思います。このようなセミナーを企画して下さって、心からお礼申し上げます。研究室にいる学生は現在みな学部生ですので、院生になったら是非、このセミナーを受講するよう勧めたいと思います。

・4月に女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー「科研費等の結果を踏まえて、今後に向けての対策セミナー」を受講し、升島先生のアドバイスにより、財団に応募しましたところ採択されましたので、ご報告申し上げます。

この研究課題は、広島大学女性研究者奨励賞により採択された研究内容を発展させたものです。少額ではありますが、新たに始めた研究を継続、発展させることができます。研究資金獲得実践セミナー、広島大学女性研究者奨励賞では大変お世話になり、感謝致します。

・先生方のご尽力が私にとって非常に良い影響を与えていて、大変感謝しています。また、今年度から科研費で雇われている研究員も応募できるようになった科研費を実際に獲得するために現在努力している最中です。升島先生、横山先生、CAPWRの活動を支えてくださっている先生方にも感謝の気持ちをお伝えください。

### 5-3-3. 広島大学女性研究者奨励賞

「女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー」に参加し提出した提案書に基づいて、「広島大学女性研究者奨励賞」の受賞者を採択した。受賞者には、学長裁量経費から計 300 万円が授与された。

	女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー		女性研究者奨励賞
	参加者（東広島）	参加者（霞）	受賞者数
平成 19 年度	21	—	13
平成 20 年度	17	21	14
平成 21 年度	18	15	14

### 5-3-4. 女性研究者奨励賞受賞者の内訳と研究活動への効果

職位別人数	H19 受賞者	H20 受賞者	H21 受賞者
准教授	2	2	
講師	3		
助教	7	6	6
助手	1	1	2
特任助教			2
研究員		4	3
診療医		1	
技能職員			1
計	13	14	14

外部資金獲得数	H19 受賞者	H20 受賞者	H21 受賞者
H19 年度	4	4	6
H20 年度	6	10	6
H21 年度	10	8	10

科研費獲得人数	H19 受賞者	H20 受賞者	H21 受賞者
H19 年度	2	3	6
H20 年度	3	4	6
H21 年度	6	7	9

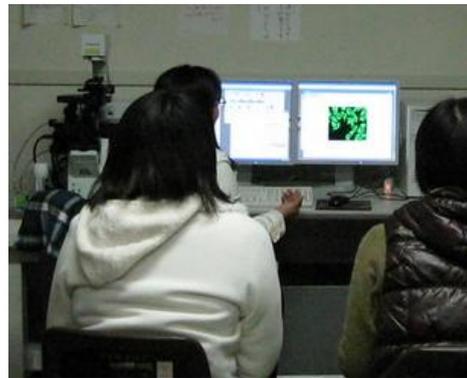
科研費獲得率	H19 受賞者	H20 受賞者	H21 受賞者
H19 年度	15.4%	21.4%	42.9%
H20 年度	25.0%	28.6%	42.9%
H21 年度	54.5%	53.8%	64.3%

各年度の受賞者は、次年度以降、高頻度で科研費等外部資金を獲得していることがわかる。

### 5-3-5. 女性研究者のためのスキルアップ講座

研究室を運営するリーダーは、研究の目的、方向性、更に結果を得るためのアプローチを構成員に明確に示し、得られた研究結果に関しては自ら責任をとることが要求される。科学分野の女性研究者がリーダーシップを発揮して研究成果を得るためには、常に新しく開発された技術を積極的に理解し、導入することにより、自らの研究チームの科学技術を時代に即して向上させる「スキルアップ」が必要である。しかし、子育てや介護等によって研究期間に空白が生じたり、女性研究者特有の小規模な研究室等の場合、研究室の運営、日々の研究、教育業務の遂行に追われがちになり、大規模な研究室で行われる学生や研究員による技術導入が遅れて、研究チームのスキルアップが停滞しがちになる。

人材育成リーダーシッププログラムの「女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー」でリーダーシップやマネジメントを学んだ女性研究者の専門は、生物系、医学系、農学系が全体の約70%を占めていた。そこで、これらバイオ系の女性研究者が使用する機会の多い顕微鏡の最新機器で全学共通機器の共焦点レーザー顕微鏡を使用したスキルアップ講座を以下のように開催した。



#### ○日時

- ・第1回 平成22年1月15日(金) 10時00分～15時00分
- ・第2回 平成22年2月23日(火) 10時00分～15時00分
- ・第3回 平成22年3月16日(火) 10時00分～15時00分

○場所 理学部 D棟115電顕室 (東広島キャンパス)

○講師 濱生 こずえ 助教 (広島大学大学院理学研究科)

○対象 本学女性研究者(常勤, 非常勤の職位は問わない)

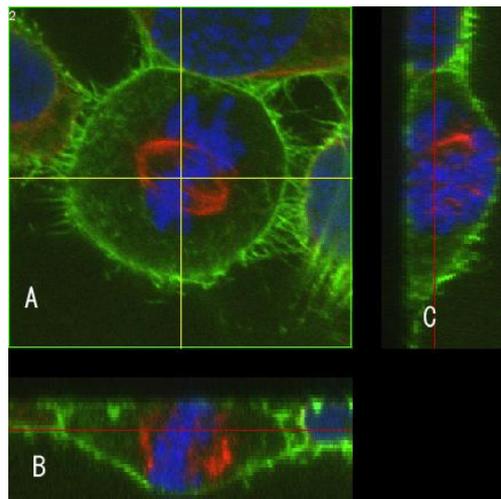
#### ○ 講座目的

共焦点レーザー顕微鏡(全学共通器機, オリンパスIX)の起動から終了までの基本的な操作方法(蛍光・微分干渉観察, 単色, 多重染色, 時間経過観察, 連続断層像等の画像の取得法, 画像の解析方法)を, 培養細胞の細胞骨格や細胞膜を間接免疫蛍光抗体法により染色し, 観察することにより学ぶ。併せて各自レーザー顕微鏡を用いた自習を行い, 最終的に自分の研究対象のサンプルの観察を実践し, 1人で使いこなす, 各自の研究成果につなげることを目指す。

## ○ 講座内容

- ・ 第1回 「初めてでも使える共焦点レーザー顕微鏡」 入門編 (1)  
共焦点レーザー顕微鏡の基本操作方法の説明，講師が準備した資料による実習
- ・ 第2回 「初めてでも使える共焦点レーザー顕微鏡」 入門編 (2)  
共焦点レーザー顕微鏡の基本操作方法と研究への応用に向けての説明，実習生からの各操作についての確認，質問に講師が答える形式での実習
- ・ 第3回 「初めてでも使える共焦点レーザー顕微鏡」 実践編  
受講生の自習結果の発表と今後の研究に向けての質疑応答

講師（女性研究者）は，平成19年度「女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー」を受講し，第1回広島大学奨励賞を受賞後，科学研究費補助金を獲得している。共焦点レーザー顕微鏡を用いた研究に精通していることから選任した。東広島キャンパスだけでなく，霞キャンパス，向島地区から受講生8人が集まり，このうち5人は研究資金獲得実践セミナー受講生で，広島大学奨励賞を受賞していた。自分の研究支援員と一緒に参加した受講生もいた。



右図写真説明：実習で観察したHeLa細胞の免疫染色（緑：F-アクチン，赤：チューブリン，青：核）A：XY画像（図BとCの赤色の線で切断），B：X軸方向のZ軸縦断面（図Aの黄色の横線で切断），C：Y軸方向のZ軸縦断面（図Aの黄色の縦線で切断）

### 5-3-6. 女性研究者のためのスキルアップ講座の参加者の声

#### 1. 参加した理由

- ・ 機器を借りることはできても，身近に教えを依頼できる人がいなかった。
- ・ 学生まかせでなく，自ら一から理解する必要があった。
- ・ 研究上必要な技術を習得したかった。

#### 2. 感想

- ・ 説明だけでなく，実際に手を動かしたので，身についた。
- ・ 講師が女性で分野が近かったので，有意義であった。
- ・ 質問し易い雰囲気ですべて具体的な使用方法がよくわかった。
- ・ 恒常的に利用している人が講師であったので，効果的であった。
- ・ 習熟に十分な自習時間が与えられ，効果的であった。

### 3. 研究生活における効果

- ・自分の研究にどのように取り入れるかを再考する機会になった。
- ・実際に使用する際に必要な時間、手間、ポイントがわかり、参考になった。
- ・今後の研究で利用できるツールの選択肢が広がった。
- ・「開催期間を空けて行われた複数回の講習」と、「実践のための自習時間」の組合せにより、予習・復習で、自分の実験に必要な課題や問題点を、より明確にしたうえで、解決策について講師に相談することができた。
- ・メーカーによる説明会では、一般向けの情報しか得ることが出来ないが、本講座では経験に裏打ちされたノウハウを得られたため、自分の研究を進める上でとても役立った。
- ・他の受講生の検鏡を見学することにより、どの程度まで解析可能なのか、効果的な解析に必要な課題を考えることができた
- ・今まで用いたことのない手法を学ぶことで、今後の研究の発展に役立つだけでなく、同じ分野や研究の方向性が似た研究者と交流を持ち、実際に研究の話をするきっかけが得られ、とても良かった。

### 4. リーダーシップに対する考えと本講座の有効性

- ・リーダーは、新たな知識やテクニックを取り入れて研究を進めるだけでなく、後進の指導も重要である。そのためには、テクニックの内容や難易度をしっかり理解しておくことが必要で、有意義であった。
- ・最先端の技術を学生に依頼することなく、責任を持って自ら身につけ、遂行する覚悟ができた。
- ・リーダーシップを発揮するためには、専門分野への深い理解と新技術を積極的に学びとる姿勢が不可欠で、本講座は重要であった。
- ・情報から疎外されがちな女性研究者にとって、このような講座は、女性研究者同士の情報交換の場になり、見逃せない効果の一つであった。
- ・リーダーシップとは、自分の強み・長所を知り、それを活かせる人が、将来を見据えたビジョンに基づいて行動を起こし、周りに影響を与えていくことで、新しい現象や技術の発見をしたパイオニアによって牽引されることが多いと思う。本講座で実践的な技術と経験に基づいたコツを習得することにより、自分の研究を発展させ、パイオニアになる可能性を高めることが出来た。
- ・リーダーシップとは、他者と関わりながら継続的に責任を持って自立的な行動をとることができることが大前提で、そのように行動しながら他の人を率いていくことである。今回は講師も受講生も女性で、教える側は教えることによって自信がつき、教わる側は新技術を学べて、両者共にスキルをアップさせることができ、リーダーシップにつながって有効性が高かったと思う。開催の趣旨をよく考え、私の思うリーダーシップを少しでも身につけていくことができるように責任を持って自立的に行動するようにしたい。

#### 5-4. プロフェッサーシフト制とポストアップ制の実施

##### プロフェッサーシフト

プロフェッサーシフトは、女性研究者が上位職を期限付きで体験できる制度であり、(1) 上位職として経験を積むことによって、女性研究者のリーダーシップとマネジメント能力を養うこと、(2) 教務履歴を作ることにより、当該女性研究者のキャリア向上の可能性を高めること、の2点を目的とする。平成20年度に、男女共同参画推進委員会の協力のもと、研究員や大学院生が助教職を体験するためのプロフェッサーシフト枠として、全学調整分から助教2名分の人員措置を受けた。

部局等から広島大学在籍の女性研究員・女子大学院生13名の推薦があった。この13名の中から、男女共同参画推進委員会で審議の上、助教2名を平成20年10月1日付けで採用した(任期：平成22年4月30日まで)。優秀な女性研究者を期限付きで助教に登用することで、当該女性研究者のキャリア向上に貢献するだけでなく、女子学生に対するロールモデルを提供することにもつながっている。なお、プロフェッサーシフト枠で登用された助教は、フェニックスサポーター認定講義など、男女共同参画推進に関する様々な取り組みに積極的に協力している。

##### 【当該研究科長からのコメント】

- ・助教の職についてしたことによって、入試の監督業務に加わるなど、教員業務の一部を体験できたことや、研究活動時間を十分に確保できたことは、大変有意義であったと思う。
- ・教育、研究、社会貢献の分野で、多くの成果をあげた。

##### ポストアップ

平成22年度からの各部局における教員の人件費管理のポイント制導入にあたり、平成22年度の全学調整分の配分を、女性教員採用支援として、助教採用4名分、准教授へのポストアップ2名分を措置することが、平成21年10月20日の役員会で承認され、同日の教育研究評議会で報告・了承された。

このうち、助教から准教授へのポストアップ2名分については、本学教員の上位職における女性比率が低いことを改善することを目的として、平成21年度から前倒して実施することとした。とくに、本学における理工農系の女性教員比率が低いことを鑑み、理工農系の女性教員(助教)を対象として、学内公募(締切：平成21年11月13日)した。

その結果、部局等から1名の推薦があった。男女共同参画推進委員会で審議の上、1名分の准教授枠の配分を決定した。その後、当該部局の教授会等において正式に選考され、平成22年2月1日付けで准教授となった。

## 6. 両立支援環境形成プログラム

女性研究者がキャリアを継続できるように研究・教育と育児・介護の両立を支援するため、次の四項目を実施した。

- (1) 「支援者バンク」の構築と試験的運用（研究・教育，育児・介護支援要員の需給）

担当責任者： 横山 美栄子（ハラスメント相談室／教授）

- (2) キャリア支援担当員の配置（多様で柔軟な就労形態の相談・提案・調整）

担当責任者： 横山 美栄子（ハラスメント相談室／教授）

- (3) 子育て支援の拡充（学内保育施設と学内・地域ネットワークを活用）

担当責任者： 横山 美栄子（ハラスメント相談室／教授）

- (4) ユビキタス研究環境の整備（在宅でも仕事ができる環境整備の支援）

担当責任者： 中坪 敬子（理学研究科／助教）（平成 19 年度）

中矢 礼美（留学生センター／准教授）（平成 20 年度以降）

### 6-1. 支援者バンクの運営

女性研究者の両立支援を行う人材を学内外から確保するため、「支援者バンク」を構築した。支援者バンクに登録した研究支援員には、各人の経歴やフェニックスサポーター認定の有無に応じて、フェローA からフェローD の種別をつけた（表 1）。

表 1 研究支援員の単価設定

種 別	時 給	条 件
フェローA	800 円	本学学部在学の学生若しくは短大卒業（常勤職員の初任給決定上これに相当するものを含む）以上の学外者
フェローB	900 円	フェローA でかつフェニックスサポーター認定者
フェローC	1,000 円	本学博士課程（前期）在学の学生もしくは大学卒業以上の学外者
フェローD	1,200 円	博士課程（後期）在学の学生，もしくは博士課程（前期）修了以上の学外者，又はフェローC でかつフェニックスサポーター認定者

フェニックスサポーターは、子育て・介護等を担う女性研究者の研究活動の両立支援について理解があり、研究活動の支援ができることとし、学部学生・大学院生・その他、男女の別は問わないこととした。フェニックスサポーター認定講義を受講することによって、フェニックスサポーターの資格が与えられる。フェニックスサポーターとして認定されると、支援者バンクに登録し女性研究者の研究・実験補助を行う研究支援員として働く場合、フェロー種別のランクがアップするというインセンティブを付与した。

支援者バンクと併せて、子育てや介護と研究の両立に悩む本学の女性研究者を対象として、研究支援員雇用制度を開始した。1件40万円を上限として研究支援員を雇用する費用を補助する。利用者と支援者バンク登録者とのマッチング、雇用の手続き、支援員雇用後の業務内容と勤務の管理は、キャリア支援担当員が行う。

### 6-1-1. 登録者数と利用者数

#### ○支援者バンク登録者数

	計	フェローA		フェローB		フェローC		フェローD	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
平成19年度	89名	7	24	1	8	8	14	6	18
平成20年度	93名	9	23	1	10	6	14	9	21
平成21年度	54名	5	10	0	5	4	13	6	11

#### ○研究支援員として勤務した登録者数

	計	フェローA		フェローB		フェローC		フェローD	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
平成19年度	77名	4	23	1	8	4	11	6	17
平成20年度	67名	5	16	1	7	2	12	7	17
平成21年度	51名	5	9	0	4	4	12	6	11

#### ○研究支援員雇用制度の実績

	公募回数	利用者数	雇用された支援員
平成19年度	3回	延べ42名	延べ79名
平成20年度	3回	延べ39名	延べ67名
平成21年度	1回	延べ26名	延べ53名

(平成21年度については、平成22年2月末日現在)

### 6-1-2. 利用者および支援員からの報告書概要

本プログラムの効果を評価するために、研究支援員雇用制度の利用期間終了後、各利用者および支援員からの報告書の提出を義務づけた。報告書の概要は以下のとおりである。

#### 【研究への効果】

「他の研究活動や文献研究の時間を持つことができた」「継続した実験を中断することなく研究継続が可能となった」「研究をこれまで以上に進めることができた」「余裕を持って研究を進めることができた」「計画的に研究を遂行できた」「支援者との議論で研究上の課題が明確になり具体的なアイデアを得られた」など研究上の効果を指摘する報告が多かった。

#### 【家庭への効果】

この制度を利用できたことで、「終業時間までに仕事を終え、子どもと一緒に過ごす時間を確保できた」「子どもの急病などでも実験を中断せずにすんだ」などまさに両立支援の目的に合致する報告が数件あった。

#### 【心理的効果】

「女性研究者のあるべき姿について考える機会を持てた」「支援員がポスドクとして研究者への道を歩むこととなり、女性研究者支援プログラムの一環としてすばらしい女性研究者を養成したいという使命感を持ち、接することができた」「次世代育成への意識が高まった」などの報告があった。研究支援そのものだけでなく、女性研究者のエンカレッジに繋がっていることに、この支援制度は心理的効果をあげていると評価できる。

#### 【研究支援員への効果】

最も多かったのがPCや実験技術などのスキルアップ効果に対する評価である。その他、研究に対する姿勢や考え方、方向性などを深め、キャリア形成への見通しを持つことができたという支援員も多かった。また、支援した研究者とともに研究成果を共有でき、学会発表や論文発表に繋がったとする支援者も複数あった。

さらに、支援者（学生）の中には、女性研究者の現状や苦勞を知る良い機会となり、今後の課題についても考えるようになったとする支援者もあった。

#### 【改善してほしい点】

「手続きや支援内容に制限が多く、業務時間や契約期間、支援内容などをもっと柔軟にしてほしい」という希望が多かった。そのほか、「雇用費用や雇用期間を増やしてほしい」「モデル事業に留まることなく、プロジェクト終了後も支援制度を継続して欲しい」などの要望もあった。

研究支援員雇用制度については、女性研究者の両立支援をできるだけ広く行うという趣旨のもとで、その利用者数もほぼ目標どおりとなった。直接的支援であることから概ね評価は肯定的であったといえる。

### 6-1-3. 利用者の内訳と研究活動への効果

職位	H19	H20	H21
教授	6	6	3
准教授	5	8	5
講師	1	1	2
助教	16	10	10
特任助教		1	1
助手	1	2	2
研究員	4	2	2
契約技術職員		1	1
計	33	31	26

支援要件	H19	H20	H21
育児	16	19	16
介護	10	5	3
その他	7	7	7
計	33	31	26

	H19	H20	H21
利用者数	33	31	26
外部資金獲得数	11	22	22
科研費獲得人数	10	14	16
科研費獲得率	30.3%	45.2%	61.5%

研究支援員雇用制度という両立支援を受けた女性研究者は、それにより外部資金を獲得する率が高まったことがわかる。

## 6-2. キャリア支援担当員の配置

キャリア支援担当員は、女性研究者の両立支援の促進とキャリア形成及び継続を確保すること等を目的として常駐している。業務内容は次のとおりである。

- (1) 勤務形態等に関する所属部署との調整
- (2) 休業する際の代替要員の雇用や在宅就労を可能とする職務形態の調整
- (3) キャリア形成や継続のための情報提供や助言
- (4) 上記を促進するための本事業の推進業務
- (5) 支援者バンクに登録する研究支援員の人材確保,
- (6) 支援を求める女性研究者との調整
- (7) ユビキタス研究環境や学内保育施設の利用, 学童保育の推進など, 両立支援に関するシステムづくりとその運営と利用推進

女性研究者の、出産・育児・介護等、家庭生活と研究生活の両立を支援するために、相談窓口を開設し、キャリア支援担当員が対応している。

○東広島キャンパス

時間： 毎週木曜日  
13時～17時

場所： 男女共同参画推進室

○霞キャンパス

時間： 毎週金曜日  
13時～17時

場所： 入院棟5階多目的室

### 【女性研究者のための相談窓口】

相談内容	件数
育児・介護との両立	4
両立支援	1
就学支援	2
職場環境	3
女子学生の就学環境	2
配偶者の再就職について	2
進学・就学について	4
子育て支援	4
計	22

(2008年7月開始時から2010年3月1日までの計)

## 女性研究者のための相談窓口を 始めました！

(2008年7月オープン)

女性研究者の皆さん  
研究と出産・育児・介護などの両立のための情報を提供します。  
保育所を探している、  
産休や育休の制度が分からない、  
介護や育児に忙しく研究に時間が取れない…など

**どうぞ 気軽にお立ち寄りください。**

- \*相談のある方は予約をしてください。  
・ 電話 : 082-424-4355  
・ メール : capwr55@hiroshima-u.ac.jp

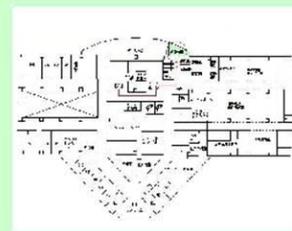
#### (東広島 相談窓口)

日時： 毎週木曜日  
13:00-17:00  
相談員： キャリア支援担当員  
場所： 男女共同参画推進室  
(広大の歴史の画廊)



#### (霞 相談窓口)

日時： 毎週金曜日  
13:00-17:00  
相談員： キャリア支援担当員  
場所： 入院棟5F多目的室  
(エレベーターを降り、リハビリの受付を  
左折したつきあたりの多目的室)



女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)  
〒739-8524 東広島市鏡山1丁目1-2  
tel/fax 082-424-4355  
E-mail capwr55@hiroshima-u.ac.jp  
<http://www.capwr.com/>

### 6-3. 子育て支援

東広島キャンパスでの学内保育園が平成20年3月に開園し、霞キャンパスに次いで、本学として二つ目の保育園となっている。本事業としては、大学がカバーしていない学童保育および病後児保育に対するニーズを把握するため、平成20年2月から3月にかけて、全教職員を対象とした職場環境調査（7-7章）を実施した。また、近隣自治体での学童保育実施状況、保育事業の委託業者への聴き取り調査等を行い、本学独自の学童保育および病後児保育事業の計画・実施にあたって、その課題をまとめた。

広島大学の構成員の就業と家庭生活の両立を支援することを目的として、次のように学童保育および病後児保育を実施した。

#### 6-3-1. 学童保育

学童（小学校1年生から6年生）を対象とし、夏休み等の長期休暇期間に、東広島キャンパス内において学童保育を実施した。学童への指導は、小学校教員と学童保育指導員経験者が中心となって担当し、教職課程を履修している教員志望の学生・大学院生がサポーターとして勤務した。学内の施設（生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター西条ステーション（農場）、自然科学研究支援開発センター、アクセシビリティセンター、工学部学校工場、広島大学技術センター理学部等部門（植物管理室）、メディア教育センター、総合博物館等）において体験学習を行なった。

	期間	学童数	指導員数	学生サポーター数
夏季学童保育	平成20年8月	17	4	17
春季学童保育	平成21年3月～4月	15	3	4
夏季学童保育	平成21年7月～8月	32	7	8
冬季学童保育	平成21年12月～1月	20	3	4
春季学童保育	平成22年3月～4月	19	5	6

#### 6-3-2. 学童保育の利用者の声

（平成22年2月までの利用者からのアンケート回答からの抜粋）

##### 1. 利用理由（述べ利用世帯数、1世帯一人以上が広島大学の構成員）

勤務のため（単身赴任・単親家庭含む）	57世帯
介護のため	1世帯
その他	1世帯
計	59世帯

##### 2. 保護者感想

- ・ 学内の種々の施設、教員が協力して対応していただき、感謝している。
- ・ 子供好きの将来教員を目指す学生さんがサポーターなので子供が会うのを楽しみにし

ていた。

- 子供達の為になる支援をいただくと、キャリアをあきらめずに進むことの出来る女性が少しでも多くなるのでは。
- 学生のためにもなるような企画で素晴らしい。
- 継続して行なっていただけることで、友人ができ、再会が楽しみである。
- 勤務場所の近くで子どもの安全が確保されて安心感があるので、仕事の効率が違った。
- 子どもが元気で楽しそうにしている話を聞けて、仕事と家庭生活を両立する上でたいへん励みになった。
- 学童保育と学内保育園をあわせて利用できたことで、仕事に集中できた。
- 夫婦が共に働ける環境づくりを分っている人が行なっていることが実感できた。
- 学童保育を利用するだけでなく、所属研究所と共に小学生向けの体験学習の開催ができたことを感謝している。又声をかけてください。
- 親の職場を子供が実際に身近に感じる事が出来てよかった。

### 3. 学生サポーターの感想

- 児童への接し方、集団の中での児童の行動、経験者の指導方法等が勉強になった。
- 男女の職業や子育ての違いについて考えるきっかけになった。
- 指示される学生から、指示をだすサポーターになったことで、自分で考え、行動し、責任をもつという、教職を目指す上で最も大切なことを学んだ。
- 指導員の方の児童への話し方がとても参考になった。また指導員の方が考えられた活動は、ただ楽しいだけでなく子どもたちの発達を促すようなものもあり、自分もこの発想力を身に着けたいと強く感じた。
- 大学の講義だけでは経験できないことを、経験できた。
- 学生サポーターの2回目には、子どもたちとのコミュニケーションに少し余裕ができた。



ビオトープ



総合博物館

### 6-3-3. 病後児保育

病後児保育は、地域のネットワークを活用することにより、学外の施設を利用した職員に利用料の補助を行う仕組み（「病後児保育利用料補助事業」）を試行した。この事業は就業と家庭生活の両立支援だけでなく、子どもが病気のため保育園へ通えない際に、病後児保育の利用という選択肢があることの周知と意識啓発にも役立った。

- ・事業内容：医療法人社団 博愛会（木阪病院）と業務請負契約を締結。
- ・補助内容：広島大学の職員が木阪病後児保育室（たんぽぽ）を利用した際の利用料（食事代を除く）を大学が支払う。
- ・利用対象者：広島大学に在職する職員で、現在、学内・市町村の保育園を利用している者。（契約職員・非常勤職員含む。）
- ・実施期間：平成22年2月15日～平成22年3月31日
- ・利用方法：利用の際は、木阪病後児保育室（たんぽぽ）の予約と木阪クリニック小児科の受診が必要となる。利用者は、木阪クリニック小児科受診時に受付にて、組合員証又は健康保険証及び職員証を提示するとともに、この度の「病後児保育利用料補助事業」での利用である旨を申し出る。また、利用者は、当該施設を利用開始した日の翌日までに、男女共同参画推進室へ施設の利用があった旨の連絡をする。（連絡日等が土日・祝日に当たる場合は、その翌日）。子ども1人あたり1回（3日を限度）の利用とする。
- ・利用者 職員3名（平成22年3月17日現在）

#### 【利用者の感想・要望】

- ・利用してみてよかった。木阪病後児保育室（たんぽぽ）をよく利用していたので、補助をいただけたのは大変ありがたかった。
- ・今後も仕事の都合上、休みを取ることが困難な時もあるので、補助事業を是非充実させて欲しい。
- ・学外の病後児施設は人数が限られているため予約が取れないこともある。学内から離れているため送迎に時間がかかり、定時に出て迎えがぎりぎりになるため、学内に病児・病後児施設の設置をして欲しい。

#### 6-4. ユビキタス研究環境の整備

出産予定、産休、育休、育児、介護等により大学における勤務時間に制約がある女性研究者に、大学以外でも研究、教育を可能にする「ユビキタス研究環境の整備」支援を行う。支援内容は、モバイルのノートパソコン、データ同期ソフト、ウェブカメラのリースである。

##### 6-4-1. ユビキタス環境整備制度利用者数

	公募回数	利用者数
平成 19 年度	3	12
平成 20 年度	2	12
平成 21 年度	0	12

##### 6-4-2. ユビキタス環境整備制度利用者の声

●遠隔地で資料を示しながら、学生の研究相談にのることが出来たので、非常に役に立ちました。

●現在 9 歳，7 歳，1 歳の子供の子育て中です。通常実験室で実験を行ってからメールのチェック，研究に関する情報収集などを行うと帰宅時間が遅くならざるを得ません。夕食の準備などを考えると子供がまだ小さいため夕方 5 時頃には帰宅を余儀なくされます。このたび PC（同期ソフト，office ソフト）をお借りしましたがそれを使って自宅でもメール送受信，論文検索などをすることができました。また子供が病気で休まないといけない時でも自宅からメールの送受信ができ大変助かりました。また第 3 子の産休中も PC をお借りできたので大学の事務関係の情報を把握することができ迅速に対応できました。

●PC(Mac および Windows)をお借りしました。出産等のブランクのため、自分の持っている古いパソコンが研究環境のスタンダードにあわなくなっており、パソコンの互換性や知識欠如に苦勞していました。ユビキタス環境整備制度のおかげで Mac および Windows の最新の OS が使用でき、現在の PC 機能やネット環境の趨勢についてゆけるようになったので、「PC を使用することそれ自体」が「現在の」研究環境へ復帰し、適応するための大きな力となりました。また、場所を選ばず自由にいつでも PC を使用できるので、論文検索や情報収集また論文作成に大変役立ちました。

●実験系の女性研究者にとって、研究にさく時間を確保すること、できれば最新の器機を使用して効率よく仕事をする事、そのうえで、家庭生活における責任も十分に果たすことが課題です。上記の PC，office，web カメラはこれらの課題を解決するうえで、大変役に立ちました。いつでもパソコンを持ち歩き、利用できることで研究時間を確保できました。自宅でデータ整理等の仕事にも使用できましたし、学外から大学や支援員への連絡に多用しました。web カメラの利用で、学内の別の建物での研究状況を把握することもできました。女性特有の小規模研究室では、特に有効であると思います。貸与期間中は、研究費からこれらの購入をするための支出をしなくて済み、研究費の面でも大変助かりました。また貸与されたのが持ち歩き可能な小型のノートパソコンであったため、研究や講義等の

プレゼンでも大変役に立ちました。古いパソコンをだましながら使っていたので、貸与していただき助かりました。

●出張や介護施設への移動時、在宅時にもメールなどで仕事上の連絡が可能になり、データを持ち帰って仕事を進められて、大変助かった。PCはプレゼンテーションやデータの整理ややり取りに使うことが多いため、PCとともに貸与されたOfficeソフトも必須であった。

●社会人院生の方と分析の相談をする際に、webカメラを用いた議論をすることができ、有効であった。分析結果の出力を口頭ではなく、画面に掲示されることにより、より詳細な指示が可能となった。特に、社会人院生の方は週末に研究を行わざるを得ないため、週末に実家に帰省した時（介護補助のため）、相互作用を行うことが数度あり、その重要性を認識した。

●指導学生や受講生にかかる迷惑を考えて、病気休暇、育児休暇、介護休暇をとりにくく考える教員は多いと考えます。ただでさえ、家族の世話を主に担っている女性研究者は、通常、柔軟な業務体制に対応できず、周囲の男性教員に気を使いながら仕事をしておりません。このような研究環境が整備されることで、周囲への負担が軽くなり、心理的、物理的、時間的に助けられます。

●基本的に空き時間は、仕事をするにしているもので、モバイルのノートパソコンの持ち歩きは必須です。週末、学会等で出張の際は持ち歩いて論文、報告書の作成、電子メール（Web mail）に使用しています。新しい機種を貸与していただいたので、デジタルデータ等の画像処理で威力を発揮しました。研究室では仕事の都合上Macを使用していますが、官公庁の文書はwindowsが多いので、vistaを利用しています。Web cameraは、学内センターで実験材料を飼育しているので、飼育状況のチェックに当初利用しましたが、実験室の湿度が高いため、常時接続は断念しましたが、生育状況のチェックに利用しています。

●研究室でパソコンを使って行う作業を、自宅においてもほぼ同じ環境でできるようになった。そのため、定時に帰ることが可能になり、子どもとの時間が確保できるようになった。今後はウェブカメラを活用したいと考えている。PC・同期ソフト・officeソフトを借りて、良かった点・役に立った点は、二つあります。一つ目は、育児のため研究室に滞在できない時でも、継続的に研究を進められたことです。私の場合、日常的な子供の保育所送迎や育児に加えて、時には病気の子供を看病するために、研究室の滞在時間が限られることが多々ありました。しかし、本制度のおかげで、申請書や学会・セミナー発表用原稿などの書類作成、発表用スライドの作成、論文検索等の情報収集を、在宅中に行うことができました。そのため、仕事を完全にストップせずに済み、育児のために仕事の効率が下がるのを抑える効果があったと思います。

二つ目は、最新機種の軽量型PCを貸与されたことです。学会やセミナー発表の際、軽量型PCだったので持ち運びが大変楽でした。また、最新型PCは液晶プロジェクターとの接続設定も自動でできたため、予想以上に使い勝手が良く、とても助かりました。

以上の理由で、ユビキタス環境整備制度は大変役に立ちました。

今後も、本制度のようなPC・ソフトの貸与が、対象者をさらに拡大して（例えば、育児・介護中の学部生・大学院生も含む等）、継続的に可能になれば、素晴らしいと思います。

## 7. 意識改革プログラム

### 7-1. 次世代育成支援

次世代女性研究者育成を目的として、高校への出前講義、女子高生対象の体験科学講座、小中高生対象の科学教室、女子高生対象の相談コーナー、ペアリングチューター制を実施した。

	出前講義	体験科学講座	科学教室等	ペアリングチューター
平成 19 年度	2 回	—	—	6 組
平成 20 年度	2 回	3 回	2 回	6 組
平成 21 年度	2 回	1 回	2 回	4 組

#### 7-1-1. 高校への出前講義

○平成 19 年度

・第 1 回出前講義：平成 19 年 10 月 24 日（水）

場所： 広島県立呉宮原高等学校（広島）

講義名：「コンピュータで化学する」

（参加生徒 13 名）（内訳：1 年生 4 名， 2 年生：7 名， 3 年生：2 名）

16 分野の講義テーマの中から、広島大学が開講した「化学：コンピュータで化学する」を選択した 13 名が受講した。受講者を対象にアンケート調査を実施した。多数の開講分野から、この授業を受講した理由をたずねたところ「授業の内容に興味があったから」や「将来の進路選択の参考になると思ったから」との回答が多かった。自発的に選択・受講しており、かつ、自身の進路選択の参考にしようという目的意識がうかがえる。この受講生の期待に沿う形の授業が実施できたかどうかをたずねたところ、受講生の多くが「参考になった」「参加してよかった」と回答しており、目的意識を持って参加した生徒の要望に沿う形での授業を実施することができたことがわかる。また、「楽しかった」との回答も多く、化学の楽しさに触れる機会が提供できたと思われる。

受講してみても感想では「化学はとても面白く、奥が深いということがわかり興味が湧いてきた」「化学を学びたいと思った」「化学の『どうしてそうなるのか』という根本に触れられた気がして、興味がさらに深まった」などの化学分野への興味関心が高まったという意見が多かった。さらに、自分たちに身近なパソコンを使って量子力学を学ぶという実体験を通して「驚いた」「参考になった」と化学をより自分たちの身近に感じることができたという意見も多くみられた。

- ・第2回出前講義：平成19年12月14日(金)  
場所：鳥取県立鳥取東高等学校（鳥取）  
講義名：「ホスト・ゲストの化学」（参加生徒40名）

まず基礎的な知識を与えるために本学の教員が30分程度授業を行い、その後、本学の女子大学院生(M2)が自分の研究を基に授業を行った。授業の後半では、講師を務めた女子大学院生に対して、高校生からのインタビューの時間を設けた。インタビューでは女子生徒からの質問が目立ち(男女比1:2.5)、中でも進路に関する質問(「なぜ理系を、理学部を、化学科を選んだのか」や「なぜ大学院に進学しようと思ったのか」など)が目立った。

鳥取東高等学校はSSH校(スーパーサイエンスハイスクール指定校)である。全国のSSH校では講師として多くの大学教員を招いて講演会を開催しているが、この3年間、講師として招かれている者の80%は男性である。この傾向はほとんどのSSH校において同様であり、平成18年度のSSH校での女性研究者の講演は全体の5%にも満たない。高校現場でのこの意識の低さこそが、女性研究者育成上の第一の問題であり克服しなければならない課題である。このような観点から、女子高校生が「手を伸ばせば届くくらいの位置にいる女性の大学院生」をロールモデルとして高校の現場に提示することは効果的であると考えられる。

このことは、授業の感想についてのアンケートからも見て取ることができる。例えば女子生徒の感想には、「自分も、今後、講師のように研究できたらいいなと思った。」「あきらめずに、自分も頑張ろうと思った」など、自分の進路と対比させながら授業を聴いていたことがうかがえる感想が65%程度あった。しかしながら男子生徒の中には、そのような感想が皆無であった。また「授業の感想」は自由記述であったが、女子生徒はほぼ全員が回答しているのに対し、男子生徒は約6割程度しか回答していなかった。このような自由記述の場合、一般には男子生徒の方が回答率は高いことを鑑みると、この鳥取東高校での結果は、女性が講師であることによる特徴的な傾向であると考えられることができる。

以上のような観点から、女子生徒が「手を伸ばせば届くくらいの位置にいる女性の大学院生」が、その母校で講演することは次世代の「若手女性研究者の卵」を育成する上で、効果的な取り組みであるといえる。

(アンケート結果抜粋)

授業で印象に残った事について

- ・自分で設計して作るのが面白そうだった
- ・分子と組み合わせ、新しい性質をつくり出すということは、すごいと思った
- ・自分たちが欲しい性質の分子をつくれるなんてとてもすごいと思った
- ・化学は高校でやるのがすべてではなく、ユニークな発想もできる学問

授業の感想

- ・化学がおもしろそうだと初めて思った
- ・高校の授業とは、おもしろさが全然ちがうと思った
- ・化学の世界は奥が深いと思った

○平成 20 年度

・第 1 回出前講義：平成 20 年 6 月 19 日（木）

場所： ノートルダム清心高等学校（広島）

- 講義
- |   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 心臓・血管の病気を知ろうー未来の治療も含めて                       | (1 年生 40 名 2 年生 42 名) |
| 2. 分子性磁性体ー分子を設計して磁石を作る                          | (1 年生 16 名 2 年生 13 名) |
| 3. 体の健康はお口からー歯周病の発症機序, 全身疾患との関わり, 食品を用いた<br>予防法 | (1 年生 22 名 2 年生 5 名)  |
| 4. アフリカが語る H I Vーエイズ・映画・演劇・文学・メモリーワーク           | (1 年生 23 名 2 年生 36 名) |
| 5. 食品の安全・安心を考えるー理系と文系の間でー                       | (1 年生 17 名 2 年生 16 名) |

参加者：230 名（1 年生：118 名・2 年生：112 名）

アンケート結果抜粋

1. 「この授業を受講することになったきっかけ」（複数回答可）

・学校の理科の先生に勧められて	0 名
・学校の先生（理科以外）に勧められて	0 名
・友達に誘われて	8 名
・授業内容に興味があったから	180 名
・将来の進路選択の参考になると思って	141 名
2. 「講師と話をしてみての感想」（複数回答可）

・楽しかった	104 名
・難しかった	66 名
・この専門分野への関心が深まった	127 名
・考えさせられた	133 名
・女性研究者へのイメージが変わった	25 名
・この分野への関心を失った	2 名
・その他	2 名
3. 「この授業を通して気づいたこと、感じたこと、自分にとってためになったことなど」
  - ・専門分野への関心が深まった
  - ・女性研究者へのイメージが変わった
  - ・理系と文系の区別がはっきりできない分野や両方の知識が必要な分野がある事を知った
  - ・有機物でも磁石が作れるということに驚き感動した
  - ・今いやなことでも将来好きになるかもしれないと気づきました
  - ・難しいと感じてしまうことも少なくなかったが、分子に対してより興味を持つことができたので、授業を受けてよかったと思う

- ・第2回出前講義：平成20年10月27日(月)  
場所：清心女子高等学校（岡山）  
講義名：「分子性磁性体—分子を設計して磁石を作る」

参加者：19名（2年生）

アンケート結果抜粋

1. 参加したきっかけ（複数回答）：授業のため
  - ・進路選択の参考 19名
  - ・学校の先生の勧め 19名
  - ・友人の勧め 0名
  - ・家族の勧め 0名
2. 参加した感想（複数回答）
  - ・楽しかった 11名
  - ・難しかった 14名
  - ・この分野への関心が深まった 5名
  - ・考えさせられた 3名
  - ・女性研究者へのイメージが変わった 6名
3. 気づいたこと、ためになったことなど
  - ・自分で研究することの面白さが少し分かった気がする
  - ・話の内容は難しかったけど、実験はとても楽しかったです
  - ・本格的な実験をすることができて面白かった
  - ・高校ではなかなか実験ができないのでよかった



○平成 21 年度

・第 1 回出前講義：平成 21 年 9 月 30 日（水）

場所： 広島県立呉三津田高等学校（広島県）

講義名：「コンピュータで化学する」

参加者：16 名

内訳 女性 4 名（1 年：2 名・2 年：2 名），男性 12 名（1 年：10 名・2 年：2 名）

アンケート結果抜粋

①「この授業を受講することになったきっかけ」（複数回答可）

- |                      |    |
|----------------------|----|
| 1. 学校の理科の先生に勧められて    | 1  |
| 2. 学校の先生（理科以外）に勧められて | 0  |
| 3. 友達に誘われて           | 0  |
| 4. 授業内容に興味があったから     | 15 |
| 5. 将来の進路選択の参考になると思って | 7  |

②「講師と話をしてみての感想」（複数回答可）

- |             |    |
|-------------|----|
| 1. 参考になった   | 10 |
| 2. 楽しかった    | 12 |
| 3. 参加してよかった | 13 |
| 4. 難しかった    | 3  |

③「この授業を通して気づいたこと，感じたこと，自分にとってためになったことなど」

- ・化学は他の理系を深くつながっていることがわかった。
- ・コンピュータで化学するということが，受ける前はよく分からなかったが，見えないもの，自然には存在しにくいものを見えるようになるということが，とても面白く興味を引かれた。
- ・大学の研究は専門的で，面白そうだと感じた。大学への学習内容への興味が湧いた。
- ・化学は物理や生物や数学とも関係していることが分かり参考になった。
- ・化学は難しいと思っていたが，知識を持って研究すれば楽しいことがわかった。
- ・化学への興味がより深まった。

④「その他，感想や希望など」

- ・高校の授業とは違い，実技などがあってとても楽しかった。もう少し大学でやる化学の話を知りたい。
- ・説明とソフトウェアを使った講義でとてもよかった。
- ・わかりやすく教えてくださりよかった。広島大学を目指してがんばります。
- ・わかりやすく，楽しく授業ができました。
- ・分子モデルが自分で作れて，また目で見れることで興味がわいた。

- ・第2回出前講義：平成21年10月6日（火）  
場所：広島県立尾道北高等学校（広島県）  
講義名：「コンピュータで化学する」  
参加者：107名内訳 女性42名（2年），男性65名（2年）

アンケート結果抜粋

- ①「この授業を受講することになったきっかけ」（複数回答可）
- |                      |    |
|----------------------|----|
| 1. 学校の理科の先生に勧められて    | 15 |
| 2. 学校の先生（理科以外）に勧められて | 61 |
| 3. 友達に誘われて           | 2  |
| 4. 授業内容に興味があったから     | 4  |
| 5. 将来の進路選択の参考になると思って | 16 |
- ②「講師と話をしてみての感想」（複数回答可）
- |             |    |
|-------------|----|
| 1. 参考になった   | 55 |
| 2. 楽しかった    | 10 |
| 3. 参加してよかった | 17 |
| 4. 難しかった    | 63 |
- ③「この授業を通して気づいたこと、感じたこと、自分にとってためになったことなど」
- ・化学、物理、数学がどのように関わっているかを学ぶことができよかった。（多数）
  - ・化学は暗記科目ではなく、考えて理解するものだと分かった。（多数）
  - ・化学を難しいものだととらえず、自分から積極的に学ぶようにしたい。
  - ・理学部化学科に興味があるので、とても参考になりました。
  - ・化学の奥深さを少しでも理解できてよかった。
  - ・コンピュータでリアルな分子を見ることができ勉強になった。
- ④「その他、感想や希望などがあれば、ぜひ聞かせてください。」
- ・大学での研究が詳しいものだとわかり、大学に入って勉強することが楽しみになってきました。
  - ・また受講したいです。
  - ・コンピュータを使い、分子を作ったり、振動する様子がおもしろかった。
  - ・難しい話だったが、おもしろかった。
  - ・化学に対して、ますます興味がわいた。（多数）
  - ・化学についてもっと知りたくなりました。
  - ・化学について、自分とは違う意見や見解を聞かせていただき、とても参考になりました。

## 7-1-2. 女子高生のための体験科学講座

### ○第1回体験科学講座

日時 平成20年8月12日(火) 13:00~17:00

場所 広島大学理学部 (担当教員5名 支援員13名)

講義:「私と研究」

実習・コアコース(1部・2部)「ヒトの遺伝子の違いを調べてみましょう！」

・サブコース A「分子を目で動かして！」

B「動物の体づくり！」

C「月のうさぎは何歳?!」

参加者:女子高生15名 (1年生:4名, 2年生:6名, 3年生:5名)

アンケート結果抜粋

#### 1. 参加したきっかけ(複数回答)

- ・進路選択の参考 12名
- ・学校の先生の勧め 7名
- ・家族の勧め 0名
- ・友人の勧め 4名

#### 2. コース別参加者数: Aコース6名, Bコース3名, Cコース6名

#### 3. 参加した感想(複数回答)

- ・参考になった 11名
- ・楽しかった 16名
- ・参加してよかった 15名

#### 4. 気づいたこと, ためになったことなど

- ・化学に対してさらに興味がわきました
- ・将来理学部に入って学びたいと思った
- ・生物についてさらに興味がわきました。進路を考える参考にしたいと思います
- ・地球惑星システム学科に入学して研究を行いたいと意欲がさらに高まった
- ・コアコースが凄く楽しかったです
- ・研究者の先生がどうして研究職に就いたかというお話を聞けて, とてもためになりました



○第2回体験科学講座

日時 平成20年12月24日(水) 12:20~16:30

場所 広島大学理学部(担当教員7名 支援員11名)

実習

- ・コアコース「分子の形と色～指示薬の色はなぜ変わる?～」
- ・サブコース A「宇宙の始まりと対称性」  
B「月のうさぎは何歳?!」  
C「動物の体づくり!」

参加者:女子高生20名 (1年生:4名・2年生:14名・3年生:2名)

アンケート結果抜粋

1. 参加したきっかけ(複数回答)
  - ・進路選択の参考 12名
  - ・学校の先生の勧め 13名
  - ・家族の勧め 0名
  - ・友人の勧め 1名
2. コース別参加者数:Aコース7名, Bコース6名, Cコース7名
3. 参加した感想(複数回答)
  - ・参考になった 10名
  - ・楽しかった 19名
  - ・参加してよかった 14名
4. 気づいたこと, ためになったことなど
  - ・化学の深さがわかり, 化学の楽しさに気付きました
  - ・大学での実験はすごく深くて今迄にしたどんな実験よりも面白かった



○第3回 体験科学講座

日時 平成21年3月14日(土) 10:30~17:00

場所 広島大学生物生産学部(担当教員7名 支援員8名)

お断り:「食の安全, 安心を科学するために, 我々はまず何から始めるべきなのか」

実習 サブコース 1「酵母細胞内タンパク質の蛍光顕微鏡観察」

2「フレッシュチーズを作しましょう」

3「ダイエットを科学する」

4「植物の光合成速度を測ってみよう」

講義:「社会科学も科学です~検証:偽装表示や食への不安~」

参加者:女子高生52名 (1年生:9名・2年生:43名)

アンケート結果抜粋

1. 参加したきっかけ(複数回答)

- ・進路選択の参考 23名
- ・学校の先生の勧め 28名
- ・家族の勧め 1名
- ・友人の勧め 10名

2. コース別参加者数:1コース6名, 2コース20名, 3コース16名, 4コース10名

3. 参加した感想(複数回答)

- ・参考になった 21名
- ・楽しかった 40名
- ・参加してよかった 27名

4. 気づいたこと, ためになったことなど

- ・今まであまりGFPについて理解できていなかったけど, 今日の水田先生との実験でごく良く分かりました
- ・羊の血液を採取したのが難しかったです
- ・科学者や理科系の仕事に就きたいと思っている女の子はこんなにいるのだなと思った
- ・生物生産学部に入ろうと思っていたが, その気持ちが一層増しました



・第4回体験科学講座

日時 平成21年8月11日(火) 12:20~17:00

場所: 広島大学薬学部(担当教員7名・支援員11名)

実習 Aコース「クスリの生体内運命 ~医薬品の代謝シュミレーション~」

Bコース「細胞を観る, 分子を調べる」

Cコース「生体反応の不思議を知ろう ~薬物による心臓活動の変化~」

Dコース「薬はどうやって体の中に入るのか? ~タンパク質性医薬品の細胞への取り込み~」

参加者: 女子高生 46名 (1年生: 6名・2年生: 25名・3年生: 15名)

アンケート結果抜粋

1. 参加したきっかけ(複数回答)

- ・進路選択の参考 36名
- ・学校の先生の勧め 28名
- ・家族の勧め 3名
- ・友人の勧め 7名
- ・その他 1名

2. コース別参加者数: Aコース13名, Bコース15名, Cコース8名, Dコース10名

3. 参加した感想(複数回答)

- ・参考になった 31名
- ・楽しかった 39名
- ・参加してよかった 26名
- ・難しかった 14名
- ・理解できた 10名

4. 気づいたこと, ためになったことなど

- ・今日の講座に参加して, 実際に体験してみると, 具体的なイメージがつかめたのでとても参考になりました。ありがとうございました。
- ・具体的に, 大学でどんなことを勉強・研究しているのかを知ることができてよかった。
- ・高校では体験できないことや, 高校の科学等の教室にはない道具などが置いてあってとても新鮮でした。単純な作業の中にも細かい作業がたくさんあって, 1人では出来ないことだと思いました。今日, 科学講座に参加して, よりいっそう薬学に興味を持つことが出来ました。
- ・細胞を吸い取った瞬間がすごかったです。高校ではできないような実験ができてとてもよかったと思います。やさしく丁寧に教えてくださったので, 分かりやすかったです。友達もできて楽しかったです。これから勉強をがんばって薬学部を目指そうと思います。
- ・大学で何を研究しているかがわかりました。学生の方も優しくて, 楽しかったです。
- ・普段学校では行えないような実験でしたので, 興味を持って実験に参加することができました。奥深いなと改めて感じました。

### 7-1-3. 化学展にコーナー出展

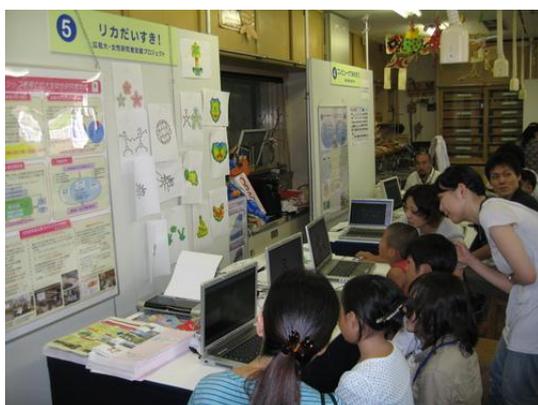
○「リカだいすき！」コーナーを出展

日時：平成20年7月25日(金) -27日(日)

場所：広島市こども文化科学館

参加者：約260名

広島大学の教員1名と支援員18名が、日本化学会中国四国支部主催「おもしろワクワク化学の世界'08 広島化学展」に「リカだいすき！」コーナーを出展した。3日間で、参加した小・中・高校生、約260名が大学の理科実験を体験した。「リカだいすき！」というタイトルを案内ちらしで見つけて楽しみにして来た小学生の女の子たちは、学生の説明を熱心に聞きながら初めて見る分子の世界に驚いていた。化学の楽しさを知る良いきっかけになった。



#### 保護者の感想

・小学校4年生の子どもと参加しました。コンピュータ上で分子模型ができたことが印象に残ったようです。「酸素には腕が2本あって、炭素には4本あるんだよ。メタンは、炭素の4本のうでに、水素がついている面白い形をしている。アルコールの分子模型も作っちゃった。」と説明してくれました。子供向けの科学教室は、将来の夢を与え、重要だと思いますので、今後も続けてください。

○「リカとコンピュータ」コーナーを出展

日時：平成21年10月24日（土）・25日（日）

場所：広島市こども文化科学館

参加者：約200名

広島大学の教員1名と支援員10名が、日本化学会中国四国支部主催「おもしろワクワク化学の世界'09 広島化学展 mini 版」に「リカとコンピュータ」という題目で出展した。量子化学計算のソフトウェア『Spartan』を使用して、水・二酸化炭素などを例に、身の回りの分子がどのようにできているか紹介し、簡単な分子作成を体験してもらった。分子ということばを知らない小学生に、身近なものに結び付けて説明すると興味を持ち、化学の世界を楽しんでもらえた。

対応した学生にとっては、小学生・中学生に伝えるための手段や方法を考える良い機会となり、コミュニケーション能力の向上に役立った。



#### 7-1-4. 女子高校生むけの相談コーナー

広島大学オープンキャンパスにおいて「女子高校生むけの相談コーナー」を開設した。

・平成 20 年度

日時 2008 年 8 月 7 日（木）・8 日（金）15：30-17：30

場所 広島大学男女共同参画推進室 研修室

広島大学の教員 3 名と女子学生 3 名およびオープンキャンパスに来校した女子高校生 8 名によるディスカッション形式の相談コーナーを開設した。女子高生からの疑問や質問に対して女性教員（理学研究科・留学生センター・ハラスメント相談室各 1 名）と女子学生（女子学生交流会に参加している学部・大学院博士課程前・後期学生各 1 名）が回答した。参加者からは異なる分野のさまざまな意見や考えを聞くことができ将来の進路選択が広がったと好評であった。アンケートで「参加目的を達成した」は 100%であった。

「将来なりたい職業に就くための話などを詳しく教えてくれたのでとても助かった」「文理選択に迷っていて参加したが、とりあえずやりたいことからどの方面に進むか決めるとよいと感じました」などの感想があった。



・平成 21 年度

日時 2009 年 8 月 7 日 (金)

場所： (10:00~11:30) 学士会館 2 階レセプションホール  
(15:00~16:00) 先端物質科学研究科 4 階講義室

参加者： 79 名

(女子高校生 74 名 (1 年：54 名・2 年：13 名・3 年：7 名), 教諭 4 名, 保護者 1 名)

大学生活に対し不安や疑問に思っている事について, お茶を飲みながら女子学生・女子院  
生・女性教員が質問に答えた。(担当教員 8 名, 支援員 8 名)



#### アンケート結果

○「参加した目標は達成されましたか」(生徒のアンケート回答者 74 名)

- ・十分達成された 35 名
- ・達成された 39 名

○「相談コーナーで相談して気づいたこと, 感じたこと, 自分にとってためになったこと」  
(抜粋)

- ・ 在学生の方の話を聞いて広島大学がどのような所かイメージできた。
- ・ 将来についてのリアルなアドバイスなどが聞いてとてもよかった。(多数)
- ・ 自分の行きたい学部の詳細がわかって良かった。改めて自分に合った大学だと実感できた。大学に入ったら, 今よりも世界が広がるような気がしてきた。一つのことに固執しすぎず, 広い視野を持って行こうと思った。単位のことなど知らない事が知れてよかった。大学に入った時のことを考えて, 勉強していこうと思う。大学生になったら, 今よりもっと人との結びつきが大切になることが分かったので, それを念頭に置いて, もし受かったら生活していこうと思った。
- ・ 年の近い学生と話せたことで, 話しやすく気軽に聞くことができた。自分が知りたいことを, わかりやすく説明してもらえてよかった。
- ・ 実際に学生の方や教員の方のお話を聞くのは楽しかった。(多数)

- どの道に進んだら自分の将来の仕事に役立つかを教えてもらえたのでよかった。
- 広島大学では、女性が活躍できる場所があるということに気づいた。広島大学に行けば、自分を表現することが出来るような気がします。頑張って広島大学に行こうと思います。
- 先輩や准教授の方から、受験勉強のことから、入学後のことまでたくさん教えていただき、モチベーションが高まりました
- ずっと自分が不安に思っていたことを聞くことができてよかった。進路も自分の行きたい学部と違って大丈夫なんだなと思った。もっと広大に行きたい気持ちが増しました。
- 学部でもこの学部だと免許を取れるとか、研究内容などの話を聞いてとても楽しそうで、広島大学についてもっとたくさん知りたいと思いました。
- たくさん知りたいことを、知ることができてとても良かったです。また機会があれば行きたいです。
- 大学では好きな分野の学習をとことん勉強できるということ。将来のことについて聞くことができた。
- 大学生活や入試のことなど、様々なことについて知ることができました。実際に学生の方や教員の方のお話を聞くのはとても楽しかったです。
- 大学について興味がでてきました。(多数)
- とてもいい経験ができて良かったです。(多数)
- 自分が行きたいと思っていた進路がはっきりしたような気がして良かったです。
- 文系、理系のことについてよくわかりました。自分の夢がどちらも関係ないということを知って安心しました。
- 今まで想像していた大学生活とぜんぜんちがって、実際に行われていることや、大学生活が聞けてとてもためになった。
- 不安に思っていたことを聞くことが出来てよかった (多数)
- 広大のオープンキャンパスは「勝手に見ろ」的な所があって高校 1, 2 年生のようにまだ進路が明確に決まっていない生徒にとっては、何の為に来たのか・・・というような生徒もたくさんいました。今回このような機会を設定されたことにより、自分が大学に進学する動機を考えるきっかけになったり、来年の文理選択に向けて、本当にいい機会になったのではないかと感謝しています。(引率教諭より)

あらかじめ参加申し込みを受け付けて開催する質問コーナーは、初めての試みであったが、出席者全員に満足していただけた。

#### 7-1-5. ペアリングチューター

本制度は、女性研究者と研究者希望の女子学生と一緒に、学会や他大学等が主催する男女共同参画関連のセミナーに参加することによって、ロールモデルとしての女性研究者との交流を深め、かつ男女共同参画の意識を高めることを目的として行なった。

	教員	学生	計
平成 19 年度	教授 1, 准教授 1, 講師 1, 助教 3	学部生 2, M 生 2, D 生 2	6 組
平成 20 年度	准教授 2, 助教 3, 研究員 1	学部生 2, M 生 4, D 生 1	6 組
平成 21 年度	教授 1, 助教 2, 契約技能職員 1	学部生 2, M 生 3	4 組

ペアリングチューター制利用後のアンケート結果を次にまとめる。

女性研究者と女子学生との交流に関しては、

- ・普段は互いに忙しいが、学会を利用してじっくり話げできた。
- ・男女共同参画に関する意見交換ができた。
- ・学会後も、男女共同参画、研究者の将来を話し合うきっかけになった。

等の肯定的な感想が、研究者、学生の双方から出された。

男女共同参画に関する意識啓発に関しても肯定的な結果が多く報告されたが、研究者のキャリアによってその内容は異なっていた。若手研究者の場合は、

- ・男女共同参画集會に初めて参加する契機になった。
- ・自身の将来への参考になった。

等の研究者個人に対する効果であったのに対して、中堅研究者の場合は、

- ・制度の利用により、自らも企画している次世代のための取り組みや集會への示唆を得ることができた。
- ・自分の所属研究環境の改善にむけて参考になった。

という感想があった。研究者の世界における男女共同参画にむけての行動に結びつく効果をもたらしている。

次世代の研究者候補である女子学生からは、制度の利用が共通して将来設計によい影響があったことが報告された。学部生からは、

- ・漠然としていた将来への不安から研究者としての可能性が広がった。
- ・女性研究者を手本としたい。

という率直な感想が出された。院生からは、

- ・自分の将来を真剣に考え、設計していく助けになった。
- ・研究者として強い意志を持つことが重要であることがわかった。
- ・仕事を続けて行く勇気をいただいた。

等の直面している研究者としての将来設計への一助となる効果がみられた。

ペアリングチューター制度は、研究者を目指す女子学生にロールモデルと身近に接する機会を提供し、女性研究者の世代間をつなぐ交流を支援することにより、教員、学生双方に女性研究者としての能力を将来十分に発揮させる多様な効果を生み出すことができると考えられる。

7-2. 他機関の男女共同参画関連シンポジウム等への参加

7-2-1. 平成 19 年度

	日程	シンポジウム等名称	場所	参加者	
				CAPWR からの参加	ペアリングチューター制による参加
1	H19.9.29	4 女子大学主催シンポジウム	日本女子大学	教員 1 名	
2	H19.10.5	名古屋大学 男女共同参画学協会連絡会	名古屋大学	教員 1 名 職員 1 名	
3	H19.11.10～ H19.11.11	2007年日本化学会西日本大会	岡山大学		教員 1 名 学生 1 名
4	H19.12.12	第 30 回日本分子生物学会年会第 80 回日本生化学会大会合同大会	パシフィコ横浜	職員 1 名	教員 3 名 学生 3 名
5	H20.2.13	「女性研究者支援モデル育成」事業等合同シンポジウム	お茶の水女子大学	教員 1 名 職員 2 名	
6	H20.3.1	東北大学 研究支援員制度交流会	東北大学	職員 2 名	
7	H0.3.26～ H20.3.30	日本化学会第 88 春季年会	立教大学		教員 1 名 学生 1 名
8	H20.3.28～ H20.3.30	第72回日本循環器学会総会・学術集会	福岡国際会議場 他		教員 1 名 学生 1 名

7-2-2. 平成 20 年度

	日程	シンポジウム等名称	場所	参加者	
				CAPWR からの参加	ペアリングチューター制による参加
1	H20.7.9～ H20.7.12	北海道大学 国際シンポジウム「Sustainable Should Be Female Scientists' Career!」	北海道大学	職員 1 名	
2	H20.7.23	九州大学 女性研究者支援室主催 第6回セミナー	九州大学	職員 1 名	
3	H20.9.5～ H20.9.7	日本動物学会第79回大会	福岡大学		教員 1 名 学生 1 名

4	H20.9.25	早稲田大学 キャリア初期研究者両立サポートセンター開所式・記念シンポジウム	早稲田大学	教員 1名	
5	H20.10.6	千葉大学 第2回シンポジウム「キャンパスにおけるワーク・ライフ・バランスの実現に向けて」	千葉大学	職員 1名	
6	H20.10.7	京都大学 男女共同参画学協会連絡会シンポジウム	京都大学	職員 1名	
7	H20.10.26	東京大学におけるワーク・ライフ・バランスを考える	東京大学		教員 1名 学生 1名
8	H20.11.1	日本女子大学 7私立大学合同シンポジウム	日本女子大学	職員 1名	
9	H20.12.1～ H20.12.2	「女性研究者支援モデル育成」事業等合同シンポジウム	東京大学	教員 1名 職員 2名	
10	H20.12.7	第4回 イーজেイネットシンポジウム	新生銀行本店		教員 1名 学生 1名
11	H20.12.8	森林総合研究所 ワーク・ライフ・システム構築への挑戦	メルパルク京都		教員 1名 学生 1名
12	H20.12.9～ H20.12.12	第31回日本分子生物学会年会第81回日本生化学会大会合同大会	神戸ポートアイランド	職員 1名	教員 1名 学生 2名
13	H20.12.17	神戸大学 ひょうごリサーチウーマンサミット	神戸大学	職員 1名	
14	H20.12.18	九州大学 女性研究者支援室主催 第8回セミナー	九州大学	職員 1名	
15	H21.1.15	宮崎大学 第1回シンポジウム「研究者としての女性のチカラ」	宮崎大学	職員 1名	
16	H21.2.21	静岡大学 「女性研究者と家族が輝くオンデマンド」支援シンポジウム	静岡大学	職員 1名	
17	H21.3.27～ H21.3.30	日本化学会 第89春季年会2009	日本大学船橋キャンパス		教員 1名 学生 1名

## 7-2-3. 平成 21 年度

	日程	シンポジウム等名称	場所	参加者	
				CAPWR からの参加	ペアリングチューター制による参加
1	H21.9.17	日本動物学会第 80 回大会	静岡グランシップ	教員 1 名	教員 1 名 学生 1 名
2	H21.9.29	岡山大学 第 1 回交流サロン	岡山大学	教員 1 名 職員 2 名	
3	H21.10.7	男女共同参画学協会連絡会シンポジウム	東京工業大学	職員 1 名	
4	H21.10.8	日本大学 第 1 回男女共同参画国際シンポジウム	日本大学	教員 1 名	
5	H21.10.30	名古屋大学 男女共同参画推進シンポジウム	名古屋大学	職員 2 名	
6	H21.12.1	千葉大学 第 4 回男女共同参画シンポジウム	千葉大学	職員 1 名	
7	H21.10.21～ H21.10.24	第82回日本生化学会大会	神戸ポートアイランド		教員 1 名 学生 1 名
8	H21.11.7～ H21.11.8	日本化学会西日本大会 2009	愛媛大学		教員 1 名 学生 2 名
9	H21.11.25～ H21.11.26	「女性研究者支援モデル育成」事業等合同シンポジウム	日本大学	教員 1 名 職員 2 名	
10	H21.12.8	新潟大学 第2回シンポジウム	新潟大学	職員 1 名	
11	H21.12.9～ H21.12.12	第32回 日本分子生物学会年会	パシフィコ横浜		教員 1 名 学生 1 名
12	H22.2.3	九州大学 第1回セミナー	九州大学	教員 1 名 職員 1 名	
13	H22.3.5～ H22.3.6	岡山大学 第 3 回交流サロン 男女共同参画推進国際シンポジウム	岡山大学	教員 1 名 職員 2 名	

### 7-3. 意識啓発セミナー・シンポジウムの開催

各年度に次のシンポジウムおよびセミナーを主催した。それぞれの概要は、次ページ以降にまとめる。

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
男女共同参画シンポジウム	1	1	1
CAPWR セミナー	1	5	4

(参加者数)

第 1 回広島大学男女共同参画シンポジウム

「女性が活躍する広島大学-その環境づくりに向けて-」

(約 450 名)

第 2 回広島大学男女共同参画シンポジウム

『一人ひとりが輝く大学をめざして』

(約 130 名)

第 1 回中国四国男女共同参画シンポジウム

(第 3 回広島大学男女共同参画シンポジウム)

(約 120 名)

～『協働』社会へ～ 中国四国地方からのアピール

第 1 回 CAPWR セミナー

(約 50 名)

「大学で女性をどう育てるか-リンダ・ウェルズ学部長との日米対話-」

第 2 回 CAPWR セミナー

(約 40 名)

「ドメスティック・バイオレンス(DV)とは」 -医療現場で求められる DV 被害者支援-

第 3 回 CAPWR セミナー

(約 40 名)

「性暴力被害者支援」

第 4 回 CAPWR セミナー

(約 50 名)

「パートナーや恋人からの暴力」-デート DV- (東広島キャンパス)

第 5 回 CAPWR セミナー

(約 40 名)

「パートナーや恋人からの暴力」-デート DV- (霞キャンパス)

第 6 回 CAPWR セミナー

(約 25 名)

「歯学部女子学生エンカレッジセミナー」

第 7 回 CAPWR セミナー

(約 30 名)

「女性のためのアサーティブ・トレーニング」 (東広島キャンパス)

第 8 回 CAPWR セミナー

(約 30 名)

「女性のためのアサーティブ・トレーニング」 (霞キャンパス)

第 9 回 CAPWR セミナー

(約 100 名)

「草食系男子の恋愛について：その生態と男女共同参画」

第 10 回 CAPWR セミナー

(約 50 名)

「第 1 回女性研究者の研究を聴こう」

## 第1回広島大学男女共同参画シンポジウム

『女性が活躍する広島大学 ―その環境づくりに向けて―』

### プログラム

#### 1 主催

広島大学男女共同参画推進委員会、  
女性研究者支援プロジェクト研究センター

#### 2 日時 平成19年12月4日(火) 14:00～17:00

#### 3 会場

広島大学東広島キャンパス サタケメモリアルホール

4 参加者 本学の教職員、学生、関係の地方自治体、  
企業、団体、一般市民の方

#### 5 趣旨

本学では、広島大学男女共同参画宣言において「大学における男女の対等な参画をより一層推進することによって、個人がその個性と能力をいかんなく発揮できる風土を創出することが最重要課題」とし、構成員が性別にかかわらず能力を発揮できる教育・研究・職場環境の形成に取り組んできています。また、本年度は文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル形成」事業において「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」の委託事業を開始しました。

今回はこれらの取り組みの一環として、本学構成員の男女共同参画推進への理解を深めることを目的として『女性が活躍する広島大学 ―その環境づくりに向けて―』というテーマで、シンポジウムを開催いたしました。

#### 6 プログラム 14:00～17:00

- (1) 主催者挨拶 浅原 利正(広島大学長) 14:00～14:10
- (2) 基調講演 「大学における男女共同参画の実現を目指して」 14:10～15:00  
板東 久美子(内閣府男女共同参画局長)
- (3) シンポジウム「女性が活躍する広島大学―その環境づくりに向けて―」

#### 15:30～17:00

- ①小舘 香椎子(日本女子大学理学部教授/応用物理学会副会長)  
【理工系女性研究者の抱える課題・科学技術分野における男女共同参画の取組など】
- ②吉浦 朱美(マツダ株式会社 人事労政部 人事ソリューショングループ)  
【マツダにおけるワークライフバランスの促進・女性を活かす人事制度等】
- ③田島 文子(広島大学大学院理学研究科教授/女性研究者支援プロジェクト研究センター長)  
【広島大学における男女共同参画の取組と課題】  
【コメンテーター】 板東 久美子(内閣府男女共同参画局長)  
【コーディネーター】 相田 美砂子  
(広島大学大学院理学研究科教授/副理事(男女共同参画担当))

#### 7 懇親会 17:30～19:00

会場：学生会館 レストラン「ラ・ボエーム」



## ○概要報告

教職員，学生，地方自治体・企業関係者，市民など約 450 名が参加した。

まず，浅原利正学長から，社会に貢献する人材育成と人類の未来に資する科学研究を重要な使命とした総合研究大学である広島大学において男女共同参画を強力に推進する，という挨拶があった。学生の男女比がほぼ等しい高等教育機関である広島大学において，教員における男女の割合が極端に偏っていることは改善しなくてはならない。広島大学では構成員が性別に関わらずそれぞれの個性と能力を發揮し，より高め合える職場環境・教育環境にするために男女共同参画に取り組んでいる，との考えを示した。



次に，板東久美子氏(内閣府男女共同参画局長)による「大学は多様な人材が活躍する場所であるべき」という内容の基調講演が行われた。



男女共同参画社会の定義について，男女が対等な構成員，自らの意志によっていろいろな分野に参画する機会が与えられる，いろいろな利益を均等に共に享受することができる，そして共に責任を担う社会であること，が示された。GEM（ジェンダー・エンパワーメント指数）（国連開発計画（UNDP）発表）は，女性の社会的な活躍度を端的に表す指数とされているが，これが日本は 93 カ国中 54 位（2007 年）であり，世界的にみても，日本では女性の能力が十分に活かされていない。とくに科学技術分野においては上位職になるほど女性の割合が低いので，女性研究者や教員をふやすための具体的な促進策が動いている。ワーク・ライフ・バランスを支えていく環境の整備が必要である。女性研究者の育成は，すべての人のためのワーク・ライフ・バランスや活躍の促進のための突破口と位置づけている。さまざまなデータに基づきながら，大学が率先して，男女共同参画の推進，多様性

の尊重、そのための環境づくりに取り組む必要性を強調された。

その後、板東久美子氏をコメンテーターとし、相田美砂子副理事がコーディネーターとして、小舘香椎子氏(日本女子大学教授)、吉浦朱美氏(マツダ(株))、田島文子氏(広島大学大学院教授)によるパネルディスカッションが行われた。まず、約 15 分間ずつ、小舘氏、吉浦氏、田島氏から、大学や企業におけるそれぞれの立場からの問題提起があった。



小舘香椎子氏からは、日本女子大学における女性研究者支援のための取組みについての紹介があった。日本女子大学ではナーサリー（保育園）を 1971 年に設立している。また、非常勤助手制度が 1969 年からあり、卒業生が所属を持ちながら研究を続けるために大変有効な制度である。日本女子大学における女性研究者マルチ・キャリア・パス支援モデルの取組みでは、出産・育児と研究活動の両立の支援と、出口の確保という意味で活躍の場の拡大に取り組んでいる。病児保育も開始した。卒業生のアンケートでは、59.2%の人が結婚・育児と仕事の両立をしている、理系の知識と技術を活かした職業に現在も満足しており、今後も継続をしたいと回答。70%以上の人が理系で良かったと回答している。日本では社会をリードする女性がまだ出てきていない。裾野を広げるために、学会や学術会議とも連携して、様々な取組みを地道に積み上げていくことが必要である、という考え方を示された。

吉浦朱美氏からは、マツダ(株)が女性社員の活躍推進のためにこれまで行ってきた、女性社員の能力拡大の取組み、働きやすい職場環境づくりについての紹介があった。1998 年から 1999 年までが基盤づくりの、1999 年から 2001 年までがポジティブ・アクションの、2000 年から 2007 年までがワーク・ライフ・バランス支援制度の導入のステップであった。アメリカ人の社長が 4 代続いたこともあって、男女関係なく能力がある人を、という考え方がスムーズに浸透し、女性管理職が増大した。企業トップが、女性社員を活躍させることによってビジネスがうまくいく、という考え方を持っていることが重要である。厚生労働省の次世代認定マーク、くるみんも取得し、ワーク・ライフ・バランスの取組みも進んでいる。今後は、女性社員が長期に渡りいきいきと働けるようにソフト面、意識面の充実をはかっていくことが必要、と考えている。



田島文子氏からは、広島大学の「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」プロジェクトの紹介があった。この取り組みは女性研究者だけでなく、教職員が健全で効率の良い状態で仕事に従事できるよう職場環境を改善する試みであり、学生・院生の皆さんにはどのように未来を描き、キャリアを模索していくかの支援を試みる事業である。広島大学ではこの事業の立ち上げ時には大学首脳部はすべて男性だけだったが、強力な応援団としてエールを送ってくださってきている。CAPWRセンターの活動を通じて、大学のコミュニティーに広く浸透させていきたい。男女共同参画とは、良質な equality platform の構築をめざすことである。



この後、板東久美子氏から、3人のパネラーの問題提起をうけて、次の二つのことが浮かび上がってきたとのコメントがあった。その一つは、女性研究者の問題は、女性だけでなく、組織全体として力を発揮しやすい魅力ある環境づくりの問題である、ということ。二つ目は、実際のニーズを切実に感じて始めた女性の取り組みを、それぞれの組織のトップが吸い上げて、全学的あるいは組織的な取り組みにしていくことの重要性である。

この後で、フロアからの質問（ポスドク問題が、女性には出産や子育てと重なるため、

より深刻である，という指摘，多くの負担が集中するベテラン層の問題）を受けて，活発な意見交換が行われた。応用物理学会では，求職中のポスドクや学生がマークをつける取組みがあることも紹介された。パネラーとコメンテーターのそれぞれのワーク・ライフ・バランスについての質問もあり，終了予定時間を20分ほどオーバーするほど，大変盛り上がった。

シンポジウムの様子は，中国新聞で報道（平成19年11月30日付け朝刊および12月5日付け朝刊）され，また，NHKのニュース（広島ローカル：平成19年12月4日午後6時半頃）でも取り上げられた。

シンポジウム終了後は，講師を囲んで懇親会を開催し，和やかな雰囲気のもと参加者間の親睦を図った。



### ○アンケート

参加者は約450名であり，配布したアンケート用紙には，185名の方々から回答があった。アンケート結果からの抜粋をここに示す。

#### 1. 参加者の内訳（アンケート回答数=185）（回収率=41%）

性別	女性	104人	56.2%
	男性	81	43.8%

#### 職種別

広大事務職員	92人	49.7%
広大教員	34	18.3
広大その他	10	5.4
広大学部生	13	7.0
広大院生	14	7.5
一般	9	4.8
自治体職員	4	2.2
企業	1	0.5
他大学	1	0.5
その他	5	2.7

#### 2. どうやって知りましたか？（複数回答）

学内連絡・呼びかけ	160人	86.5%
チラシ・ポスター	62	33.5
大学のホームページ	37	20.0
新聞	3	1.6
その他	10	5.4

3. 今日の感想をお聞かせ下さい。（自由記述）	
有意義・意識改革になった	69
他機関の男女共同参画に向けた取り組みを知る良い機会になった	69
女性研究者以外にも支援を広げてほしい	3
男女共同参画を社会全体として考える視点を学んだ	2
「ポストク問題」が一番大きな問題	2
4. 今後の企画や支援事業へのご意見ご要望（自由記述）	
積極的に継続して企画してほしい	18
開催時期・場所を考慮してほしい	10
5. 女性研究者支援プロジェクトへのご意見，ご希望（自由記述）	
頑張ってください，応援しています	11
事務系や学生，留学生，組織全体への取り組みを	8
文系への取組みも必要では	4

## 第2回広島大学男女共同参画シンポジウム

『一人ひとりが輝く大学をめざして』

### プログラム

- 1 主催：広島大学男女共同参画推進室
- 2 日時：平成20年5月16日(火) 13:30～17:10
- 3 会場：学士会館レセプションホール  
(広島大学東広島キャンパス)
- 4 参加者：本学の教職員、学生、関係の地方自治体、企業、団体、一般市民の方
- 5 趣旨：

本学では、広島大学男女共同参画宣言（平成18年10月17日）に基づき、教職員や学生、一人ひとりの個性と能力が十分に発揮できる組織を構築するための具体的な取組みを推進していくため、平成20年4月に「男女共同参画推進室」を設置した。「男女共同参画推進室」の設置を記念し、構成員の男女共同参画推進への理解を更に深めるとともに、取組策を推進していく一環として、『一人ひとりが輝く大学をめざして』というテーマでシンポジウムを開催する。

### 6 プログラム：

- |                 |   |             |
|-----------------|---|-------------|
| (1) 主催者挨拶       | 浅原 利正(広島大学長)  | 13:30～13:40 |
| (2) 基調講演        | 「大学から発信する男女共同参画」<br>郷 通子(お茶の水女子大学長)                           | 13:40～14:40 |
| (3) 講演          | 「わが国における女性研究者支援の取組と現状」<br>高比良 幸藏(文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課人材政策企画官) | 14:40～15:35 |
| (4) パネルディスカッション | 「女性が活躍する大学は、一人ひとりが輝く<br>・・・そのための具体的な取組み」                      | 15:40～17:10 |

### ①森 光昭(熊本大学理事(人事・労務担当))

【熊本大学の取組み・・・地域連携の視点から】

### ②棚村 政行(早稲田大学法務研究科教授・女性研究者支援総合研究所長)

【早稲田大学の取組みについて】

### ③升島 努(広島大学大学院医歯薬学総合研究科教授)

【広島大学女性研究者奨励賞について】

### 【コメンテーター】

郷 通子(お茶の水女子大学長)

高比良 幸藏(文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課人材政策企画官)

### 【コーディネーター】相田 美砂子(広島大学副理事(男女共同参画担当))

### 7 懇親会 17:30～19:00

会場：学士会館 レストラン「ラ・ボエーム」



## ○概要報告

学長を始め教職員，学生など約 130 名が参加した。



まず，浅原利正学長から，社会に貢献する人材の育成と人類の未来に資する科学研究の推進を重要な使命とした総合研究大学である広島大学は，構成員が性別にかかわらずそれぞれの個性と能力を発揮し，より高めあえる職場環境・教育環境にするために男女共同参画に取り組んでいるという挨拶があった。教員・研究員の公募文書に男女共同参画を推進していることを明示し，「評価において同等と認められた場合は女性を採用する」ことを，実行し，女性教員の採用割合の数値目標を設定した。男女共同参画宣言に基づく行動目標を達成するための推進支援を行うことと，女性教員増加のためのポジティブ・アクションの担当組織としての役割を果たすことを目的として男女共同参画推進室を設置したとの考えを示した。



次に，郷 通子氏（お茶の水女子大学学長）による「大学から発信する男女共同参画」と題した基調講演が行われた。広島大学における女性研究者を取り巻く現状についての考察ののち，お茶の水女子大学における女性研究者支援の取組みと歴史の紹介，男女共同参画を進めるための雇用環境の整備，ワーク・ライフ・バランスの実現について強調された。お茶大では，「モデル研究者」により，仕事と家庭の両立を図りながら優れた研究成果をあげるにはどのような支援が適切かつ効果的であるかを検証する，という事業を進めている。大学全体として業務の効率化による9時～5時の徹底と，育児支援をお茶大では進めている。9時～5時は，文系の教員には当たり前のことだが，理系にとっては実現が難しい。お茶大

の教員のうちの女性の割合は45%、役員相当職の女性の割合は40%である（2007年4月現在）。



次に、高比良幸藏氏（文部科学省 科学技術・学術政策局基盤政策課人材政策企画官）による「わが国における女性研究者支援の取組と現状」と題した講演が行われた。前述の郷 通子氏の基調講演の内容に絡めながら、女性研究者の活躍促進に関する国の提言等について詳細かつ率直な内容であった。クルム伊達公子選手が、日本の女子プロテニスプレーヤーを育てるために復帰したように、研究の分野でも先輩の女性研究者をロールモデルとして活用することにより、もっと女性研究者をふやしていく取り組みをすすめていく必要性を強調された。



その後、郷 通子氏、高比良幸藏氏をコメンテーターとし、相田美砂子副理事がコーディネーターとして、森 光昭氏（熊本大学理事（人事・労務担当））、棚村政行氏（早稲田大学法務研究科教授）、升島 努氏（広島大学大学院医歯薬学総合研究科教授）によるパネルディスカッションが、行われた。まず、約15分間ずつ、森氏、棚村氏、升島氏から、それぞれの大学における具体的取組の紹介があった。



森 光昭氏からは、「熊本大学の取り組み・・・地域連携の視点から」と題し、大学と行政、企業、NPO等が連携をしながら、研究と育児介護の両立のために改善策を投じることによってキャリアパス環境整備を図ってきた経験が紹介された。人材バンクも立ち上がり、行政経験のある女性をコーディネーターとして採用することにより、大学としての取り組みが進んだ。

次に、棚村政行氏から、「早稲田大学の取り組みについて」と題し、早稲田大学で進めている「研究者養成のための男女平等プラン」について紹介があった。早稲田大学では創立125周年記念日(H19.10.21)に、「男女共同参画推進室」を設置し、「男女共同参画宣言」を発表した。また、ワークライフバランスを取りやすい柔軟な勤務制度を提案し、ライフイベントに伴う様々な困難を克服するための支援策を策定する、ライフイベントサポートシステムを創設した。研究者総合サポートセンターではキャリア形成支援や両立支援のための相談窓口や交流会を実施している。大きな私立大学では、トップダウンとボトムアップの両方があるこそ、岩のような組織が動いた。



次に、升島 努氏から、「広島大学女性研究者奨励賞について」と題し、広島大学女性研究者奨励賞及び科研費獲得セミナーについて紹介があり、さらに、女性研究者へ力強いエールがおくられた。女性研究者の皆さんも、権利だとか、甘えないでいただきたい。男であれ女であれ、ひとりの自立した研究者として、しっかり立って歩いていくにはどうしたらよいのか、ということ、科研費の獲得セミナーを通して伝えた。リーダーになる覚悟が必要である。自分をプロモーションして、自分を大きく育てて、そして成功スパイラルを自ら作っていく研究者になっていただきたい。



その後、相田美砂子氏をコーディネーター、郷 通子氏と高比良幸藏氏をコメンテーターに加えて、会



場からの質問を受け、討論をおこなった。男女共同参画推進のための活動の大学内における  
 拡げ方・そのための学長の役割、都道府県・市町村の関連部局との連携の図り方、R P  
 Dの任期について等、内容は多岐にわたった。



シンポジウム終了後は、講師を囲んで懇親会を開催し、和やかな雰囲気のもと参加者間  
 の親睦を図った。



#### ○アンケート

参加者は約 130 名であり、配布したアンケート用紙には、40 名の方々から回答があった。  
 アンケート結果からの抜粋をここに示す。

1. 参加者の内訳 (アンケート回答数=40) (回収率=30.7%)

##### 職種別

広大事務職員	22 人	55.0%
広大教員	11	27.5
広大その他	2	5.0
広大学部生・院生	2	5.0
広大以外	2	5.0
その他	1	2.5

2. どうやって知りましたか？（複数回答）

学内連絡・呼びかけ	22人	55.0%
チラシ・ポスター	5	12.5
大学のホームページ	8	20.0
CAPWRからのお知らせ	7	17.5
その他	4	10.0

3. 基調講演の感想をお聞かせ下さい。（自由記述）

他大学も含め、男女共同参画の取組がわかり、参考になった	24
9時から17時の勤務時間を考慮してほしい	4
女性だけでも苦勞があり、男性も取り組んでほしい	2
自分自身の現状を再考する良い機会となった	2
取り組みへの熱意を感じた	2

4. 講演の感想をお聞かせ下さい。（自由記述）

国の政策や他大学の様子・背景・現状がよくわかり、参考になった	11
意識改革が必要と思った	4
適切な内容だった	2
施策を今後も継続すべきと思った	1

5. パネルディスカッションの感想をお聞かせ下さい。（自由記述）

他大学の取組が参考となり、良かった	11
男女共同参画を認識できた	2
研究者の方にも聞いてほしかった	2
事業終了後、どう発展させていくか・今後の方向性が課題	2

6. 今後の企画や男女共同参画推進の取り組みについてのご意見ご要望（自由記述）

今後も継続してほしい	2
意識改革のために、もっと教員の参加を増やすべき	1
あやゆる男女共同参画関連の情報をHPに載せてほしい	1
研究者育成にとどまらず、地域活性のための女性リーダー育成を希望	1

### 第3回広島大学男女共同参画シンポジウム(第1回中国四国男女共同参画シンポジウム)

『～『協働』社会へ! 中国四国地方からのアピール～』

主催： 広島大学男女共同参画推進室

広島大学女性研究者支援プロジェクト

日時： 平成21年12月21日(月) 13:30～17:20

会場： ホテルグランヴィア広島 天平の間

参加者： 本学・他大学の教職員、学生、関係の地方自治体、企業、団体、一般市民の方(約120名)

趣旨： 文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」の取り組みの最終年度にあたり、中国四国地方におけるこの取り組みをさらに推進し、地方の活性化、ひいては日本の活性化につなげていく意識を共有する。パネルディスカッションでは、中国四国地方における課題と展望について意見を交わし、中国四国地方としてのアピール文を出す。

プログラム：

- 1 主催者挨拶 上 真一(広島大学理事・副学長) 13:00～13:10
- 2 特別講演Ⅰ「女性研究者の現状と中国四国地方への期待」 13:10～13:40  
川端 和明(文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課長)
- 3 特別講演Ⅱ「地方自治体と大学との協働-男女共同参画の視点からみて-」  
豊田 麻子(広島市副市長) 13:40～14:10
- 4 基調講演「首都圏等研究機関集中地域外の大学における女性研究者支援の課題と展望」  
有賀 早苗(北海道大学大学院農学研究院教授/副理事・女性研究者支援室長) 14:10～15:10
- 5 パネルディスカッション「中国四国地方における男女共同参画の課題と展望」  
15:20～17:20

①岸 啓子(愛媛大学教育学部教授/男女共同参画推進専門委員会会員)

【愛媛大学における男女共同参画の課題と展望】

②本水 昌二(岡山大学男女共同参画室特任教授)

【学都・岡山発 女性研究者が育つ進化プラン】

③福田 由美子(広島工業大学工学部建築工学科教授/

女子学生キャリアデザインセンター長)

【技術系女子学生の継続的なキャリアデザイン -ライフサイクルを視野に入れた支援プログラムの構築-】

④青野 篤子(福山大学人間文化学部教授/人間科学研究科長・学部長補佐)

【ジェンダーの主流化をめざして】

【コメンテーター】

川端 和明(文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課長)



有賀 早苗（北海道大学大学院農学研究院教授/副理事・女性研究者支援室長）  
【コーディネーター】  
相田 美砂子（広島大学副理事（男女共同参画担当））

## 7 情報交換会

会場： ホテルグランヴィア広島 飛鳥の間 17:30～19:00

### ○概要報告

開会にあたって上副学長から、広島大学は男女が共同して社会に参画できる大学、地域社会をつくり、そしてその全国展開を図りたいという趣旨の挨拶があった。広島大学は師範学校で、明治15年に女子部を開設し、教育界に多くの女性を輩出し、昭和4年に設置された広島文理大学においても女子学生を受け入れ、男女の共学を目指してきたが現在は、女性教員の占める割合は11.1%にすぎない。女性の持っている特性が発揮される地域社会を作り、全国に広げていくことを目指すこのシンポジウムは意義があると述べた。

次に、文部科学省科学技術学術政策局基盤政策課川端課長から、「女性研究者の現状と中国四国地方への期待」という題で、特別講演が行われた。科学技術基本計画では、「ものから人へ」という政策に関連して、女性研究者への特別な支援を行う必要性が示されている。日本の女性研究者も増えつつあるが、現在13%程度で、他の先進国の3割程度に比べると際立って低い。分野別にみると理工系における学生も低く、工学系1割、理学部で4分の1程度。教員の職階別にみると、教授は10人に1人という状況。政府はこれを問題視しており、女子学生の理科離れに対し小学校段階から対策を行い、最終的に大学教員への道までを整備しなければならないと考えている。アンケート調査では、採用や管理職とか昇進、昇給、雑用に差があること、女性研究者が少ない理由は、家庭と仕事の両立の困難さ、育児期間後の復帰の困難さが挙げられていることが示された。またロールモデルが少なく、業績評価において育児や介護等に配慮がなく、採用時に評価者は男性を優先する意識があると女性が思っている比率が非常に高いことが分かった。その対策としては、勤務時間とか勤務形態の弾力化、休業制度と運用、保育施設の整備、先輩の研究者のようなメンター的な支援が期待される。基本計画において、採用割合目標は全体で25%、理工農で各々現実的な数字を挙げているものの、4年間経っても相当低いままである。大学ごとに採用目標を設定して、状況を公開すること、研究と出産育児との両立に配慮した措置を拡充することをお願いしたい。次の基本計画が来年決まるが、女性研究者については大体同じ数値目標で、今後は大学が具体的な計画を示して、女性研究者の積極的な確保、活用に努め、部局ごとに女性研究者の職階別の在籍割合を公表することが期待される。モデル育成事業採択校45大学をみると首都圏に集中している。関西は基本的に遅く、中国四国地域では非常に遅れており、



広島大学がこのあたりでは唯一という状況。各大学のモデル事業の傾向は、採用の数値目標、窓口設置、ネットワーク作りなど。数値目標を決める作業自身が非常に意識改革に役立つものであり、申請過程で執行部と議論する、学長がそれから決めて文科省にプレゼンするというのが最も大事である。効果が出ているのは研究支援者の配置や専任スタッフの設置で、今後は効果の検証、継続、普及、そして早く成果を出していただきたい。更なる改革の加速化施策では、女性研究者を採用すると人件費を半額、300万を上限に半額補助するので、モデル事業の後でチャレンジしていただきたい。優秀な女性研究者が増えて欲しいので、研究成果をしっかりと出していただきたい。たくさんの申請がくることを期待すると締めくくった。

次に、広島市副市長豊田氏から「地方自治体と大学との共同・男女共同参画の視点から見て」という内容で、産学官の連携のプロジェクトと女性研究者の参画の重要性についてご講演を頂いた。広島市では、小中学校の児童生徒へのICT利活用能力育成、メディア教育と大学生の活用および学生への社会訓練の場の提供し、大学と事業を行っている。



また、IETF（インターネットエンジニアリングタスクフォース）の国際会議では広島の大学や地域の共同活動をし、市民向けに開催したシンポジウムでは、各界の女性リーダーがICTについて市民の生活との関係を中心に語るというパネルディスカッションをした。今男女がもっと輝くための拠点施設の設置については、女性教育センターを用い、男女共同参画ならではの総合的な相談機能というものを充実させていこうとしている。市の審議会への女性参画として、平成22年度までに35%を目指し、政策決定の場面において、女性の声を反映させようとしている。市民や地域のニーズにあった施策の実施では、コミュニケーション能力、きめ細やかな対応、意見調整能力が求められているが、女性の方がその能力に長けている傾向があり、プロジェクトを推進するときに必要なとされる。地域の仕事というのはまさにその男女共同参画なので、女性の研究者の方に活躍していただきたいと、広島市はそういった活動のバックアップを様々な形でしていきたいと思っている、と締めくくった。

その後フロアから、中国四国には多くの市や町があるが、それらとの連携の有無について質問が出された。それに対しては、まだその視点はなく、モデル事業を行い、それを普及していく予定。小学校、中学校から女子生徒の意識を高め、女性理系の研究者を増やすというところで、教育委員会や市役所が支援できると考えていると回答された。

次に、北海道大学の有賀先生から、「首都圏と研究機関・集中地域外の大学における女性研究者支援の課題と展望」と題して、地方の特性故の問題に触れつつ、男女参画の取り組みと課題についての基調講演を頂いた。北大は、平成18年に文科省のモデル育成事業に採択され、「輝け女性研究者・生かす育てる支えるプラン北大」を、女性研究者が活躍しやすいための環境整備と、数の増加の2本立てで行なっている。女性研究者の比率を2020年までに20%にするという長期計画を出すことで、戦略的に実態を変えようとした。必要な状

況、人、時に必要な支援を行う、全体の意識改革、個々の問題対応、組織のデマンドと個々人のデマンドをマッチさせるポジティブアクション北大方式を実施した。2006年1月当初は、正規教員に占める女性は7%で、常勤以外の研究者というところになると20%（ポストドク、無給）。女性教員拡大の高い数値目標を掲げ、数を増やして孤立感を軽減させ、身近なロールモデルが存在することで、また次を呼ぶことができる、意識改革も可能になると考えた。無論選抜は慎重に、クオリティが

最優先で、公正で、かつ継続的に行うことが肝要である。それは部局管理分と全学運営分とがあり、各部局が女性の教員を採用すると人件費の4分の1が全部局から賄われ、追加される人件費で昇任とか採用が新たにできる。全学運用分では、大学の戦略的人件費を使って女性を増やすことが大学の戦略の1つであると位置づけられ



たことで、精神的支えが大きい。そして2009年1月には正規女性教員も8.6%と少し増えてきた。まだ課題も多く、自然科学系は依然少なく、重点的に取り組む必要があると学内でも議論された。教員採用や定着には、短期間における論文数の評価という問題がある。女性には出産、育児などがあるので、中長期にわたる安定した雇用、研究の場を確保し、評価する必要がある。RPDも延長するべきだろう。その他、北大ではシステム改革としてF3プロジェクト（**Fresh Female Faculty**）、地方で不可欠な優秀な若手人材の確保のために若手研究者カップルの同居支援、理系進路選択支援事業（理系応援キャラバン隊）を実施している。出産、育児支援は意識改革だけではなく、研究補助員配置による現実的な不利益の解消による温かい環境づくりをしている。そこでの課題は適切な専門性を持つ補助者の獲得がある。事業所内の保育所の設置は意外と簡単だが、維持・運営が厳しい。意識改革は地味で時間もかかるが最重要課題で、外に向けて発信と同時に内へ向けての発信が大事。女性研究者支援を通して、若手研究者全般に対して育成プランのモデルとなればよい。女性も男性も自分のキャリアと主観的、客観的に向き合うことができるように支援することが大事。振興調整費の事業が終わった時点が本格的なスタート。自腹で長期間継続する覚悟が必要。男女ともに、特に女性には、自信を持って、訪れる機会に対してぜひ前向きに努力して備えておいていただきたい、と述べた。

後半のパネルディスカッションでは、愛媛大学、岡山大学、広島工業大学、福山大学から発表が行われた。

まず愛媛大学の岸先生から「愛媛大学における男女共同参画の課題と展望」として、これまで男女共同参画専門委員会が実施したことや課題が話された。19年の春に男女共同参画の専門委員会を立ち上げ、学内アンケートを行い、その結果を一番重視した。愛媛はもともと保守王国で、学内世論に配慮しながら、男女共同参画を進めていくことが大きなポイントであった。アンケートでは、1%が反対、40%程度は分からないという消極的な姿勢が分かった。宣言と提案では、特に理工系の女性教員増、契約職員（非常勤職員は女性が圧倒的）の処遇改善施策を探った。セミナーではワークライフアンバランスを中心テー

マにして討議した。現在の課題と展望は、ワークライフのアンバランス、女子学生のキャリア教育、女性教員の採用と昇進、それから女性研究者の支援である。

2 番目の発表は、岡山大学の本水先生で、「学都岡大発、女性研究者が育つ進化プラン」が説明された。岡山大学の状況は、女子学部生は40%、前期課程で3%、博士課程でも30%。女性研究者は12%で、そのうち自然系が10%（ただし、保健系が49%）。今後女性研究者の占める割合として少なくとも20数%を目指すべきはないかと思っており、学長のもとにダイバーシティ推進本部というものをつくり、その中に男女共同参画室をつくり、本格的に進め始めた（平成21年1月）。通常的女性教職員のための男女共同参画推進と、独自にウーマン・テニア・トラック（WTT）で、女性の研究者を育成することを始め、循環型人材育成進化プランをスタートした。今後は、研究サポート体制として保育施設の充実、人材登録バンク、女性サポート相談室（12月に開設）、サロンにおける意識改革、女性のロールモデルとの出会いなども行う。重要なテーマはワークライフバランスで、進めていきたい。

3 番目に、広島工業大学の福田先生より、振興調整費の女性研究者支援モデル育成とは異なるプロジェクトについて紹介いただいた。広島工大では技術系の女子学生の支援を行っている。女子学生は6%と非常に少ない。女子学生は入学時に高い志を持ってきたが、在学中にモチベーションを落としていっている。その理由は、一所懸命大学でがんばっても、男子学生の方が評価されやすく、いい就職をすればいいというものであった。これは大学の責任であると考え、2007年1月に、女子学生キャリアデザインセンターを設立した。文科省による新たな社会的ニーズに対応した学生支援GPに採用され、学生支援を3本柱（キャリア形成支援、就業支援、再チャレンジ支援）として行っている。GPの支援が来年度終わっても、活動を継続し、技術の世界でも活躍する女子学生を育成支援し、男女共同参画の一端を担いたい、と述べた。

最後に、福山大学の青野先生から状況報告と取り組み、継続的な取り組みとしてジェンダーの視点の主流化が挙げられた。福山大学は、全体では女子学生の比率は26.4%、修士課程は36%、博士課程は50%。女性教員の比率は11.6%。職階別の比率は、福山大学は非常に教授の比率が高いが、これは退職年齢が遅いことによる。女性にとってあまり魅力的な大学でないということで、2006年3月に女性の視点からの大学教育改善検討委員会が、副学長の諮問で、インフォーマルな組織として立ち上がった。そこで4つのCの推進（キャリア、カリキュラム、コミュニティ、カルチャー）を進めている。女性に特化したテーマや、女性向きのプログラムをつくることと同時に、男性にも開放していくということが、今後問われていく。福大にとって非常に画期的なできごとは、女性の副学長の誕生で、今女性がかかり進出してきた。男性が多い職場なので、男性も取り込むかたちで、ワークライフバランスの推進、地域連携による男女共同参画の推進をオブラートで包みつつ、福大型の男女共同参画というものを進めていくのが賢明なやり方。ワークライフバランスは、日々の活動の中でジェンダーの視点を持って、教育の中身を変え、地域連携を進め、研究を行うことで、特別なプロジェクトでなくても達成できると述べた。

その後、広島大学の取り組みと実績が配布資料をもとに説明された。

次いで、パネルディスカッションに入り、最初に有賀先生と川端課長からコメントが述べられた。川端氏は、この地方でこの種のシンポジウムが開かれること自体がよいことで、

特に興味深いのは、岡山大のWTTと女性技術者についての発表であったと述べられた。有賀先生からは、研究者の育成や支援だけでなく、女子中高生の理系進路選択支援として理系の視点を持って活躍することができるという広島工業大学の取組みはびったりだと思うと述べられた。

その後、フロアからの質問が出された。福山大学副学長から、職員の意識啓発について質問が出された。それに対して、意識改革についてはシンポジウムへの参加や事業進行の中で相当な理解が促進されたことが紹介されたり、女性研究者支援モデル育成は、職員全員を対象に考えてやっていることが紹介された。



愛媛大学小島先生からは、文部科学省として女性教員の比率を国家目標として提示しないのかと質問された。それに対し、川端氏は、文部科学省は期待値を示すだけで、支援策、助成策、促進策といった誘導策を実施するので、それにそった事業を大学にしていれば素晴らしいと考えていると回答された。また、大学の状況の公表についての質問に対して、国は各大学に調査をして、公表すると回答した。

広島国際大学杉原先生からは、文系も男社会であり、それはどう考えるのか、男女問題だけでなく講座制などに起因する体制的な歪みにどう取り組むのかという質問が出された。それに対して、北大は全部局に対して行っているが、研究スタイルの違いから文系の女性教員は出産、育児時の支援は必要ないことが多いことが説明された。講座制については賛否両論で、研究重視か教育機能重視かという議論や柔軟な姿勢を取ることが必要、と述べた。川端氏は、科学技術は国際競争で勝負するところなので、国策的にも重要なので、そこに支援が手厚くなるというのは合理性があること、講座制については、もちろん分野や研究の内容によって最適なものがあるので、講座制が一概に悪いと言えないと回答した。宮越氏からは、教員支援として、若い段階は保育所等が随分充実してきたが、学童保育を北大はどうしているのか、母親が遠方に出ることにどう支援しているのか質問された。それに対し有賀氏から、北海道は地域の学童保育が充実しているため実施しておらず、他大学の取組みを紹介された。後半の質問には、個々の問題の要素が強く、親の介護問題もあり、支援が難しいと回答された。

広島大学佐々木先生から、女性のキャリアアップのための意識改革の成果や就職率が上がってきたのか、それに対する周囲からの意識の変化はあるかという質問が出された。それに対して、広島工業大学から、就職率は少し上がった程度で、女子向けのプログラムが男子まで波及するのではないかと感じているところと回答された。北海道大学有賀先生からは、支援員が入ったことで、周囲の理解が得られるという大きな効果はあるが、依然として甘やかしているという非難もあり、女性自身のプロ意識の向上も必要とされることとした。最後に、「～『協働』社会へ～中国四国地方からのアピール」をタイトルにしたアピール文が採択された。「私たちシンポジウム参加者はここに、男女共同参画社会の実現が必要であることを理解し、中国四国地方の大学等研究教育機関がその牽引的役割を果たすことを期

待します。また参加者は、男女共同参画社会実現のため、相互交流や連携を進め、それぞれが努力を尽くすことを誓い、ここに表明します。(平成 21 年 12 月 21 日、第 1 回中国四国男女共同参画シンポジウム参加者一同)」

#### ○アンケート

参加者は約 120 名であり、配布したアンケート用紙には、51 名の方々から回答があった。アンケート結果からの抜粋をここに示す。

##### 1. 参加者の内訳

広大事務職員	14	27%
広大教員	9	18%
広大その他	8	16%
広大以外	18	35%
その他	2	4%

##### 2. どうやって知りましたか？(複数回答)

1. 広大から	16	24%
2. チラシ等	15	22%
3. 広大HP	6	9%
4. 学内連絡	25	37%
5. その他	5	7%

##### 3. 今日の感想をおきかせ下さい。(自由記述)

###### ①特別講演 I・II

文科省、行政、大学での男女共同参画の取組がわかり、参考になった	24
女性研究者が置かれている現状がよくわかった	6
副市長の講演がとてもよかった(女性のロールモデルとして)、勇気づけられた	9
女性教員の比率が思っていたよりも低いことに驚いた	3
今後の業務に役立てることができると思った	2
首都圏に比べ、地方では男女共同参画に対する意識がまだ薄いことがわかった	2

###### ②基調講演

北海道大学の取組が良くわかり、参考になった	20
内容が充実し、興味深い話だった。大変楽しい話だった。	15
女性研究者の立場や気持ちを理解した上で、様々な施策をしていることが良いと思った	2
様々な方法を組み合わせて、取組を継続しようとしている点が良いと思った	1
「男女共同参画」だけでなく、広く『人財』を育成する取組をしている点に驚いた	1

###### ③パネルディスカッション

各大学の取組や苦労している点が参考となり、良かった	13
文科省の姿勢・取組がわかって良かった	3
広島大学での取組も紹介してほしかった	2

ワークライフバランスについて考える必要があると感じた	2
今後の業務に役立てたい	1
女性の視点からの意見があり興味深かった	1
もう少し時間があると良かった	1
質問者に男性がいなかったのが残念だった	1
大学だけでなく、社会に認められるような取組が必要だと感じた	1
各自が職場に持ち帰り、輪を広げていくべき	1
<b>4. 本日、提言された「～男女共同参画社会へ～中国四国地方からのアピール」についてのご意見を お聞かせ下さい。（自由記述）</b>	
アピール文案に賛成・賛同します	2
誰から誰へのアピールか、もうすこし分かりやすい方が良いのではないか	1
広島大学は地方大学のリーダーとして活躍してほしい	1
「女性だけ」ではなく、キャリア支援は男女関係なく必要だと思う	1
<b>5. 今後の企画や中国四国地方の大学における男女共同参画推進の取組についてのご意見をお聞かせ下さい。（自由記述）</b>	
各大学と地方や地域が連携して男女共同参画の推進に取り組んでほしい	5
今後も継続して開催してほしい	3
今後も男女共同参画の推進に力を入れていきたい	2
もっと多くの教職員・学生にも参加できるようにしてほしい	2
大学間（事業主間）のネットワーク作りと情報交換が重要だと思う	2
大学関係者だけでなく、企業や市民向けにも開催してほしい	2
講演の中での用語（横文字）が難しかったので補足があると良いと思う	2
もっと幅広い分野から参加者を募ってはどうか	1
学内外に大学の取組と成果、問題点を広く広報し、理解を求めることが必要と思う	1
支援を継続することが大切だと思う	1
女性の学長を誕生させてほしい	1
男女共同参画推進の実情アピールの発表会をしてほしい	1
次回は女性研究者支援の具体的内容や支援を受けた側の声を聞きたい	1
家族の問題が大きいので、家族内の意識改革も必要	1
保育（特に病児保育と学童保育）の充実を図ってほしい	1

# ～『協働』社会へ～ 中国四国地方からのアピール

男女が社会の構成員として対等な権利と責務を有し、誰もがそれぞれの個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現は、21世紀の我が国社会を決定する最重要課題です。中国四国地方においてもその実現に向けた取り組みは始まっています。

中国四国地方の各大学では、構成員の男女不均衡是正や教育・研究環境の改善、両立支援の環境整備、女性に対するキャリア支援、男女共同参画に資する教育と啓発活動など、自らがモデルとなるべく様々な先進的取り組みを始めています。

私たちシンポジウム参加者は、ここに、男女共同参画社会の実現が必要であることを理解し、中国四国地方の大学等研究教育機関がその牽引的役割を果たすことを期待します。また、参加者は、男女共同参画社会実現のため、相互交流や連携をすすめ、それぞれが努力を尽くすことを誓い、ここに表明します。

平成 21 年(2009 年)12 月 21 日

第 1 回中国四国男女共同参画シンポジウム 参加者一同

## 第1回CAPWRセミナー

『大学で女性をどう育てるかーリンダ・ウェルズ学部長との日米対話ー』

### 1 主催

広島大学男女共同参画推進委員会、女性研究者支援プロジェクト研究センター

### 2 日時

平成20年1月7日(月) 13:00~15:00

### 3 会場

広島大学東広島キャンパス 学生会館レセプションホール

### 4 参加者

本学の教職員、学生、他大学教職員(約50名)

### 5 内容

講演者: リンダ・ウェルズ(ボストン大学一般教養学部長・人文科学部教授)

演題: 「大学で女性をどう育てるか」

通訳・コメンテーター: 堤かなめ(九州女子大学教授)

講演の概要:

ボストン大学では、17の学部長のうち5人が女性である。また、主要大学で女性の学部長が増えてきている。まだ完全に同等とはいえない部分もあるが、女性は確実に社会に進出している。

アメリカの歴史的背景をみると、アメリカでは1960年代の女性運動が女性を含むマイノリティに対する社会の対応に大きな影響を与えたといえる。1970年代になると高等教育機関における女性の割合が増加し、女性が経済的に自立しはじめた。1960年代頃までは、自分の妻に働いてほしくないという男性が多かったが、家庭に二つの収入源が必要とされる現在では、そのような考えをもった男性はほとんど存在しない。

大学についてしてみると、大学入学においては男性の入学者数は減少傾向、女性は増加傾向にある。1つのパイプラインと考えると、大学の女性教員が増えるためには女性の大学院修了者が、大学院に進学する女性が増えるためには学士号をもった女性が多く必要なのであり、この傾向は歓迎すべきである。実際に、最近では、大学院レベルや大学教員レベルに多くに女性が存在している。しかし、大学教員の場合は、テニユアを持たないポストに女性が多いという傾向がみられ、給与についても女性の方が交渉下手という傾向があるといわれている。実業界では給与に男女格差がなくなってきたといわれるアメリカでも、未だに女性の中にダブルスタンダードが存在している。たとえば、ヒラリー・クリントン議員は「いかに自信があり、競争力がある強い人間か」と主張する一方で、それを主張しすぎると危ういということを自覚した行動をとることがみられる。

これらのことから、会社の最高経営責任者であれ、大学の教授であれ、かなりの女性が進出していくようになってはいるが、まだ十分に地位を確立していないという現状と課題が示されている。

OP 2008年1月7日(月) 13時~15時  
参加無料

第1回CAPWRセミナー  
広島大学

大学で女性をどう育てるか  
ーリンダ・ウェルズ学部長との日米対話ー

現在、アメリカの大学では、女性が60%男性が40%を占めており、法学部・薬学部では、入学者の50%が女性で、これは大学間で共通です。大学・大学院における教授職は過半数、女性が過半数を占めています。進学レベルでは減少しており、教授レベルではまだ少ないのが現状です。多くの大学において女性が活躍しているにもかかわらず、リーダーシップの地位にある女性の数は、それに比例しているとは言えません。

今回は、アメリカにおける女性のための経験と機会獲得に関して、1960~70年代の女性運動の軌跡をたどりながら語ります。ジェンダーの多様性の促進とその多様性を創るものについて、意見と文化の違いをこえた視点を共有していきたいと思っております。

通訳・コメンテーター: 堤 かなめ(九州女子大学教授)

Linda Wells(ボストン大学一般教養学部長・人文科学部教授)  
ウエスコンシン・マサチューセッツ大学にて2006年の長年最大の博士号取得  
は、その功績により人文科学部長、学長に就任。2008年より一般教養学部長  
一般教養学部長は、本学部の学務的の必要科目による、その卓越した教育内蔵性という  
特徴は、アメリカン・トップレベルの大学でその学務的の必要科目を担っている。

主催: 広島大学男女共同参画推進委員会  
女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)研究センター  
http://www.capwr.com

## 第2回CAPWRセミナー

『「ドメスティック・バイオレンス(DV)とは」－医療現場で求められるDV被害者支援－』

主催 広島大学男女共同参画推進室

女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)

日時 平成20年11月27日(水) 17:30~19:30

会場 広島大学霞キャンパス 広仁会館大会議室

参加者 本学の教職員, 学生, 他機関・他大学教職員  
(約40名)

内容

1: 塚崎裕子(内閣府男女共同参画局推進課長)

演題: 「配偶者暴力の実態, 配偶者暴力防止法及び関連する施策について」

2: 北仲千里(広島大学ハラスメント相談室准教授)

演題: 「ドメスティック・バイオレンス(DV)とは」

講演の概要:

塚崎氏の講演では、内閣府が実施した「男女間における暴力に関する調査」(平成18年4月公表)をもとに、配偶者暴力をめぐる実態が報告された。女性の10人に1人が配偶者からの被害を何度も受けているという実態がある。また、被害者の約9割は暴力によるげがや精神的不調をきたし、このうち7割近くは医師の診療を受けたことがある。裁判所に保護命令申し立てを行い、発令されたことがある人は約3割、申し立てていない人は約6割。申し立てていない理由は「相手の反応が怖かった」とする人が最も多かった。このような現状を踏まえて、内閣府では配偶者暴力防止法及びそれに関連する施策を設け、様々な取り組みを実施している。特に医学的・心理的な援助としては、被害者及びその子どもに対する援助を念頭に、医療機関とのスムーズな連携が図られることが望ましい。

北仲千里氏の講演では、女性に対する暴力とは何か、ドメスティック・バイオレンス(DV)の定義・問題の特徴、実情についての講演がなされた。「女性に対する暴力(violence against women)」とは、女性が「女性であるがため」にうける虐待や性暴力などの被害(職場のセクシュアル・ハラスメント、夫婦や恋人間でのドメスティック・バイオレンス、ストーカー、いたづら電話、電車や街での痴漢被害など)のことをいう。近年、両性の平等の問題にかかわる重要課題として世界的に注目されるようになり、日本でも法整備などの対策が相次いで始められてきた。しかし、この問題は、家族や恋愛や性的問題が絡むため、深刻な悩みを抱えていても、誰にも言えずに一人で抱え込むことが多いという特徴がある。DVの発見や初期援助などの段階で、医療従事者が果たす役割は重要である。ここ数年、DVや性暴力に対する医療機関マニュアル作成や研修の動きも始まっている。自分に関わる問題として考えると同時に医療現場に従事するものとして、この新しい社会問題に対する認識を深めてほしい。





## 第4回・第5回CAPWRセミナー

『パートナーや恋人からの暴力「デートDV」を知ろう』

### 1 主催

広島大学男女共同参画推進室女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)

### 2 日時と会場

第4回：平成21年3月4日(水) 13:00～15:00

(東広島キャンパス) 学士会館レセプションホール

第5回：平成21年3月4日(水) 17:30～19:30

(霞キャンパス) 広仁会館大会議室

### 4 参加者

本学の教職員、学生、他機関・他大学教職員

(第4回：約50名、第5回：約40名)

### 5 内容

講演者：中島幸子(NPO法人レジリエンス代表・DV  
コンサルタント・ソーシャルワーカー)

演題：「パートナーや恋人からの暴力「デートDV」を知ろう」

文部科学省科学研究費助成事業「リーダシップを育む広大型女性研究者支援」  
広島大学男女共同参画推進室 女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)主催  
第5回CAPWRセミナー

## パートナーや恋人からの暴力「デートDV」を知ろう

平成21年3月4日(水) 17:30～19:30  
広島大学医学部 広仁会館 大会議室  
※東広島キャンパス(学士会館)でも、同日13:00から同じ内容のセミナーを行います(講師・講師は同じです)。

講師 中島幸子さん  
NPO法人レジリエンス代表  
DVコンサルタント・ソーシャルワーカー

知っていますか？  
デートDV

参加費 無料 どなたでもご参加ください

中島幸子さんのプロフィール  
DVの被害にあった経験がきっかけとなり勉強を始めた。1991年に米国にて心理学士号取得。2001年よりDVについての講演活動を開始。2003年にソーシャルワーカー士号取得。同年、東京で「レジリエンス」を結成。東京と横浜で女性のためのこころのケア講座を毎年行いながら、全国各地で毎年多数の講演を行う。杏林大学非常勤講師、宇城国立広徳大学非常勤講師。

レジリエンス(Resilience)とは英語で「弾力性(力)を養う」という意味で、逆境に立ち向かえる力を指します。個人にもチームにも共通する力、マイクスの心から湧き上がる力でありたいと信じています。

ドメスティック・バイオレンス(DV)とは、親密な関係の相手に対して行われる身体的・心理的暴力です。DVは本人だけの問題ではなく、交際中の相手の側でも起こります。これを「子一人の心」と表現しています。子一人の心は自分の心で決まらずに相手の心で決まることがあります。自分の心で決まらずに相手の心で決まることがあります。自分の心で決まらずに相手の心で決まることがあります。

【主催・お問い合わせ先】  
広島大学男女共同参画推進室 女性研究者支援プロジェクト(CAPWR) 協力：広島大学大学院教育学研究科  
広島県広島東区山田1丁目1-2 TEL: (082) 424-4295 後援：広島県  
E-mail: capwr@hiroshima-u.ac.jp 関：http://capwr.u-hiroshima.ac.jp

### 講演の概要：

第4回・第5回CAPWRセミナーでは、東広島キャンパスおよび霞キャンパスにおいて、同一内容の講演を行った。

NPO法人レジリエンスでの活動経験や、自身のドメスティック・バイオレンス(DV)被害経験から、DVの構造は「パワーとコントロール、暴力」からなることや身体的な暴力以外に「相手を尊重しない言動」もDVの手段として頻繁に用いられることがあるといえる。相手に対する尊重のない会話の例として、個人の嗜好の問題であるコーヒーに砂糖を入れるか否かということ「入れないことが常識」として相手の好みを認めないパートナーとの会話が紹介された。ドメスティック・バイオレンス(DV)というと、婚姻関係にある配偶者との間だけに生ずる問題と思われがちであるが、若者の間でも恋人からのDVに悩む人は少なくない。また、これらの構造や言動は、大学内に置き換えるとパワーハラスメントやいじめの問題など、DV以外にもあてはまる。自分の日常にもつながる事としてとらえてみてほしい。

DV被害当事者の心の混乱や加害者の暴力によって支配されることによる影響は様々であるが、加害者によって支配されることで、自分の核(自己決定権)が崩壊させられていくこと、それによって、加害者の支配がさらに進んでいくという悪循環がある。しかし、被害の回復は不可能ではない。PTG(Post Traumatic Growth: 心的外傷後成長)という考え方がある。「こうなるはずだったという人生」がDV被害によって少し違う人生になったとしても、現在の地点から新たな旗(目標)を立てて成長していくことはできる。DV被害当事者は、そのような素敵な力を持った存在である。

## 第6回CAPWRセミナー

『歯学部女子学生エンカレッジセミナー』

### 1 主催

広島大学男女共同参画推進室女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)

### 2 日時

平成20年12月17日(水) 17:30~18:30

### 3 会場 (霞キャンパス) 広仁会館中会議室

### 4 参加者 本学の教職員, 学生 (約25名)

### 5 内容

講演者: 原久美子(歯科衛生士・広島大学歯学部講師), 畠山知子(歯科衛生士・広島大学病院), 北川雅恵(歯科医師・広島大学病院助教), 岡広子(歯科医師・広島大学大学院医歯薬学総合研究科助教), 宮内睦美(歯科医師・広島大学大学院医歯薬学総合研究科准教授)



### 講演の概要:

学生, 教職員ともに女性が多い歯学部において, 女子学生のエンカレッジを目的としたセミナーを実施した。歯学部で現在活躍する女性5名が, 自身のキャリア形成の軌跡について, さらには結婚・子育てに関するプライベートな内容までを自己紹介とともに語るという形式で会を進行した。

「ちょっと3年」のつもりで現職に就いたが, 気がつけば子育て時期を通り過ぎて振り返る立場, 最近は介護の方がそろそろ肩にかかってくる。育児と仕事の両立は大変なこともあった。しかし, 自分が興味をもったことであれば, 子育てしながらでも頑張っ続けていけると思う。というベテランの話があり, また, 「女性研究者の卵のひとり」として1歳の子どもを保育園に預けて働く若手では, 働きながら, 子育てしながら, というのは本当に大変だが, 周囲のサポートが非常にありがたい。多くの方の支援があって, 今の自分があると思っているという話もあった。この他にも歯科衛生士を経て大学院へ進学した方, 18年間の病院勤務を経て, 大学教員となった方など, 様々なキャリアを形成されたてきた講師の軌跡をたどることができた。

子育てをしながら働き続けることは, 最前線から一步退くこと。同僚にも上司にもすまないと思う気持ちでいっぱいだった。職場に同じ年代で子育て中の女性の先輩がいたことは大きな支えだった。先輩の「お母さんは一人しかいないのだから帰ってあげなさい」という一言で, 気持ちに区切りがつけられた。背中をポンッと叩いてくれる人が一人でもいれば, 続けられる, 頑張れると思う。女性同士がスクラムを組んで支えあうことが大事だと思う。子育て期は, 子育てにある程度シフトして, それでも何とか仕事を続けてほしい。そしてその時期を通り過ぎたら, 今度は若い人たちをもっと支援してあげる, ということが男女を問わず, 気軽に, 当たり前のできる職場になったら一番いいのではないだろうか。

## 第7回・第8回CAPWRセミナー

### 『女性のためのアサーティブ・トレーニング』

#### 1 主催

広島大学男女共同参画推進室女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)

#### 2 日時と会場

第7回：平成21年10月19日(月) 15:00～17:00  
(東広島キャンパス) 本部棟2階会議室

第8回：平成21年10月23日(金) 17:30～19:30  
(霞キャンパス) 霞総合研究等701セミナー室

#### 4 参加者

本学の教職員、学生

(第7回：約30名、第8回：約30名)

#### 5 内容

講演者：石井三恵(広島女学院大学大学院教授・NPO  
法人アサーティブジャパン理事)

演題：『女性のためのアサーティブ・トレーニング』

講演の概要：

第7回・第8回CAPWRセミナーでは、東広島キャンパスおよび霞キャンパスにおいて、同一内容の講演を行った。

「アサーティブネス(Assertiveness)」の訳は「自己主張すること」である。しかし、アサーティブ・コミュニケーションとは、単に自分の意見を押し通すことを意味するのではない。相手のことも、自分のことも尊重しながら、自分の意見や気持ちをわかりやすく、誠実に、率直に相手に伝え、対等な関係を築くコミュニケーション方法のことである。また、表現のために用いた言葉、態度の責任は自分自身にあるという自己責任の上で成立してこそ、アサーティブ・コミュニケーションといえる。

人はコミュニケーションの手段として、攻撃的に自分の感情を吐露したり、作為的に嫌味を言ったり、受身的に全ての事の原因が自分にあるのではとオロオロしたりすることがあるが、このような状況では決して人間関係をつなぐコミュニケーションは構築されない。周囲とアサーティブな関係を築くためのポイントとして、話し手は「星のように輝いた目」で自分の伝えたいことを誠実に、率直に表現すること、また、聴き手は「ハートの目」でその言葉を最後まで温かく受け止めることが大切である。

後半は参加者が身近な事例を用いて実践のグループワークを行った。初対面の参加者同士が、限られた時間の中で、自分の伝えたいことをわかりやすく話すことで、アサーティブ・コミュニケーションの大切さや難しさを認識することができる機会となった。

広島大学男女共同参画推進室 女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)主催  
第7回・第8回CAPWRセミナー

### 女性のためのアサーティブ・トレーニング

日頃の研究生活の中で、周りの人に自分の気持ちを上手く伝えられない、どう伝えたらよいか分からない、といった事はありませんか。職場や学校生活の中で「頼む」「断る」「ほめる」「ほめられる」事が苦手と感じていませんか。

『アサーティブネス(Assertiveness)』の訳は「自己主張すること」ですが、単に自分の考えを押し通すことではありません。相手を傷つけることなく、自分も尊重しながら、自分の感情や気持ちをわかりやすく伝えることです。アサーティブなコミュニケーションの仕方を身に付けて、周囲の人と対等な関係を築く訓練をしてみよう。

**日程**  
東広島キャンパス  
日時：平成21年10月19日(月) 15:00～17:00  
場所：本部棟2階 会議室  
霞キャンパス  
日時：平成21年10月23日(金) 17:30～19:30  
場所：霞総合研究棟701セミナー室

**講師プロフィール**  
石井三恵 (いしゐ みづゑ)  
(広島女学院大学 教授)

**講師**  
石井三恵さん(広島女学院大学 教授)

**対象**  
広島大学に勤務する女性教職員・女子大学院生

**定員・申込方法**  
各会場とも30名(先着順)  
所属と職名・氏名・希望会場を明記の上、  
10月15日(木)までに、下記宛先まで  
メールまたはファックスでお申し込みください。

**申込・問合せ先**  
広島大学男女共同参画推進室  
女性研究者支援プロジェクト(CAPWR) 担当：井上  
Tel/Fax (082) 424-4255  
E-mail capwr55@hiroshima-u.ac.jp

**主な活動**  
女性のための能力開発研修、人材育成プログラム作成、高校職  
講師、男女共同参画社会のための講座など、広島県女性会議や広  
島市女性教育センター主催講座の企画から参加、滋賀県、香川県、  
茨城県などの教育委員会や女性センター、広島県内の自治体など  
からの講師依頼も受けて、

**経歴は、**医療・介護、福祉職の分野のトレーニングを担当し、  
新広島大学短期大学部、神戸看護専門学校などで職士研  
修、あるいは健康福祉のための講座やワークショップを実施してい  
る。また、広島県高等学校教員研修において、コミュニケーション  
から見た人権教育講座ならびに研修も担当。

**特定非営利活動法人アサーティブジャパンの理事であり、認定  
トレーナーとしてアサーティブ・トレーニングの広範につとめる。**  
その他、多くの大学でサポートプロジェクト(副題)の講師、広  
島県産協の理事。

## 第9回CAPWRセミナー

『草食系男子の恋愛について～その生態と男女共同参画～』

### 1 主催

広島大学男女共同参画推進室女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)

### 2 日時

平成22年1月12日(水) 10:30～12:00

### 3 会場

(東広島キャンパス) 学士会館レセプションホール

### 4 参加者 本学の教職員, 学生 (約100名)

### 5 内容

講演者: 森岡正博(大阪府立大学教授)

演題: 「草食系男子の恋愛について～その生態と男女共同参画～」

講演の概要:

草食系男子という言葉は、2006年に初めてメディアで使用され、森岡氏の著書『草食系男子の恋愛学』の刊行とともに、2008年～2009年にかけてその意味が世間に拡散し、2009年の新語流行語大賞トップテンに入賞するに至った。メディアからの注目を集めると同時に、世界からも注目される言葉となったものの、その意味するところは講師の森岡氏の定義に反し、見かけの風貌をもって男性を草食系・肉食系に種類分けしようとする動きがみられるようになる。では、本来の草食系男子とはどのような定義をもって語る事ができるのか、森岡氏は「新世代の優しい男性で、異性をががつと求める肉食系ではない。異性と肩を並べて優しく草を食べることを願う男性のこと。」と定義している。要するに、心の問題としてとらえるべきであって、風貌がいかにあっても、草食系のマインドを持った男性であれば、草食系男子である、ということになる。また、一言に「草食系・肉食系」といっても、様々なパターンがあり、女性の側からすれば、それぞれの特徴を考察しながら関係性を築くことが重要である。男性の側としても「男らしさ」の呪縛を脱出し、多様な男性の生き方があってもよいと認識してこそ必要以上に力を入れることなく、楽に生きていくことが可能となるのではないだろうか。

メディアでの「草食系男子」イメージをみると、弱々しい・仕事ができないなど、否定的な使われ方がされている場合が多い。恋愛において草食系であっても、仕事を積極的にこなすことは可能なはずである。今後、草食系男子に対する批判やバックラッシュが起こらないとも限らない。しかし、男女共同参画社会をつくるためには、草食系男子が増える方が得策ではないだろうか。女性たちがたくましく、頼りがいのある男性を求めようとする心が結局、男権社会を裏側から支えているように思われる。「男らしく(女らしく)きちんとしている」必要はない「人間らしくきちんとしているだけ」でよいのではないだろうか。草食系男子という概念を通して、ジェンダーや男女の問題について視野を広げるきっかけを持ってほしい。

文部科学省科学技術振興調整費「リーダーシップを育む広大女性研究者支援」  
広島大学男女共同参画推進室 女性研究者支援プロジェクト(CAPWR)主催セミナー

第9回 CAPWRセミナー

草食系男子の恋愛について  
～その生態と男女共同参画～

※学内の教職員・学生対象

日時:平成22年1月12日(火) 10時30分～12時  
場所:広島大学 学士会館 レセプションホール

入場無料  
事前申込不要

講演者プロフィール  
森岡 正博  
(もりおか まさひろ)

森岡正博(もりおか まさひろ) 1958年生まれ、哲学者。大阪府立大学人間学研究所長、人間学・現代思想学がらみ専攻。研究テーマは「生命学・哲学・社会学」。生命について学際的に思考する「生命学」や、人間が存在している考える哲学を中心とした、知の探求領域のなかで社会学、ジェンダー・セクシュアリティ、環境問題などを幅広く研究。著書『新世代の優しい男性を中心とした「草食系」の生態』(角川)、『草食系男子の恋愛学』(角川)など多数執筆。

森岡さんのお話を聞いて、「男女共同参画とは何か?」一緒に考えてみましょう。

主催: 推進室  
広島大学 男女共同参画推進室 女性研究者支援プロジェクト(CAPWR) 組織: 加東・文野  
広島県東広島市鏡山1丁目1-2 TEL/FAX 082-424-4355  
E-mail capwr55@hiroshima-u.ac.jp URL http://capwr.com



#### 7-4. 地方自治体等との連携

周辺の自治体等と意見交換し、また、セミナーや講演会の講師として協力しあった。中国四国地方における拠点大学として広島大学が担うべき役割を果たした。

##### 平成 19 年度

- ・地方自治体との意見交換

- 1月24日 東広島市
- 2月21日 広島県教育委員会

##### 平成 20 年度

- ・地方自治体等との意見交換

- 8月8日 東広島市
- 10月14日 広島県
- 11月21日 広島県
- 11月27日 安田女子大学

- ・男女共同参画のまちづくり講演会（小学校区）

- 6月15日 八本松小学校 相田美砂子教授
- 9月7日 久芳小学校 横山美栄子教授
- 9月20日 高屋東小学校 横山美栄子教授

##### 平成 21 年度

- ・地方自治体等との意見交換

- 4月14日 東広島市
- 5月11日 東広島市
- 11月13日 木阪病院

- ・ステップアップセミナー

～コミュニケーションのトレーニング～

- 7月25日（市民文化センター） 坂田桐子教授
- 8月8日（市民文化センター） 坂田桐子教授
- 8月22日（市民文化センター） 坂田桐子教授

- ・男女共同参画のまちづくり講演会（小学校区）

- 9月14日 河内小学校 相田美砂子教授
- 10月24日 三永公民館 横山美栄子教授

- ・セミナー（東広島市と連携）

- 11月9日 「女性のための護身術 - WEN - DO 講座 - 」

- ・全国男女共同参画フォーラム in 広島

- 2月13日（エソール広島） パネル展示参加

- ・国連訓練調査研究所（UN I T A R）広島事務所公開セッション（講演会）

- 3月11日（広島商工会議所） 坂田桐子教授  
「日本におけるジェンダー意識の変革：学術界、特に広島大学を事例に」

## 7-5. 中国四国地方への拡がり

地方にある総合大学として、広島大学の果たすべき役割は大きい。中国四国地方への男女共同参画推進の浸透のための牽引も、その大きな役割の一つである。

「女性研究者支援」の取組みは、全国規模で多くの大学をまきこみ、(いまだに実質的に男社会である) 大学に「男女共同参画」を推進させる役割を果たしている。しかし、この取組みの推進具合には、多くの大規模大学が密集している大都会と、小規模大学が点在している地方とでは、差がある。「女性研究者支援モデル育成」の採択機関は、中国地方で3大学、四国地方では0である。「女性研究者支援」の取組みを、本当の意味で、日本における「男女共同参画」の突破口とするために、私たちは、何をすればよいのだろうか。この取組みは、男女が差別されることなく、誰もがそれぞれの能力を発揮することができる「協働」の社会や組織をつくっていくことを究極の目標としている。中国四国地方におけるこの取組みをさらに推進し、地方の活性化、ひいては日本の活性化につなげていく意識を共有するために、第1回中国四国男女共同参画シンポジウムを開催することとした。

(本報告書 p. 67 をご参照ください。)

平成21年12月21日に開催されたシンポジウムには、地方公共団体や多くの大学から参加者があり、中国四国地方でも静かに男女共同参画の動きが進んでいることがあらためてわかった。パネルディスカッションでさまざまな意見が交換された後、「～『協働』社会へ～ 中国四国地方からのアピール」(本報告書 p. 75) が参加者によって採択された。今後、中国四国地方における男女共同参画の展開が期待できる。

本シンポジウムには、中国四国地方からは、岡山大学・島根大学・広島大学(以上、「女性研究者支援モデル育成」事業採択校)のほか、愛媛大学・香川大学・高知大学・徳島大学・県立広島大学・広島工業大学・広島国際大学・広島市立大学・福山大学の未採択9大学からも参加者があった。

## 7-6. 女性研究者ネットワークの活性化

平成 19 年度に、全学男女共同参画推進委員会の協力を得て、本学女性教員及び研究員のメーリングリストを作成した。常勤の女性教員については、メーリングリストへの参加の意思を確認したところ、数名の辞退者があったものの、ほぼ 100%の参加率を得ている。また、非常勤教員や研究員については、各部署の事務を通じてできる限りの広報を行い、参加希望者を募ったところ、多数の参加を得ている。本学の女性研究者の大多数を網羅したメーリングリスト作成は全国で初めての試みである。2007 年 10 月にメール配信を開始し、主として女性研究者を対象とした研究助成や研究支援に関する情報がタイムリーに提供されている。メーリングリストは、女性研究者に対する情報提供や女性研究者支援事業の活性化に大いに役立っている。

さらに、平成 20 年度には霞キャンパスで独立したメーリングリストを構築した。

平成 21 年度には、子育て等の支援を必要とする教職員を対象とするメーリングリストを構築した。このメーリングリストには、男性教職員も含まれている。

メーリングリストは、本学の情報メディア教育研究センターのシステムを利用して構築し、登録者だけが送受信できるように設定している。また、混乱防止のために、返信メールは、元のメールの送信者だけに届くように設定している。この 3 年間、メーリングリストを原因とするトラブルは皆無である。

情報の正確かつ迅速な発信の場として、ホームページを活用している。『リーダーシップを育む広大型女性研究者支援』の独自 HP と、広島大学男女共同参画推進室の独自 HP の二種類を作成した。

『リーダーシップを育む広大型女性研究者支援』の独自 HP には、この課題に関するお知らせや報告等を随時掲載した。女性研究者を対象とした研究助成に関する情報も提供した。

男女共同参画推進室の HP には、教職員対象の情報(子育て支援等)や学生対象の情報(男女共同参画関連の授業科目リスト等)、等々、本学のさまざまな取組みを掲載し、随時更新している。また、男女共同参画に関連する各種サイトや法律等ともリンクさせている。また、本学の女性教員比率などの統計データも公開している。

広島大学の公式 HP のトップページからワンクリックで男女共同参画推進室のページにリンクするボタンを作成し、容易に男女共同参画推進室のページにたどれるように工夫している。

## 7-7. 学内職場環境調査

広島大学における男女共同参画とワーク・ライフ・バランスの推進のため、各種制度に対する認知度や利用度の実態を把握すると共に、今後どのような制度が必要とされているのか、また制度利用の促進のためにどのような環境整備が必要なのかを把握することを目的として、2008年1月～2月に「広島大学の職場環境に関する調査」を実施した。調査対象は広島大学に在籍する全教職員9,075名であり、アンケート用紙ならびにWeb上で調査を実施した。有効回収数は1900、回収率（配布した調査書に対する回収数の割合）は35.3%であり、回答者の中では、特に研究者（大学教員、研究員など）（27.3%）、正規雇用の事務職員（21.1%）、病院職員（22.3%）などが多くを占めた。また、回答者は男性（41.8%）より女性（56.8%）の方がやや多く、年齢は20歳代（23.4%）と30歳代（32.1%）を併せて過半数となった。この調査の内容に関心の高い層が多く回答したものと考えられる。

本調査報告『広島大学の職場環境に関する調査報告書』は、平成22年3月に発行した。ここには、本調査から示唆された内容の概略を示す。

- (1) 現在ある制度については、「産前・産後休暇」「育児休業」「広島大学病院保育園」「旧姓・通称使用」を除き、かなり認知度が低い（「知っている」という回答が15.3%～46.5%）。既存の制度を周知し、認知度を高める必要がある。
- (2) 今後必要な制度として、特に要望が高かったもの（「非常に必要」という回答の割合が高いもの）は、
  - 「育児・介護休業中の給与保障（49.6%）」
  - 「病児保育・病後児保育、一時預かりや送迎などの保育・介護サービス（48.7%）」
  - 「育児・介護休業中でも復帰のために研修や情報にアクセスできる制度（42.5%）」
  - 「男性の育児・介護参加を進めるための制度（有給の育児休暇や短時間勤務など）（42.2%）」などである。これらの選択肢については、「まあ必要」と回答した者を併せるといづれも90%弱が必要と答えている。また、介護関連では「介護休業制度の対象を広げること（女性で51.1%）」への要望が高かった。自由記述からは「育児中に異動や勤務時間、職務内容等を選べるフレキシブルな勤務体制を整えること」への要望が高いことが伺えた。これらの要望を踏まえて、導入可能な制度を検討することが必要である。
- (3) 制度そのものを整えることも重要であるが、現状では「制度があってもそれを利用しにくい雰囲気」が職場にある（全体で42.9%）ため、「制度を利用できる職場環境づくり」への要望も、特に女性で非常に高かった（育児については43.1%、介護については68.1%）。そのためには、「育児や介護をすることへの職場の理解・配慮を高める」という意識面での改革と、「仕事量そのものの低減や代替職員等の配置によって、休業中の業務のしわ寄せが他の職員に行かないようにする工夫」という制度面での改革が必要であることが、調査項目への回答や自由記述等から示唆された。

- (4)以上の要望は、基本的に女性の方が強いが、「男性の育児・介護参加を進めるための制度」は男性の38.9%が「非常に必要」と答えていることから、男性の要望が決して低いわけではないことが伺えた。育児・介護がキャリア形成の上で女性のみを負担となるのではなく、男性も率先して育児・介護に参加し、男女ともに育児・介護と仕事を両立できるような職場環境・体制づくりを進めることが必要である。
- (5) 全般的に、病院職員については、制度の利用しやすさや職場の働きやすさが他の職に比べて低い状態にあり、その傾向は特に女性に強かった。また、研究者については、性別に基づく不当な扱いを経験する女性が他の職に比べて多く、制度の認知度も低い。制度の認知度が低いという点は、非常勤職員についてもあてはまっていた。自由記述の内容から、研究者はその多くが裁量労働制であることによって、また非常勤職員は「非常勤」という立場によって、現行の各種制度が利用できない、もしくはあまり役に立たないと思っている可能性が伺われた。これらの職については、職の特徴に応じた意識啓発や制度の周知、または制度の工夫が必要であることが示唆される。

## 8. 男女共同参画に関する学内意識調査

本調査は、平成18年の広島大学男女共同参画宣言に始まり、女性研究者支援育成モデル事業、男女共同参画推進室の設置等々、本学の男女共同参画への本格的な取組を、学内構成員がどのように捉えているのかを把握し、これまでの成果と今後の課題を明確にすることを目的に実施した。

1. 実施時期：平成21年12月21日（月）～平成22年1月8日（金）
2. 実施対象：本学職員（常勤・非常勤を問わない）
3. 調査方法：学内Web調査
4. 回答数：995
5. 回答者の属性

### ○性別

男性	554	55.7%
女性	434	43.6%
無回答	7	0.7%
N	995	100.0%

### ○年齢

20代	119	12.0%
30代	336	33.8%
40代	305	30.7%
50代	185	18.6%
60代以上	48	4.8%
無回答	2	0.2%
N	995	100.0%

### ○子どもの有無

小学生以下の子どもがいる	319	32.1%
小学生以下の子どもがいない、または子どもがいない	661	66.4%
無回答	15	1.5%
N	995	100.0%

### ○職場

東広島地区	542	54.5%
霞地区	355	35.7%
東千田地区	15	1.5%
その他	79	7.9%
無回答	4	0.4%
N	995	100.0%

### ○職種

教員	403	40.5%
研究員	22	2.2%
職員	529	53.2%
附属教員	36	3.6%
無回答	5	0.5%
N	995	100.0%

### ○雇用状況

常勤（任期なし）	567	57.0%
常勤（任期あり）	259	26.0%
非常勤（1週間あたり20～49時間）	158	15.9%
非常勤（1週間あたり20時間未満）	9	0.9%
無回答	2	0.2%
N	995	100.0%

## 6. 各回答の特徴

### (1) 学内保育園(2カ所)の運営について望むこと (Q7)

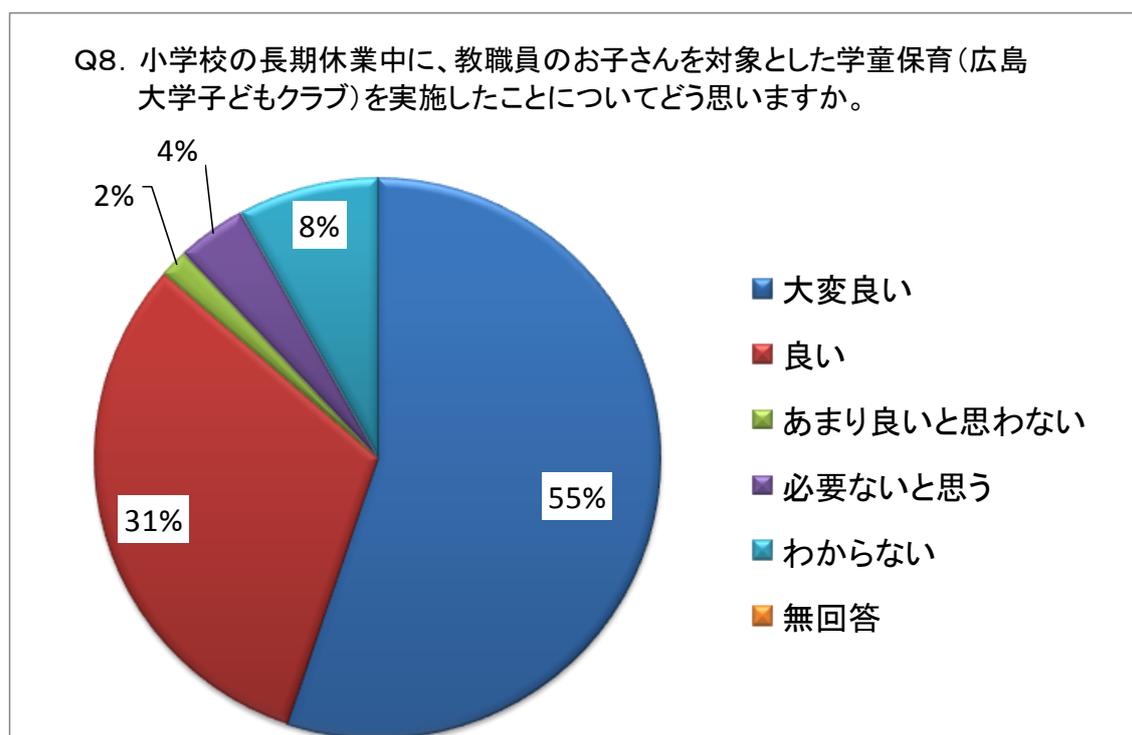
	定員を増やす	学生も利用できるようにする	預かり時間の延長	施設の拡充	開園日を増やす	大学内に保育所は必要ない	特にない	その他
ひまわり(東広島)	252	186	246	149	126	12	377	86
たんぼぼ(霞)	265	161	300	201	158	12	360	68

○東広島地区、霞地区のいずれも、「定員増」と「保育時間の延長」を希望する者が多い。特に霞地区は病院職員の利用が多いことから、時間延長が求められている。

○自由回答では、地域自治体のサービスをカバーする形で、職場での病児保育あるいは病後児保育を希望する意見が複数あった。

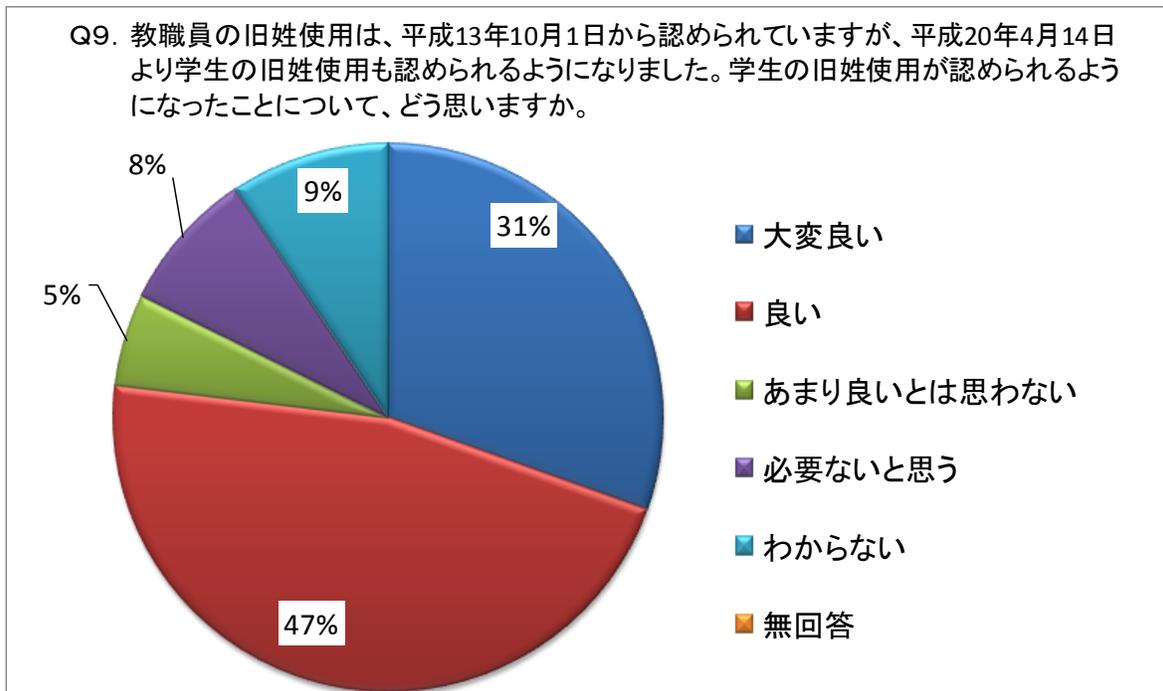
○「子どものいる」者も「子どもはいる」者も回答の傾向に大きな違いはなかったことから、学内保育園の設置運営が職員の認知を得ていることが推察される。

### (2) 長期休業の学童保育(広島大学子どもクラブ)の評価 (Q8)



○本事業の一環として、東広島キャンパスでは、夏休みや冬休みなどの長期休業期間中の学童保育を、小学校6年生まで拡大して実施した(本報告書6-3-1章)。この事業に対しては、回答者に子どものあるなしに関わらず、回答者の9割近くが肯定的に評価していた。

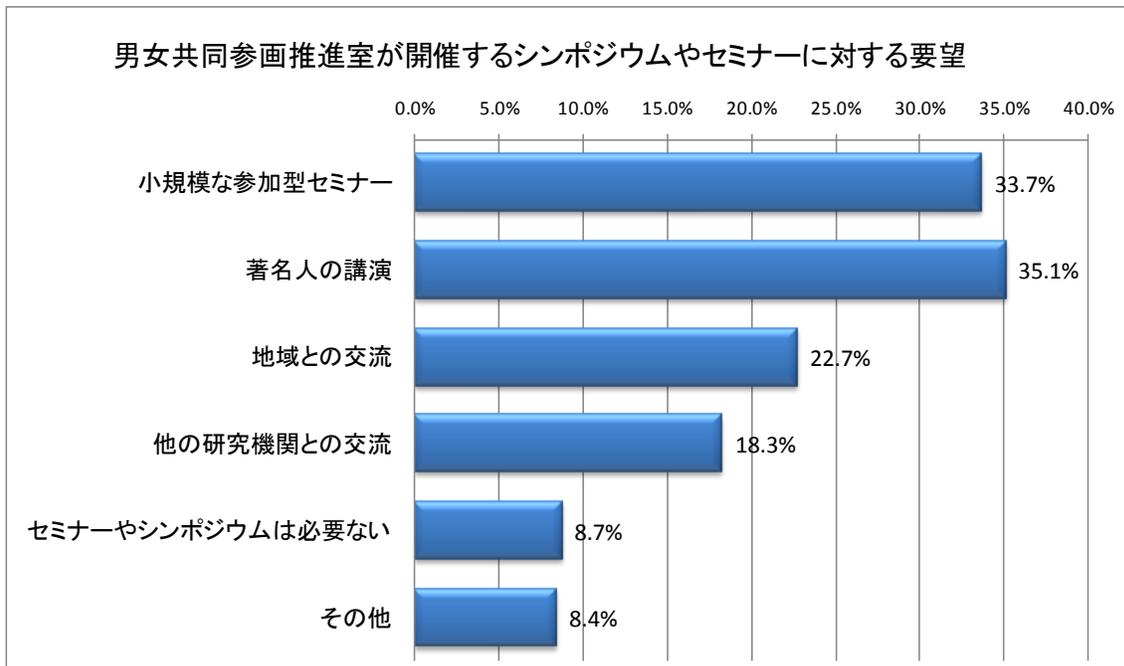
(3) 学生の旧姓使用 (Q9)



○学生の旧姓使用は、平成19年、男女共同参画推進委員会で提案され、進められた。職場環境調査でも職員の旧姓使用についての認知度は高かったが、学生についても「大変良い・良い」とする者は4分の3を超えていて評価は良好である。

○ただ、男女別にみると「良いとは思わない」「必要とは思わない」とする人の割合は女性より男性に高かった。意識改革が求められるところである。

(4) 男女共同参画推進室が開催するシンポジウムやセミナーに対する要望



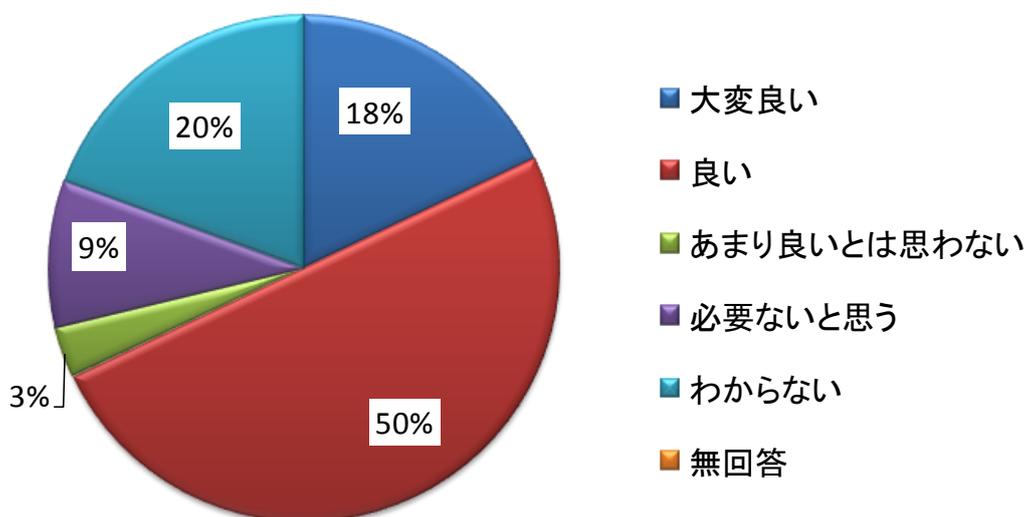
○意識啓発の一環として大小併せて13回のセミナー・シンポジウムを開催（本報告書7-3章）した。この種の事業に対する要望としては、3人に1人が「著名人の講演」または「小規模な参加型セミナー」という方向性の異なる企画を希望している。（両方とも選んでいるのは1割弱）

○総じて女性の回答数の方が多く、「セミナーやシンポジウムは必要ない」の回答も男性の割合が高かった。

○自由回答では、関心のある企画があっても実際には多忙であったり、開催場所や時間が合わずに参加できないことが多い、改善を求めるといった主旨の意見が多数見られた。より多くの方が講演会やセミナーに、勤務時間内に気軽に参加できる機会を確保することが、重要である。

(5) 女子学生の交流会(BBC=ブラウンバッグチャット)の評価

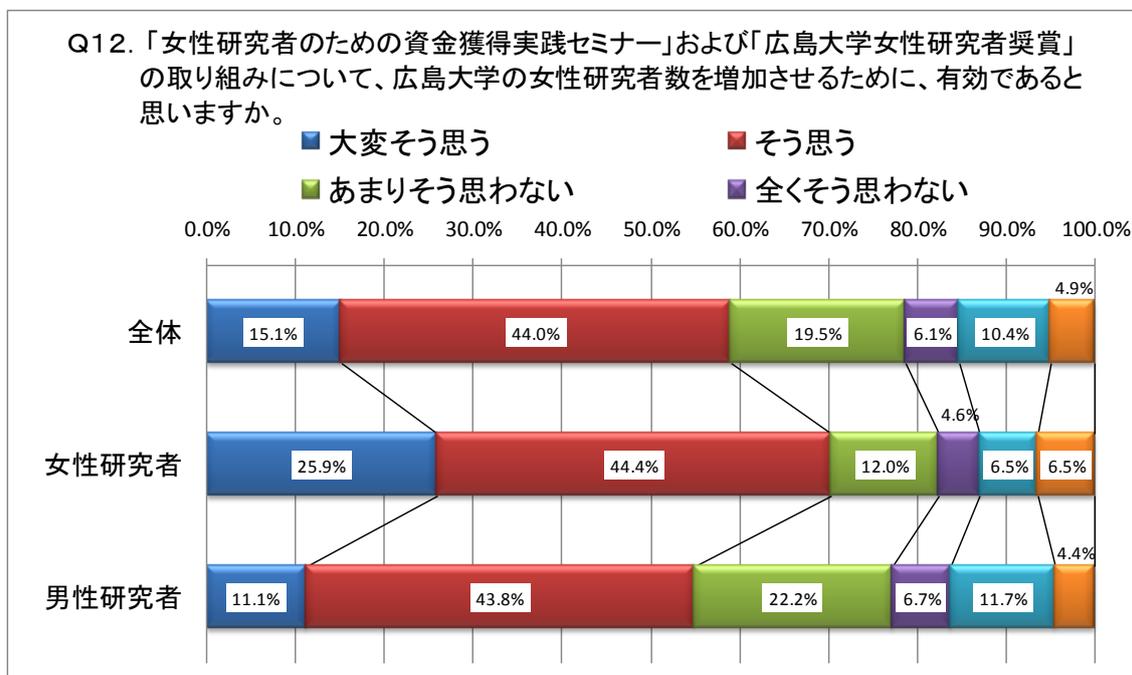
Q11. 女子学生が交流することを目的とした会(BBC=ブラウンバッグチャット)を月に1回、定期的に行っています。このことについてどう思いますか。



BBCは、研究者を目指す女子学生・院生の交流の機会を設けることで、研究室で孤立しやすい女子学生のエンパワーメントを目指した事業である。全体の7割が「大変良い・良い」と評価した。ただ、今回の調査は学生を対象としておらず、直接事業に関わった人からの評価ではなかったためか「わからない」「必要ない」という回答も比較的多かった。

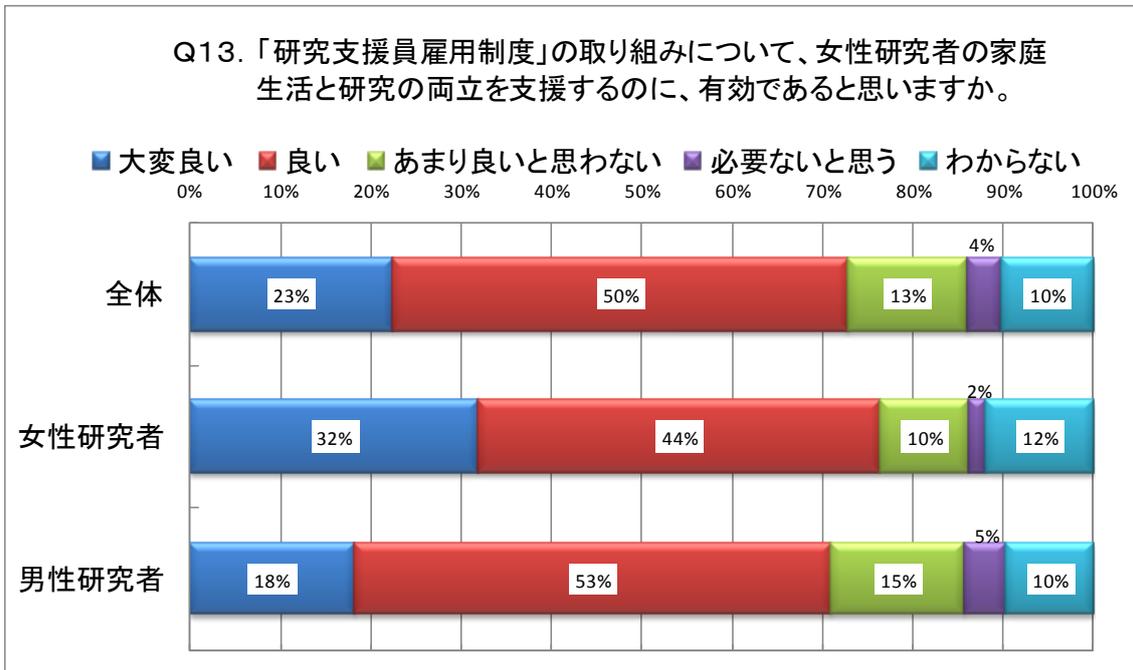
(6) 平成19年度から3年間の科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」の事業が、  
 本学の女性研究者の増加に効果があったかどうかを、主な5つの取組ごとに尋ねた。

1) 「女性研究者のための研究資金獲得実践セミナー」及び「広島大学女性研究者奨励賞」



○肯定的に評価した人の割合は6割で他の取組と比較しても若干少ない。これを男女別にみると、その評価にかなりの差があり、女性研究者の評価の方が高いことがわかる。この3年間にこのセミナーの参加者から実際に外部金を獲得した女性研究者が多く出ており、実質的な効果が上がっている（5-3-4章）が、男性研究者にはその効果や実績がまだ十分に理解されていないと思われる。

2) 女性研究者の両立支援することを目的とした「研究支援員雇用制度」

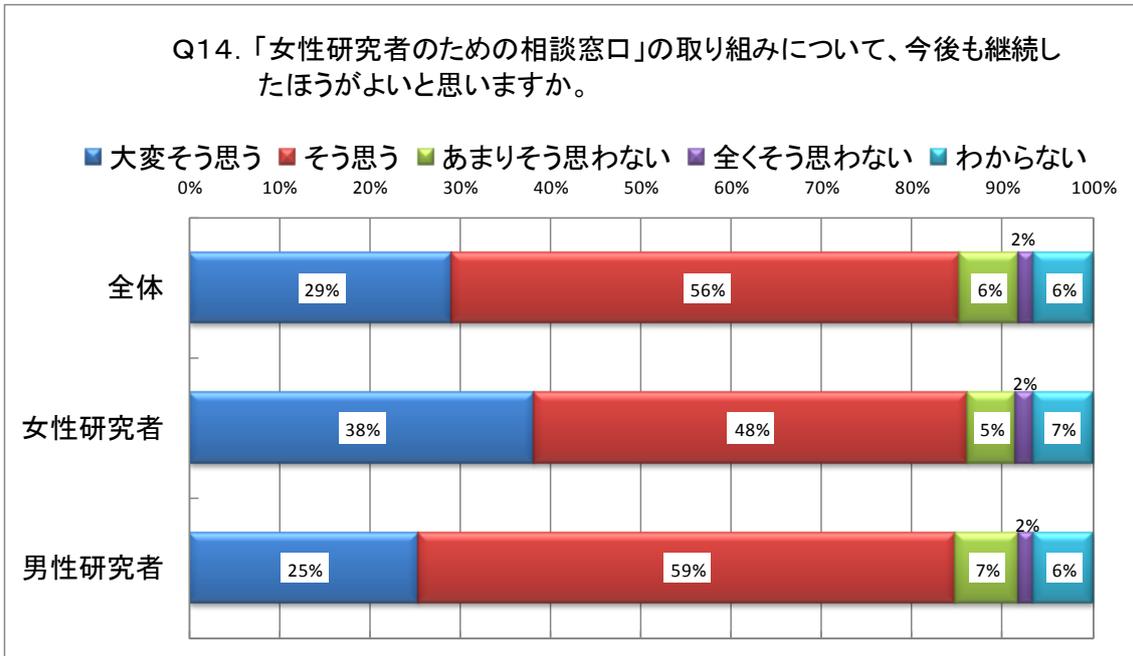


○この事業は、育児・介護など家庭活動と研究の両立を支援するために研究支援員雇用の費用を援助するものである。全体の4分の3が肯定的に評価しており、男女差もそれほど大きくない。

○3) の女性研究者のための相談窓口の評価とも併せると、両立支援に対しては男性研究者も理解があると思われる。

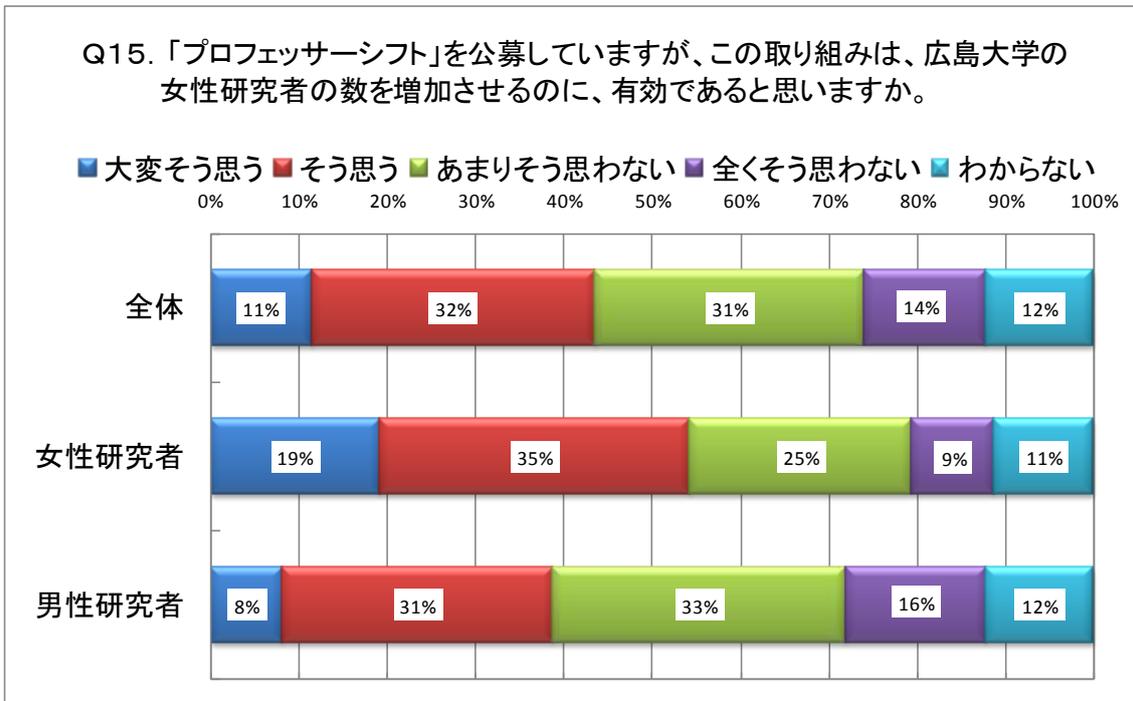
○医歯薬学系の研究者が中心の震地区と理工農学系の研究者が中心の東広島地区の差は男女ともにほとんどなかった。

3) 両立支援のための情報を提供する女性研究者のための相談窓口



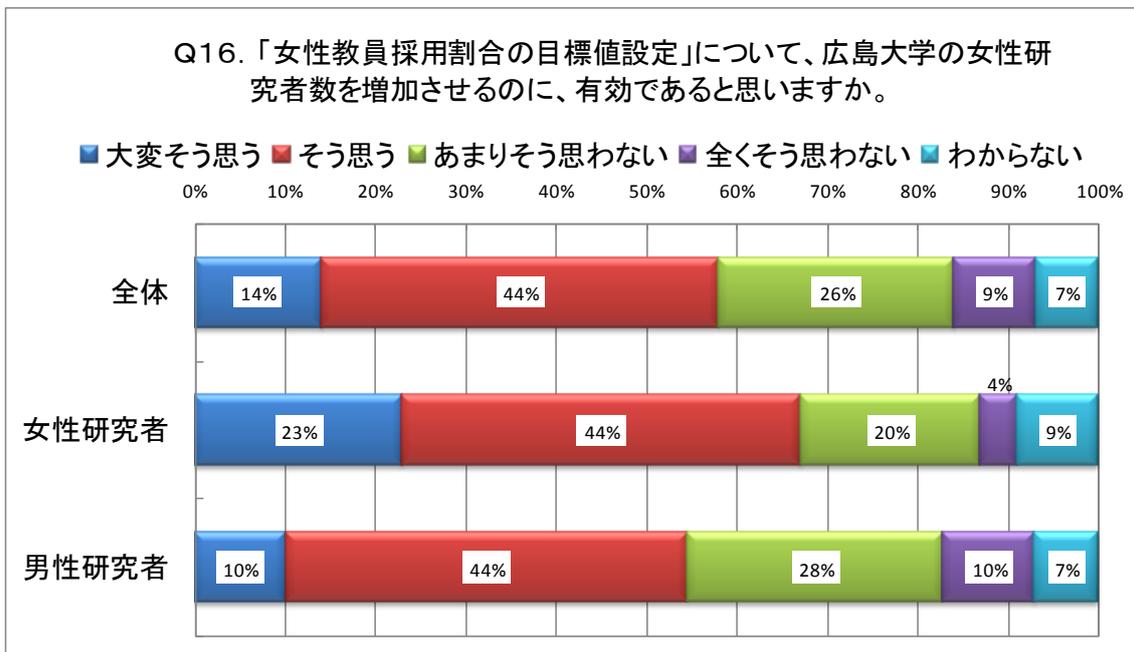
この期間中の相談窓口の利用自体はそれほど多かったわけではないが、評価としては高かった。潜在的なニーズがあると考えられる。

4) 女性研究者が期限付で上位職を体験する「プロフェッサーシフト」



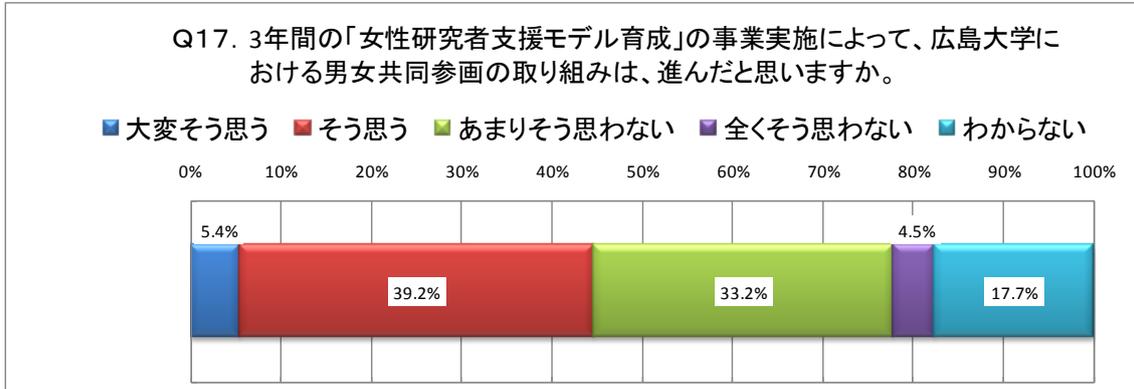
○この事業は、女性研究者の中から助教のポストを一定期間与えるもので、この期間2名の研究者が助教ポストを経験した。5) の女性教員採用割合の目標設定と同様の意義をもつポジティブアクションの取組の一環である。女性研究者を増やすことに効果がある取組かどうかを尋ねたものであるが、全体としての評価は5割弱にとどまった。とくに男性研究者からの評価は低かった。

5) 各部局等における女性教員採用割合の目標値の設定



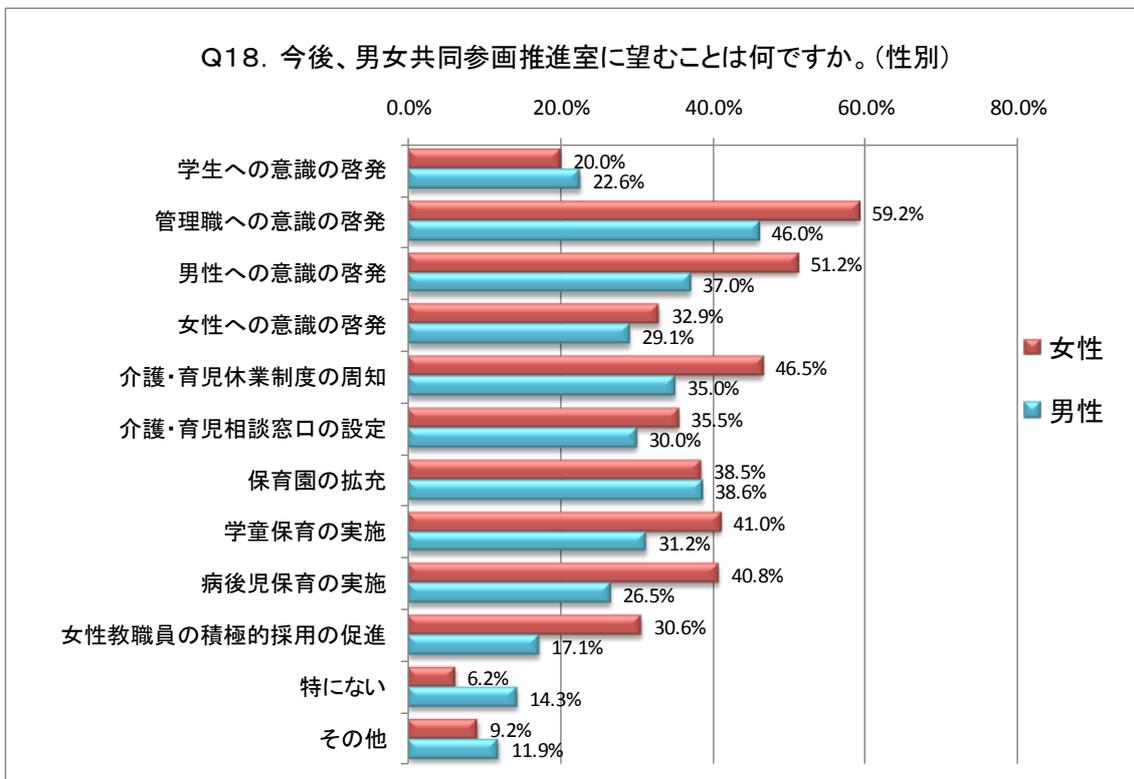
○2) の女性研究者のみを対象としたセミナーや奨励賞，4) のプロフェッサーシフト，5) の女性教員採用割合の目標値設定はいずれも女性研究者を増加させる上で直接的効果が期待できる取組であるが，直接男女の利害が対立する取組であるため，男性研究者の否定的な評価が目立つ。女性研究者への両立支援に男女差が少ないことと比較して，興味深い。

6) 平成19年度から3年間進めてきた、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」の事業が、大学の男女共同参画の推進に効果的に働いたかどうかを尋ねた。評価は肯定的評価と否定的評価がほぼ半々で、男女差や地域差、雇用形態での差などはほとんどなかった。

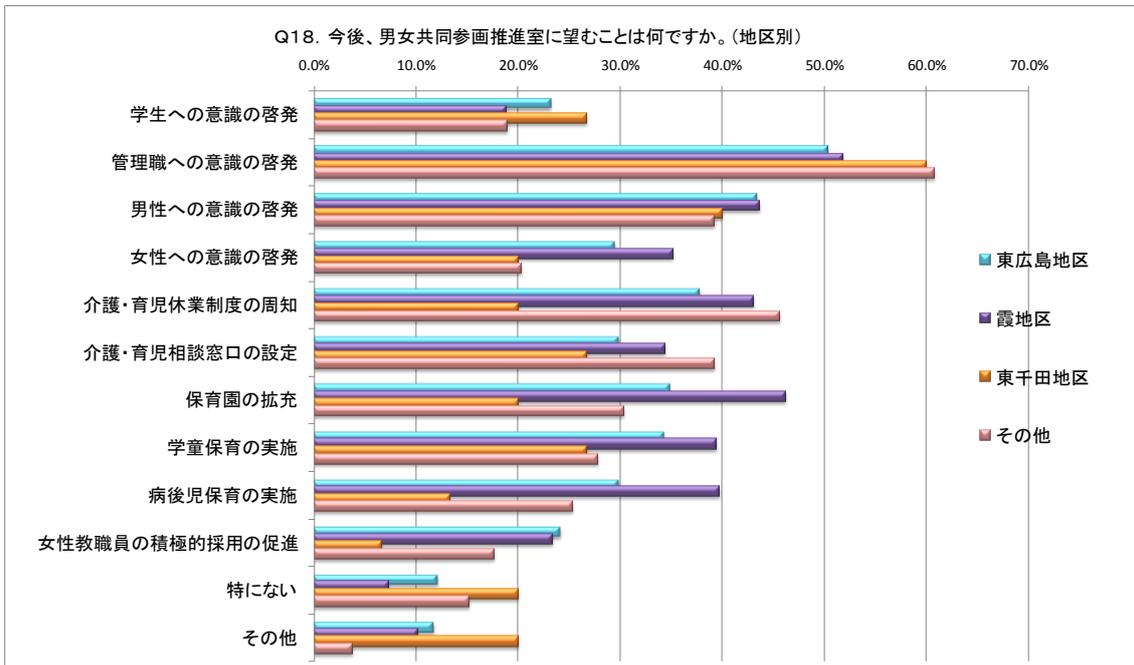


今後、男女共同参画推進室に望むことについて、尋ねた結果は以下の通りである。

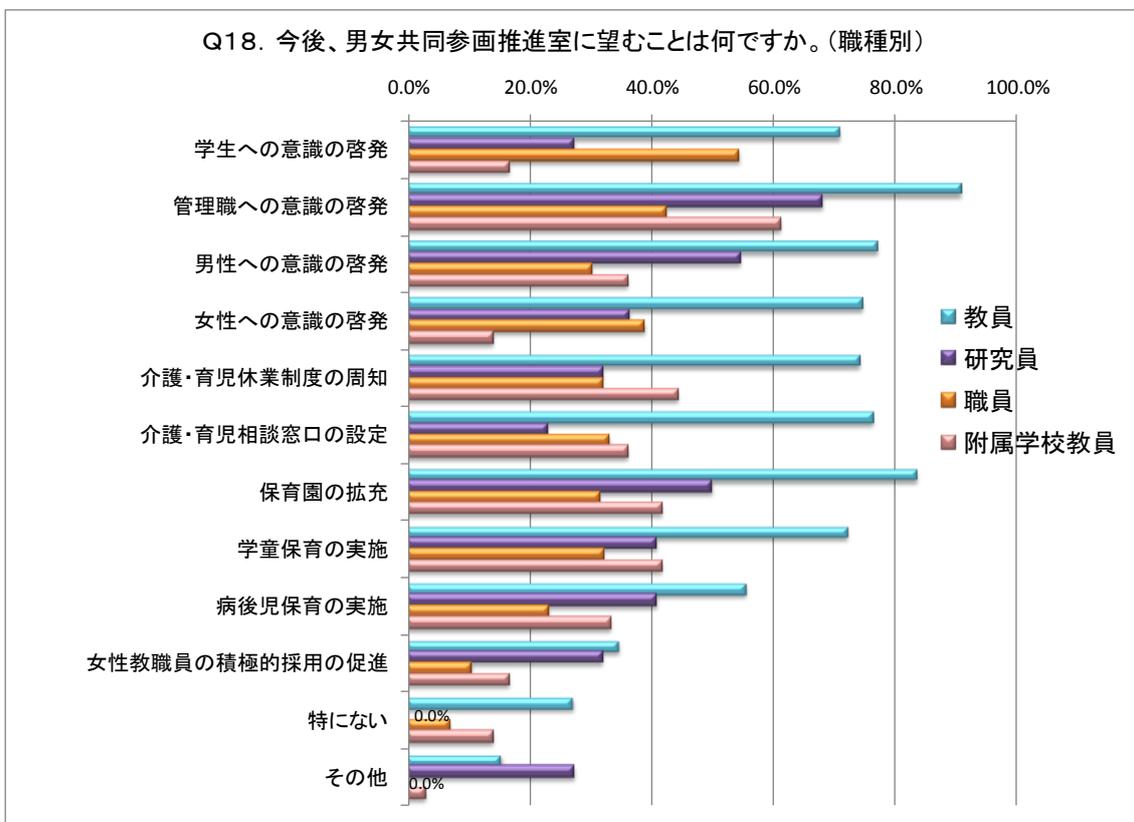
○女性は、ほとんどの項目で男性より選んだ割合が高い。中でも高い割合を示しているのが「管理職への意識啓発」「男性への意識啓発」である。次いで「介護育児休業制度の周知」でこれも職場の理解を求めるものと考えられる。実際の制度上の改善を求めているのは、「保育園」「学童保育」「病後児保育」と子育て関連の制度充実が多かった。



○地区別では、霞地区の介護・育児関連の制度の拡充への要望が目立つ。



○職種別では、教員がいずれの項目も高い割合を示している。職員の場合は、「学生への意識啓発」が他より高い。



## (7) まとめ

今回の調査は、3年間の女性研究者モデル育成事業を中心に、最近進められている男女共同参画の取組に対する本学職員の評価を確認し、今後の取組に生かすために実施した。

両立支援の取組に対しては、男女を問わず概ね高く評価されていた。霞地区では子育て支援、特に病後児保育や保育時間の延長など保育のより一層の充実が求められている。両立支援は女性研究者だけでなく、男女や雇用形態を問わず、本学で働き、学ぶ人たち全体が利用できるように拡充していく必要があるだろう。

意識啓発の取組では、セミナーやシンポジウム企画への評価は高かったが、参加しにくい状況を訴える意見が多かった。また、男女共同参画推進室に望むこととして、男性職員および管理職の意識啓発を求める声が高かった。職場環境の問題としても、男女共同参画に関する意識啓発は今後も重要な課題である。

女性研究者の研究活動に対する支援に対しては、両立支援の形であれば男性研究者の理解が得やすいが、ポストや研究資金に関わる支援については、理解がまだ十分ではない。また、ポジティブアクションについても依然として男性の反対意見が多い。これもまた、制度づくりと併せて意識啓発の一つの大きなテーマである。

全体として、事業の実際の成果は、直接関わっていない人たちにはまだ十分に認識されていないようである。また、短期間には成果の出にくい取組もあったので、今後も引き続き成果のチェックをしていく必要があるだろう。

## 9. 広島大学の女性教員の採用割合の年次変化

### 9-1. 女性教員採用に関する決定事項

広島大学では、女性教員を着実に増やす取組みを次のように進めている。

(1) 公募文書に、同等と評価された場合は女性を採用することを明記

教育研究評議会（平成 19 年 9 月 25 日）において承認された。公募文書に記載する文言が検討され、和文の場合は 2 種類の雛形が、英文の場合は 1 種類の雛形が認められた。これ以降、広島大学のどの部局等においても、教員・研究員の公募はすべて、「同等の場合は女性を採用する」原則のもとで人事選考が進められている。

(2) 女性教員採用の方針（平成 20 年 3 月 11 日教育研究評議会）

・本来、公募により後任補充すべき職に、適任の女性候補者がいる場合は、各部局等の教授会等の判断により公募によらず女性教員を採用する。

・教育研究体制を充実強化する必要がある分野に、適任の女性候補者がいる場合は、各部局等の教授会等の判断により学長裁量分（時限付き）の措置を受けた上で女性教員を採用する。

(3) 部局ごとの女性教員の採用割合

教育研究評議会（平成 20 年 5 月 20 日）において、各部局等における女性教員採用割合の目標値を設定した。設定にあたり、男女共同参画基本計画（第 2 次）の趣旨に則り、次のどちらかの数字を目標値とすることとした。

- ・研究科の博士課程（後期）学生の女性割合（平成 19 年 5 月 1 日現在）
- ・第 3 期科学技術基本計画で掲げられた採用目標  
（理学系 20%，工学系 15%，農学系 30%，保健系 30%）

### 9-2. 女性教員の採用割合

設定した女性教員採用割合の目標値および実績値を次に示す。どの研究科も前項(1)～(3)の取組み開始後である平成 20 年度以降は、女性教員の採用割合が増加傾向にある。

部局等	女性教員採用割合 (%)				
	実績				目標
	H18	H19	H20	H21	
総合科学研究科	11	0	33	75	30
文学研究科	0	14	67	33	30
教育学研究科	33	25	26	27	30
社会科学研究科	0	20	50	50	30
理学研究科	0	0	0	13	17
先端物質科学研究科	0	0	0	0	6
保健学研究科	63	67	43	100	50
工学研究科	0	0	6	17	12
生物圏科学研究科	0	0	33	0	26
医歯薬学総合研究科	4	34	22	32	27
国際協力研究科	0	0	0	0	30
法務研究科	0	50	0	0	27
原爆放射線医科学研究所	0	50	25	0	27
病院	6	0	0	0	30
センター群 (人文社会系)	0	57	40	100	30
センター群 (自然科学系)	0	33	0	25	25
計	10	24	22	27	

※平成 21 年度は、平成 22 年 3 月 1 日までの実績値

### 9-3. 女性教員の割合

	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※			平成 22 年 3 月 1 日		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
教授	558	34	5.7	545	35	6.0	544	38	6.5	550	38	6.5
准教授	421	41	8.9	416	45	9.8	411	42	9.3	407	44	9.8
講師	88	14	13.7	102	11	9.7	101	15	12.9	101	16	13.7
助教	365	68	15.7	357	69	16.2	341	75	18.0	331	77	18.9
助手	16	7	30.4	11	3	21.4	12	2	14.3	11	1	8.3
合計	1448	164	10.2	1431	163	10.2	1409	172	10.9	1400	176	11.2

※各年度 5 月 1 日現在 @女性の割合 (%)

## 10. 広島大学の教職員の職名別在職状況

### (1) 附属高等学校教諭等の職名別女性比率

職名	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
教頭	2	0	0	2	0	0	2	0	0
教諭	84	20	19.2	83	21	20.2	82	22	21.2
養護教諭	0	2	100	0	2	100	0	2	100
合計	86	22	<b>20.4</b>	85	23	<b>21.3</b>	84	24	<b>22.2</b>

### (2) 附属小・中学校・幼稚園教諭等の職名別女性比率

職名	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
教頭	7	2	22.2	7	2	22.2	6	3	33.3
教諭	57	36	38.7	57	36	38.7	55	38	40.9
養護教諭	0	9	100	0	9	100	0	9	100
栄養教諭	0	1	100	0	1	100	0	3	100
合計	64	48	<b>42.9</b>	64	48	<b>42.9</b>	61	53	<b>46.5</b>

### (3) 一般職員（事務系）の職名別女性比率

職名	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
部長・課長・室長	38	3	7.3	42	3	6.7	46	2	4.2
副課長・総括主査・専門員	45	3	6.3	39	2	4.9	33	3	8.3
主査	157	19	10.8	153	26	14.5	150	33	18.0
主任	57	65	53.3	40	60	60	37	51	58.0
グループ員	88	69	43.9	89	81	47.6	93	83	47.2
合計	385	159	<b>29.2</b>	363	172	<b>32.1</b>	359	172	<b>32.4</b>

## (4) 一般職員（図書系）の職名別女性比率

職名	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
副図書館長・グループリーダー	4	0	0	3	1	25.0	3	1	25.0
専門員	2	0	0	1	0	0	1	0	0
主査	5	6	54.5	4	7	63.6	5	7	58.3
主任	1	5	83.3	2	5	71.4	2	5	71.4
グループ員	4	4	50.0	5	4	44.4	4	5	55.6
合計	16	15	<b>48.4</b>	15	17	<b>53.1</b>	15	18	<b>54.5</b>

## (5) 一般職員（施設系）の職名別女性比率

職名	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
副理事・グループリーダー	4	0	0	4	0	0	4	0	0
専門員	6	0	0	5	0	0	5	0	0
主査	15	0	0	14	0	0	15	0	0
主任	4	0	0	4	0	0	4	0	0
グループ員	4	1	20.0	5	0	0	5	1	16.7
合計	33	1	<b>2.9</b>	32	0	<b>0</b>	33	1	<b>2.9</b>

## (6) 教室系技術職員の職名別女性比率

職名	平成 19 年度※			平成 20 年度※			平成 21 年度※		
	男性	女性	@	男性	女性	@	男性	女性	@
技術統括・技術副統括	3	0	0	3	0	0	3	0	0
技術長	7	0	0	6	1	14.3	5	1	16.7
技術班長・技術専門職員	23	4	14.8	24	2	7.7	26	1	3.7
技術主任	12	0	0	13	0	0	10	0	0
技術員	26	3	10.3	23	4	14.8	25	4	13.8
合計	71	7	<b>9.0</b>	69	7	<b>9.2</b>	69	6	<b>8.0</b>

※各年度 5 月 1 日現在 @女性の割合 (%)

## 11. 広島大学における女性の歩み

### 11-1. 女子教育の歴史（広島大学の創立まで）

広島大学の前身校の歴史を、女子教育に注目して、概観する。  
（参考文献：「広島大学五十年史」）

明治7年（1874年）7月 白島学校を広島県が創立  
（のちの、広島県広島師範学校）

[広島大学 学校教育学部の前身]

明治15年（1882年）広島師範学校に女子部が設置される  
（明治26年（1893年）女子部 廃止）

明治31年（1898年） ふたたび女子部 設置

明治41年（1908年）7月1日 広島県三原女子師範学校 設置  
（広島師範学校女子部を継承）

（日露戦争後、女子教育が重視され、女子教員の養成が重要とされたため）

昭和18年（1943年） 官立広島師範学校の女子部 となる  
（広島県広島師範学校が官立広島師範学校となる）

広島県三原女子師範学校の女性の学校長  
桜井 香織（昭和10年～昭和17年）

明治20年（1887年）12月6日  
広島高等女学校 創設（翌1月に開校）（校主：山中正雄）  
（高等女学校としては、日本で三番目）  
（初は現・お茶大附属高（明治15年））  
（のちの、私立山中高等女学校）  
（のちの、広島女子高等師範学校附属山中高等女学校）  
[広島大学 附属福山高校の前身]

広島高等女学校（のちの「山中高女」）の女性の校長  
千田そも子（明治20年～明治23年）  
松岡みち（明治23年～明治44年）  
山中トシ（昭和15年）

「山中高女」により、山中氏は三代にわたり、広島県下の女子教育に大きな貢献。全国  
の高等女学校のなかでも屈指の存在とよばれるようになる。昭和15年頃から、近代  
女子教育の先覚としての目的は達したとして、国への寄附について働きかけを始める。

昭和20年（1945年）3月31日 山中高等女学校 閉校（国に寄附）

昭和 20 年（1945 年）4 月 1 日  
広島女子高等師範学校附属山中高等女学校 発足

昭和 20 年（1945 年）3 月 28 日  
広島女子高等師範学校（女高師） 設置  
（東京と奈良の女子高等師範学校に次いで三番目）  
東京女子高等師範学校 明治 8 年（1875 年）  
奈良女子高等師範学校 明治 41 年（1908 年）  
〔広島大学 教育学部の前身の一つ〕

昭和 4 年（1929 年）4 月 1 日広島文理科大学 設置  
入学資格として「女子高等師範学校卒業生」が含まれており，女性の入学が，制度として認められていた。開学初年より女子入学者が，毎年 2 名程度あった。昭和 25 年度までに，58 名の女子入学者。

昭和 24 年（1949 年）5 月 31 日  
広島大学 設置  
昭和 24 年 6 月 15 日 第 1 回入学試験（全学募集人員 1455 名）  
志望者 2732 名（女子 162 名）  
昭和 24 年 6 月 27 日 合格発表 1279 名（女子 120 名）  
（教育学部 2 年課程では定員に満たず，二次募集）  
昭和 24 年 7 月 18 日 第 1 回入学宣誓式  
（第 1 回入学許可数 1304 名）（この内，女子は 86 名）  
  
昭和 27 年 3 月 31 日 広島女子高等師範学校 廃止  
（卒業生総計 255 人：理科 208 人，家政科 109 人，体育科 38 人）

昭和 28 年（1953 年）  
広島大学大学院 設置（文学，教育学，理学研究科）  
修士課程と博士課程

昭和 28 年 5 月 31 日 第 1 回入学式  
79 名が入学（内，女性は 2 名）（文学 1 名・教育学 1 名）

## 1 1 - 2. 広島大学の女性の教授

### (1) 広島大学が発足してから最初と二番目の女性教授

昭和 36 年までは，全学で女性教授はこの二名だけであった。

岡上 誠子（おかのうえ せいこ）

東京女子高等師範学校（理科）卒業（昭和 5 年 3 月）

広島文理科大学 化学科 卒業（昭和 11 年 3 月）

昭和 25 年 4 月 12 日 理学博士（広島文理科大学）

「米の脂肪に関する研究」

昭和 26 年 4 月 1 日～昭和 46 年 3 月 31 日：広島大学教育学部福山分校教授

昭和 46 年 4 月 27 日 広島大学名誉教授 授与

専門：家政学（米の生化学的，食物学的研究。γ線照射米）

荘司 雅子（しょうじ まさこ）

奈良女子高等師範学校 卒業（昭和 7 年 3 月）

広島文理科大学 教育学科 卒業（昭和 13 年 3 月）

広島文理科大学 研究科 修了（昭和 18 年 3 月）

昭和 28 年 1 月 16 日 文学博士（広島文理科大学）

「フレーベル研究」

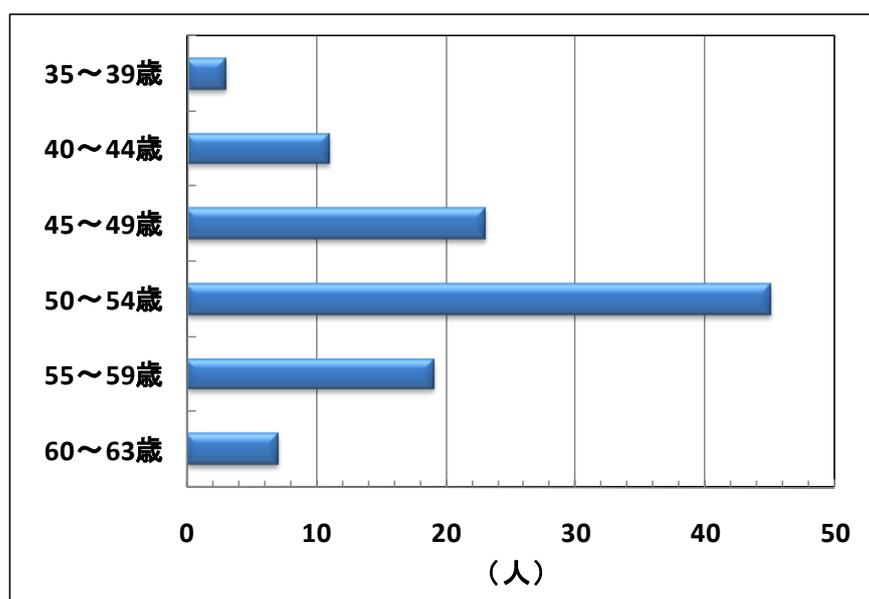
昭和 29 年 4 月 1 日～昭和 48 年 4 月 1 日：広島大学教育学部教授

昭和 48 年 4 月 23 日 広島大学名誉教授 授与

専門：西洋教育史，幼児教育学

### (2) 広島大学の女性教授の総数

広島大学の創立以来の女性教授の総数は，108 名（平成 21 年 5 月 1 日現在）である。現在，在籍している女性教授は，38 名である。右グラフは，108 名の女性教授の，教授職に就いた時の年齢の分布である。



(3) 女性教授の学位

平成 21 年 5 月までの計 108 名の女性教授の取得している学位を次にまとめる。

(種類)	人数	(種類)	人数
Ph.D	7	博士(教育学)	7
Ed.D	1	博士(医学)	5
医学博士	14	博士(理学)	2
理学博士	8	博士(学術)	3
教育学博士	3	博士(農学)	2
文学博士	3	博士(文学)	2
法学博士	2	博士(学校教育学)	1
工学博士	2	博士(保健学)	1
学術博士	1	博士(経済学)	1
神学博士	1	国際学修士	1
農学博士	1	修士(法学)	1
保健学博士	1		
哲学博士	1		

(4) 広島大学出身で初めての広島大学の女性教授

西岡 みどり (にしおか みどり)

広島大学理学部生物学科 卒業 (昭和 31 年 3 月)

広島大学大学院理学研究科修士課程 (昭和 34 年 3 月 修了)

博士課程 (昭和 37 年 3 月 単位取得退学)

昭和 38 年 5 月 20 日 理学博士 (広島大学)

“Studies on Amphidiploids and Diplo-tetraploid Hybrids in Brown Frogs”

「アカガエルにおける複二倍体および二倍四倍性雑種の研究」

昭和 47 年 3 月 1 日～平成 7 年 3 月 31 日：広島大学理学部附属両生類研究施設教授

平成 7 年 5 月 23 日 広島大学名誉教授 授与

専門：発生学，遺伝学，両生類発生遺伝学

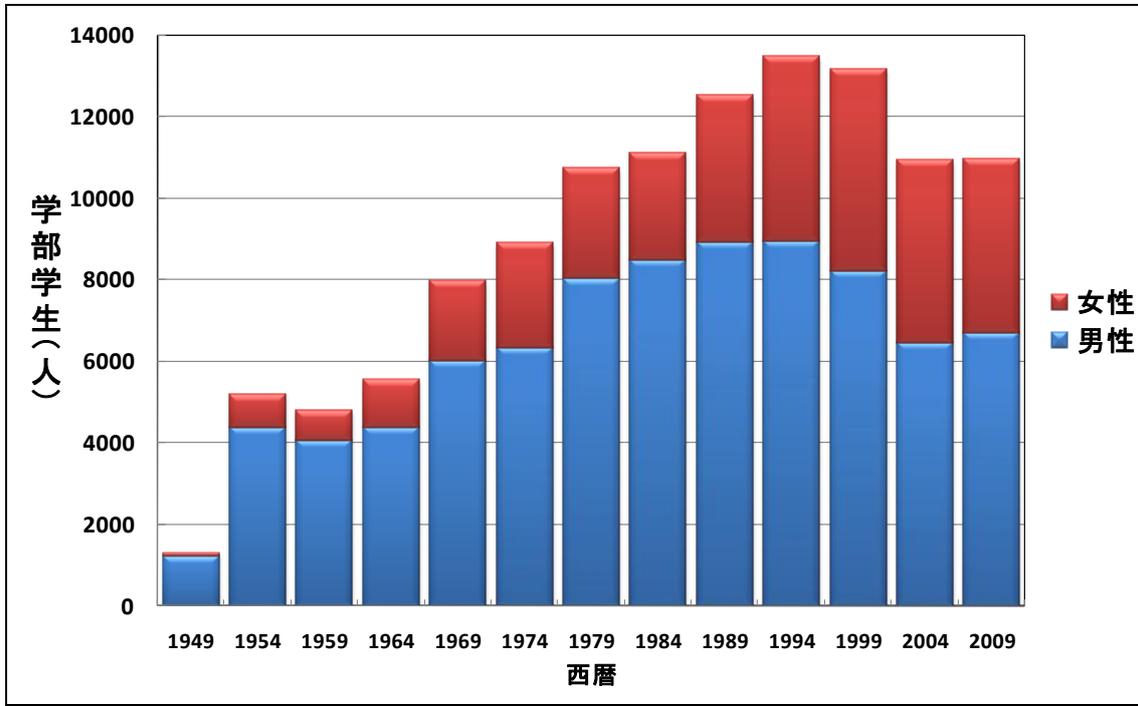
(5) 女性の名誉教授

広島大学の名誉教授は，昭和 28 年から平成 21 年 5 月までに，計 1042 名に授与されている。そのなかで，女性は 35 名である。

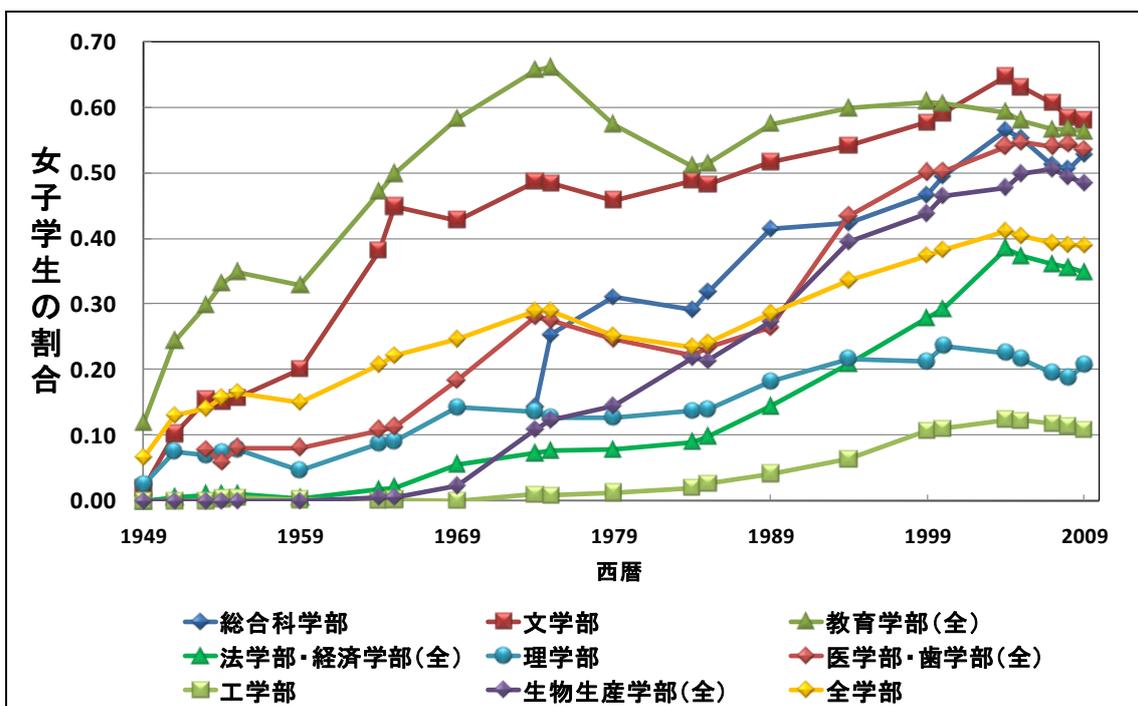
11-3. 広島大学の女子学生数

(1) 学部生

【学部生の数の変移】(昭和24(1949)年の創立～)

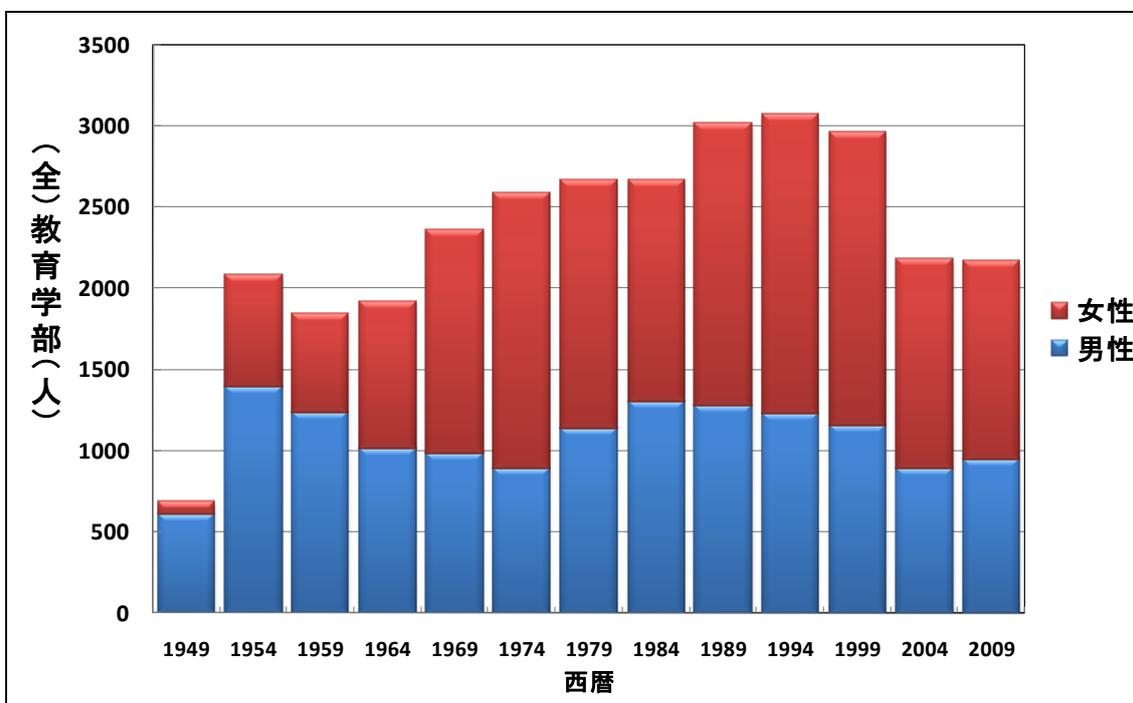
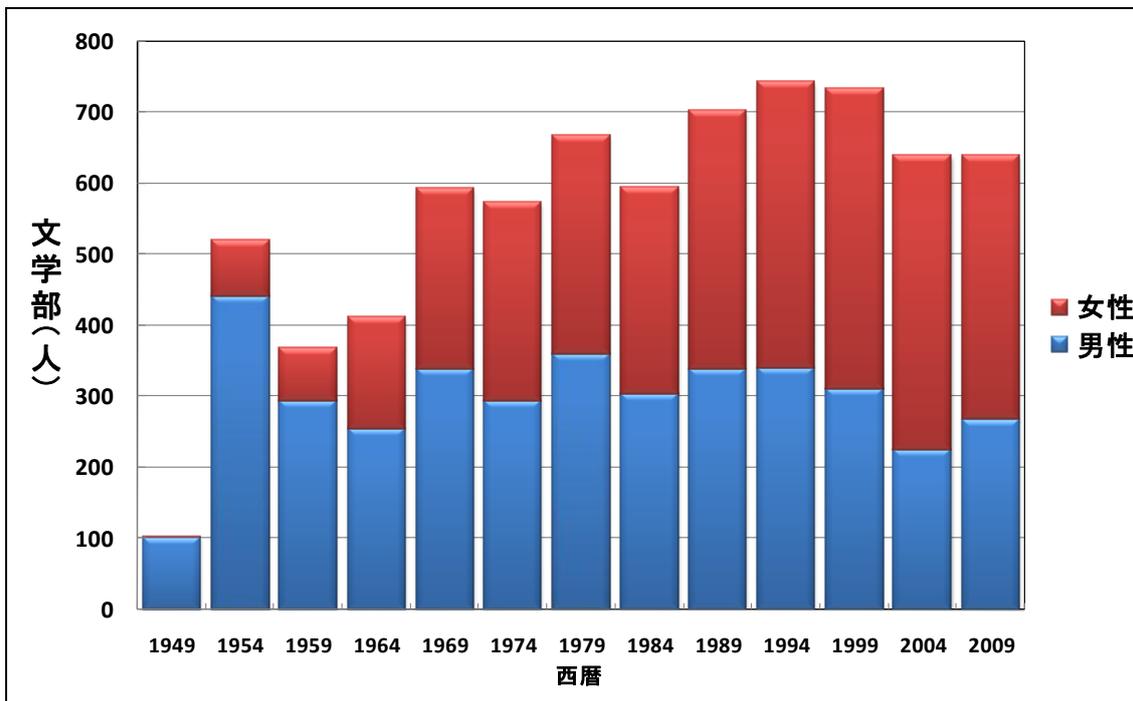


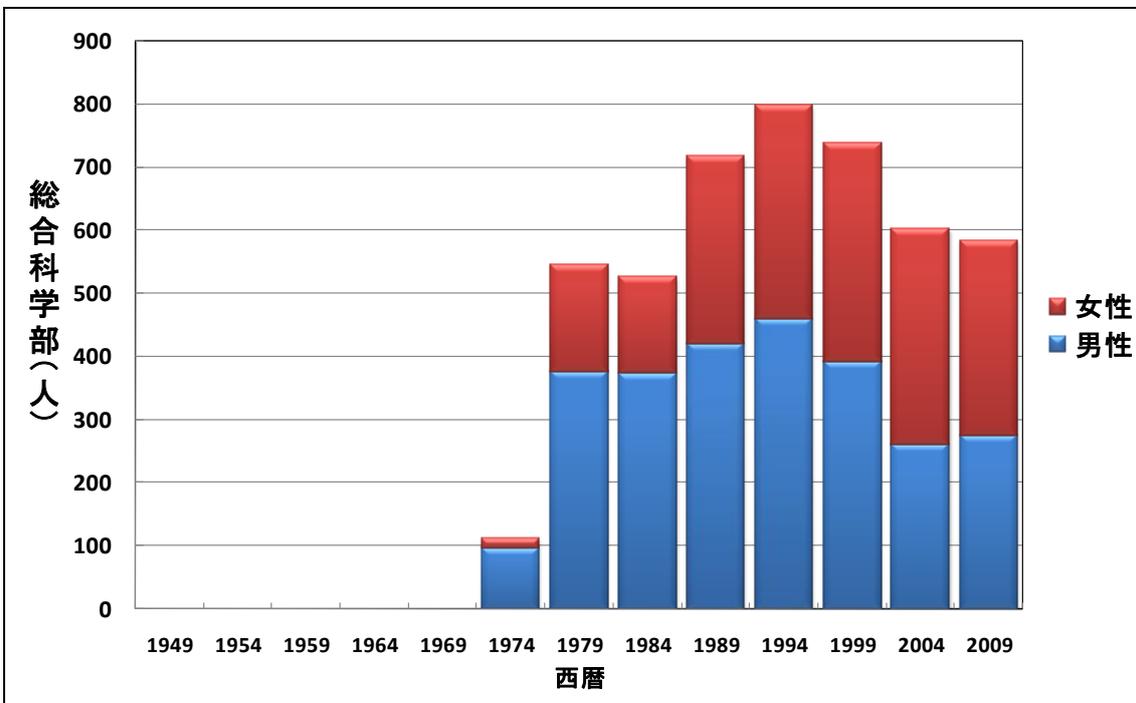
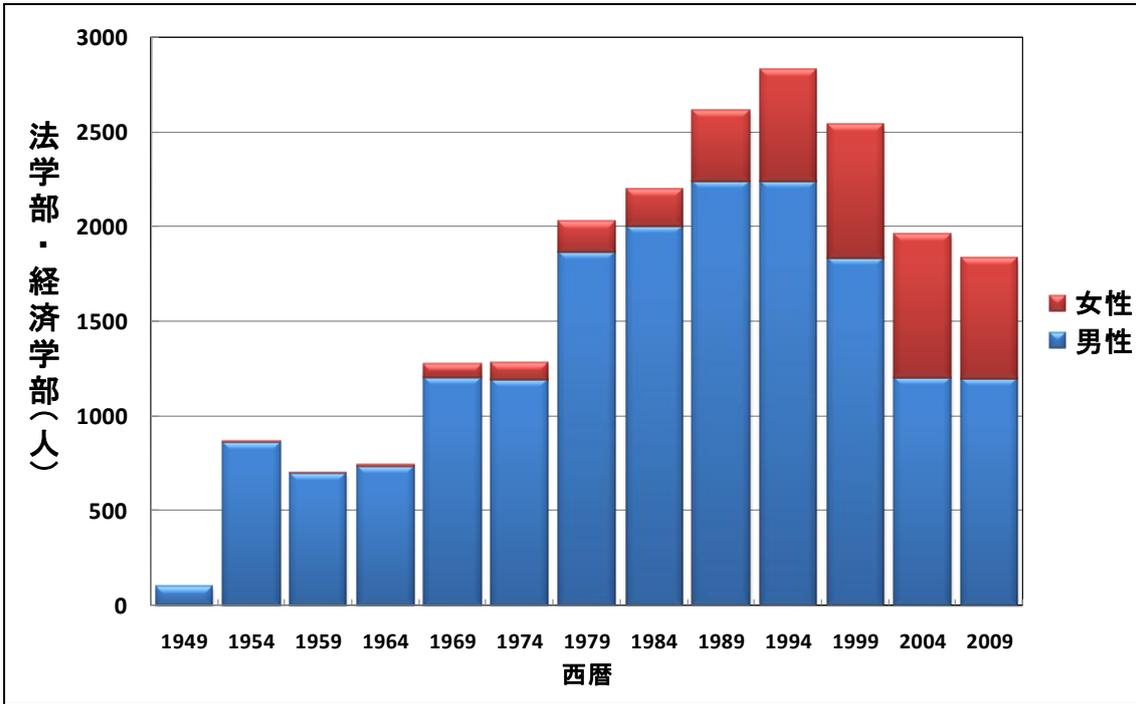
【学部生における女子学生の割合の変移】

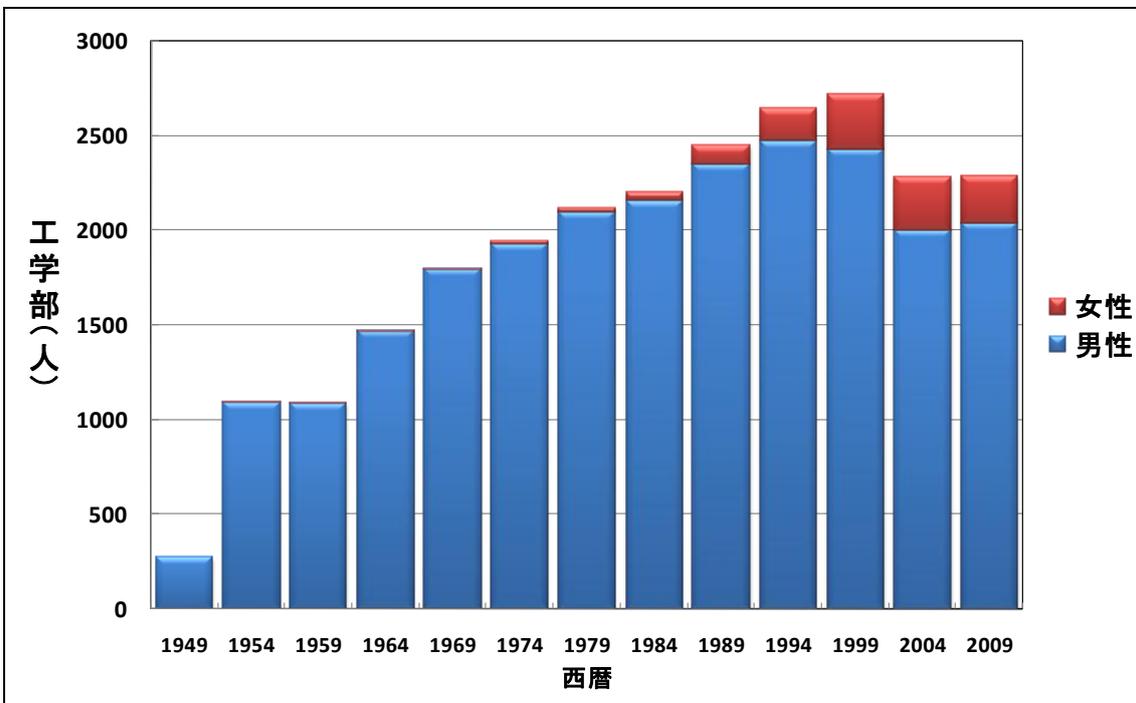
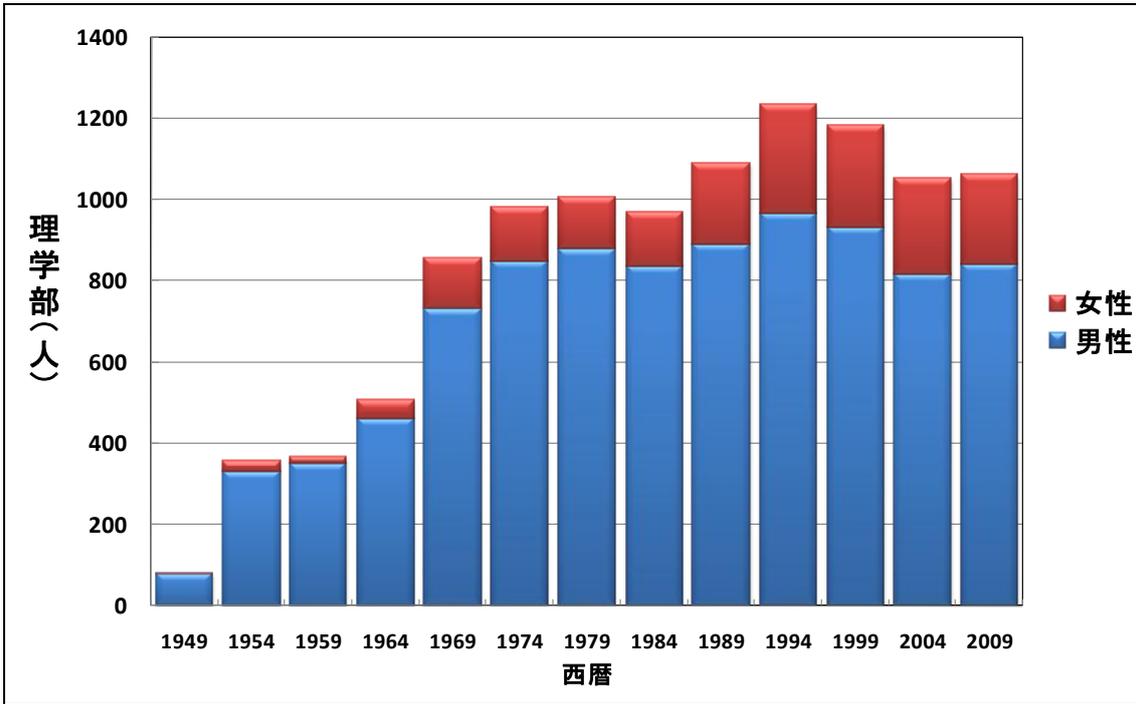


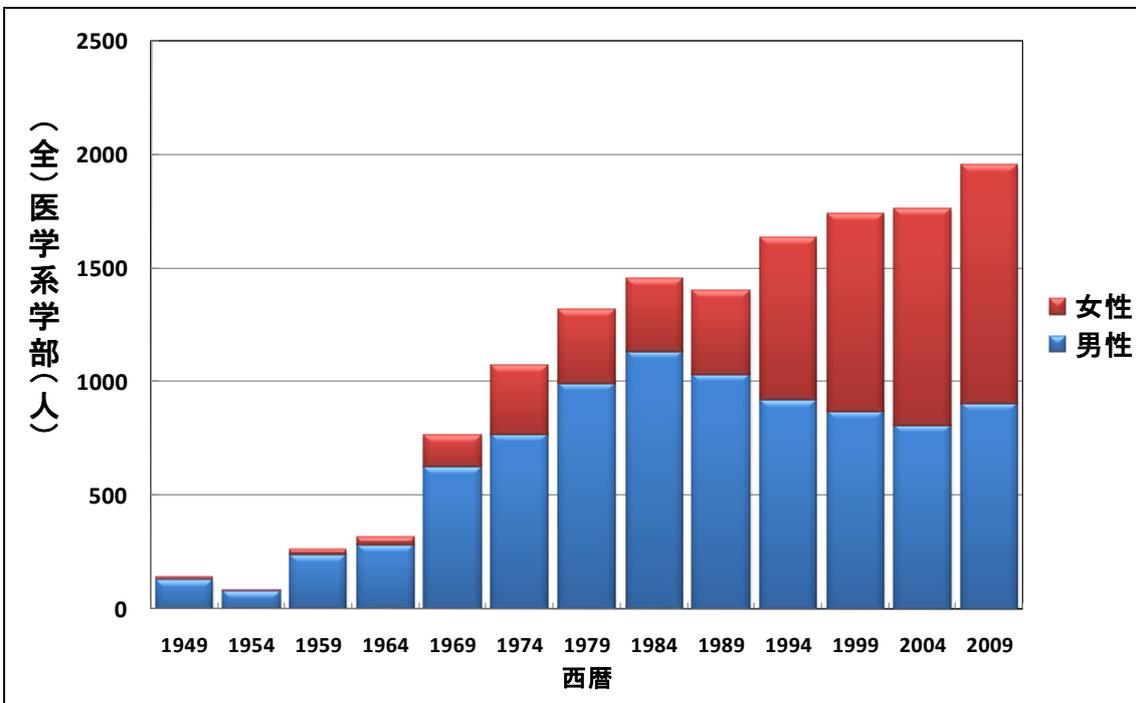
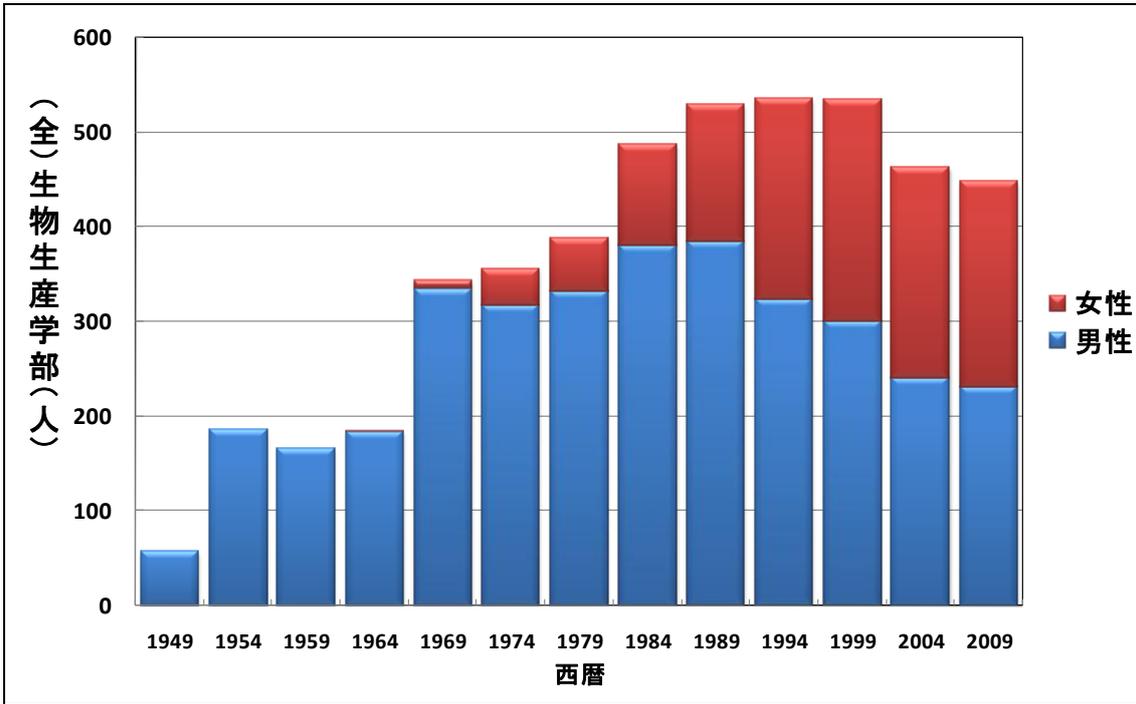
### 【各学部における男女学生数の変移】

(学部の統合があったため、同分野の学部はまとめて示してある。)



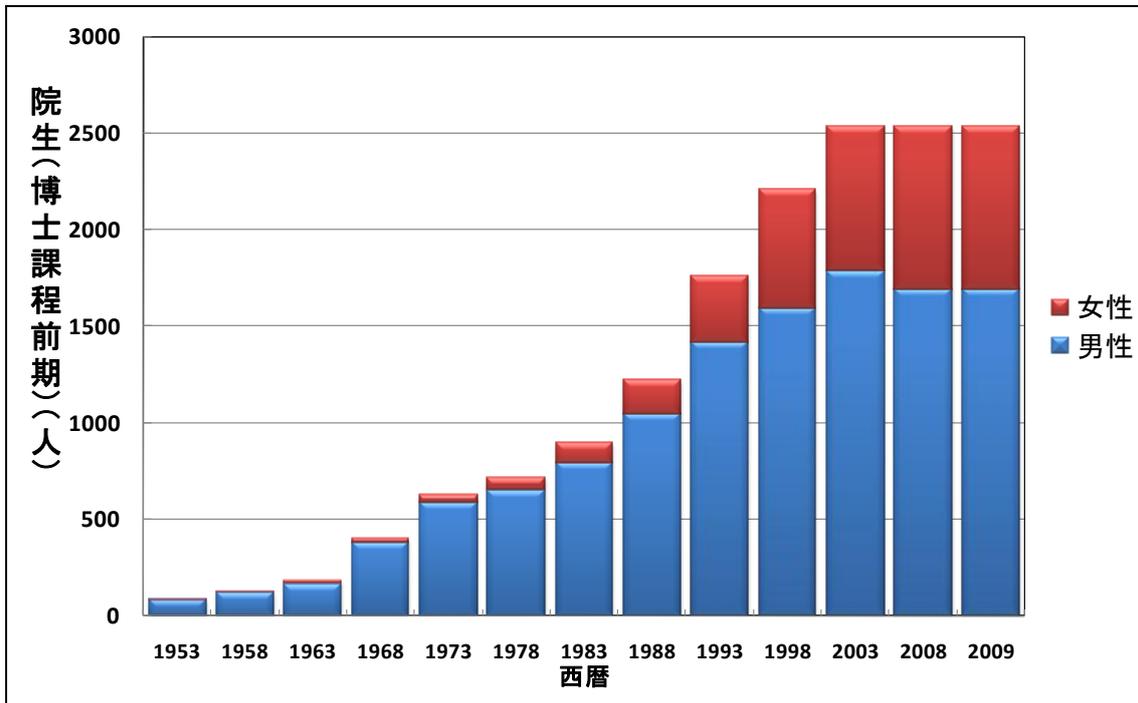




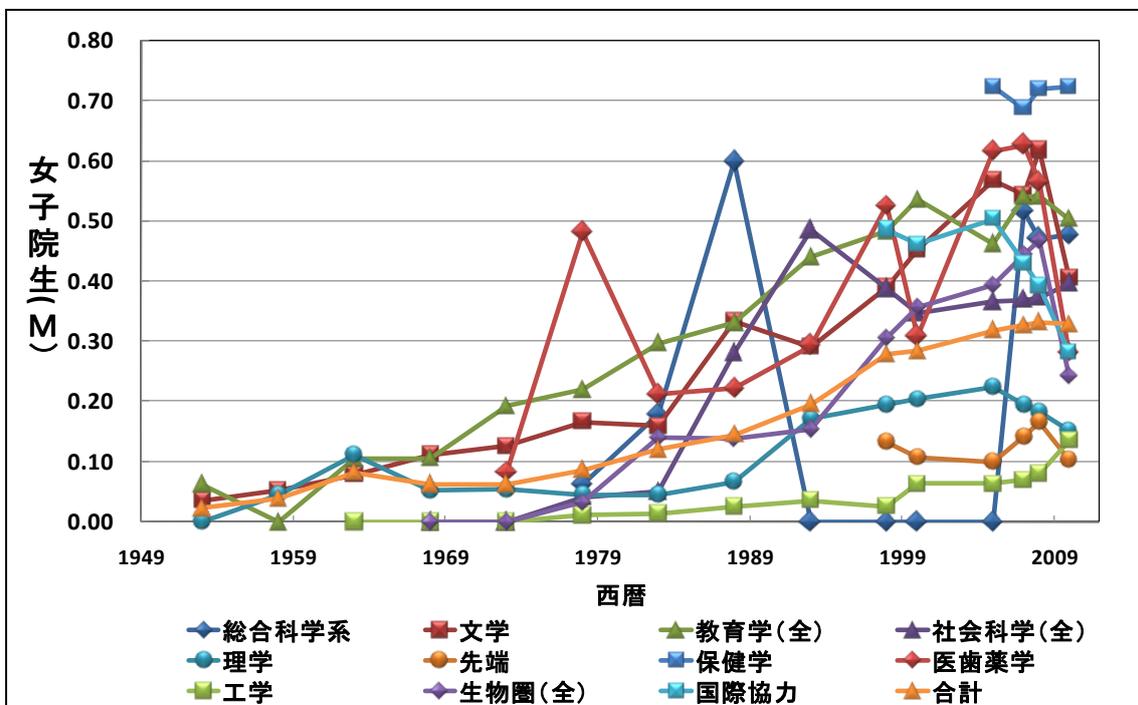


(2) 大学院生（博士課程前期）

【大学院生（博士課程前期）の数の変移】（昭和28年（1953）の設置～）

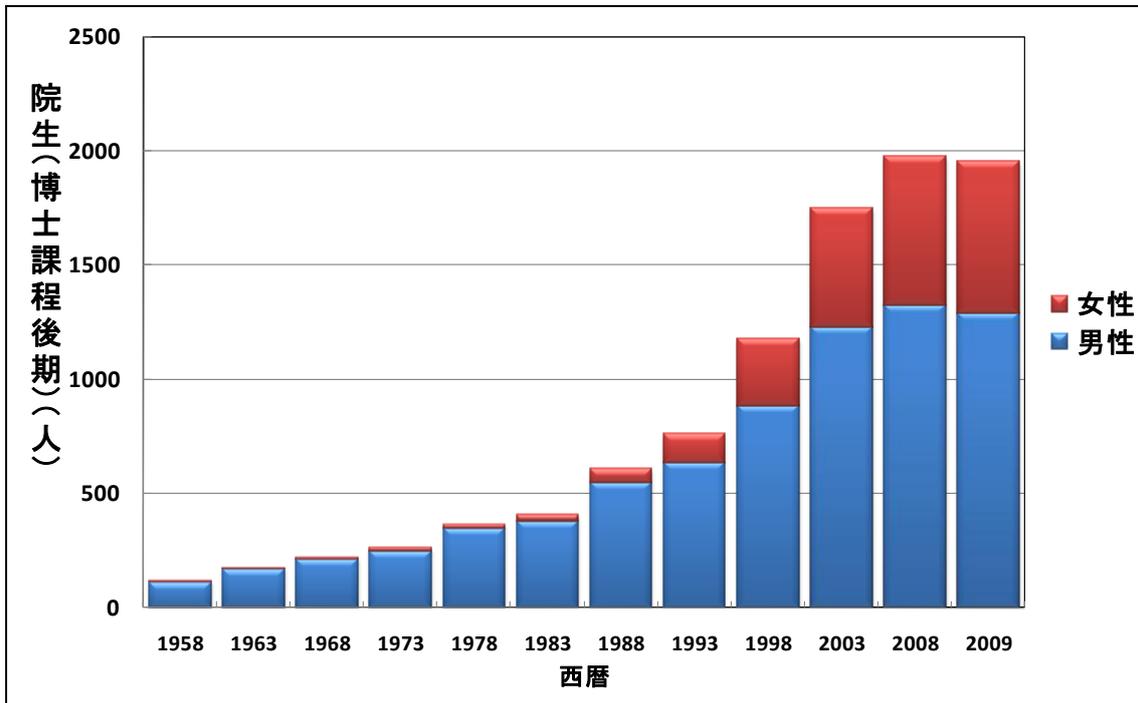


【博士課程前期における女子学生の割合の変移】

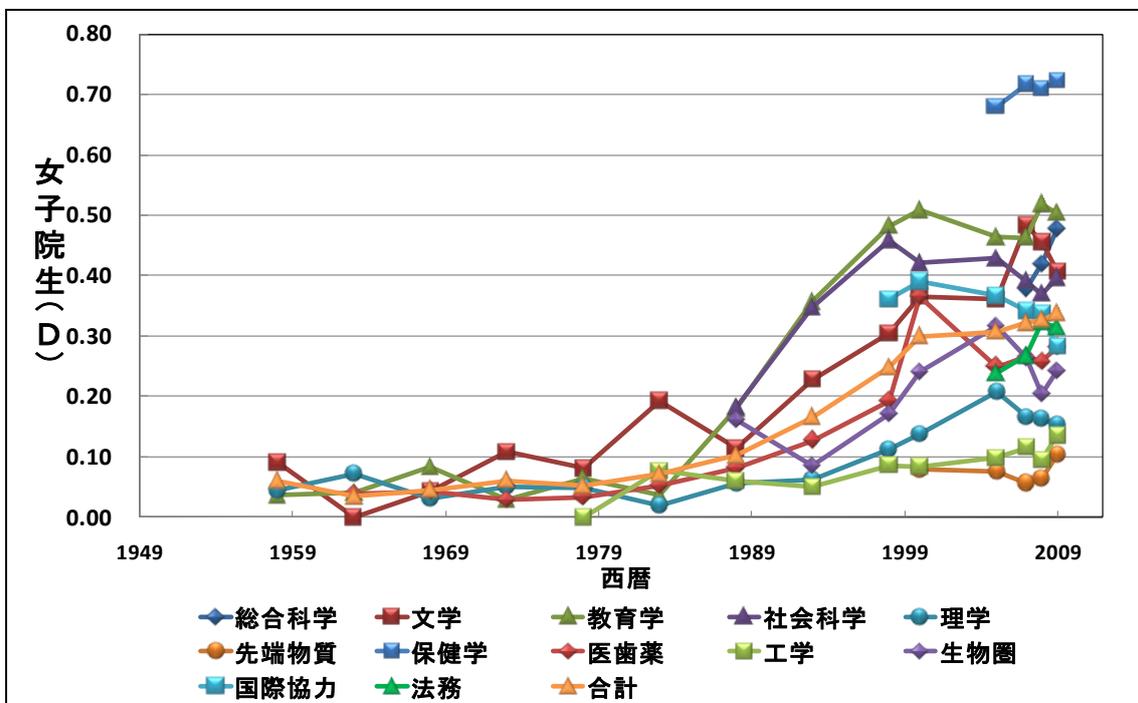


(3) 大学院生（博士課程後期）

【大学院生（博士課程後期）の数の変移】（昭和28年（1953）の設置～）

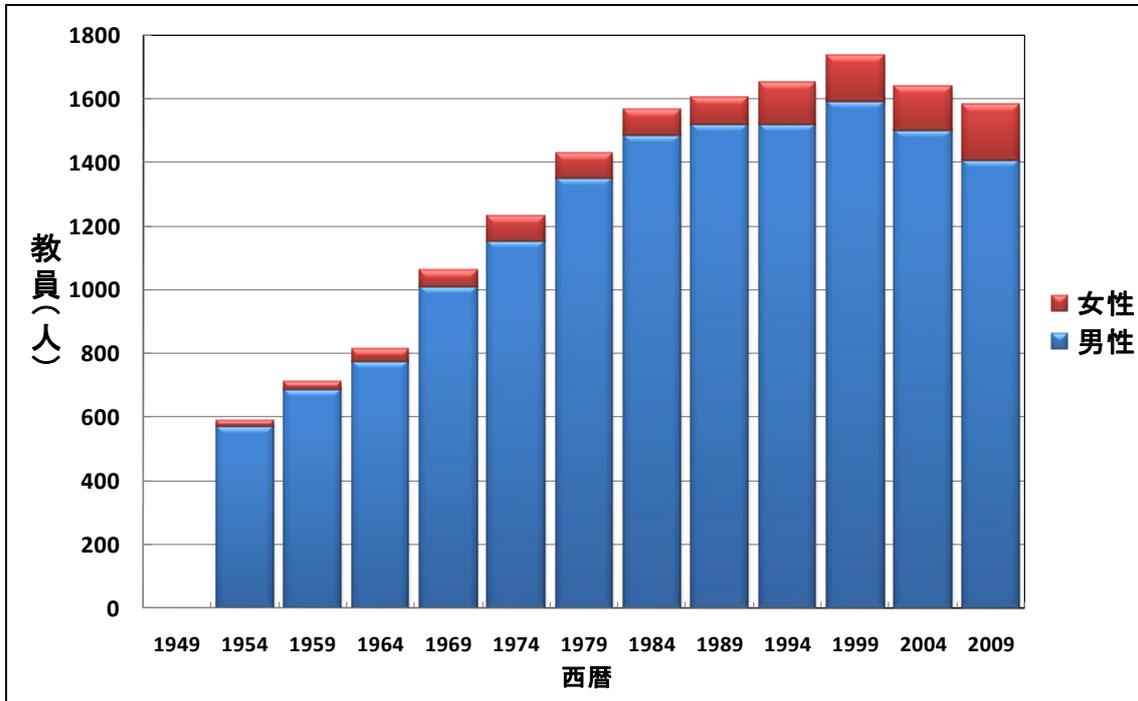


【博士課程後期における女子学生の割合の変移】

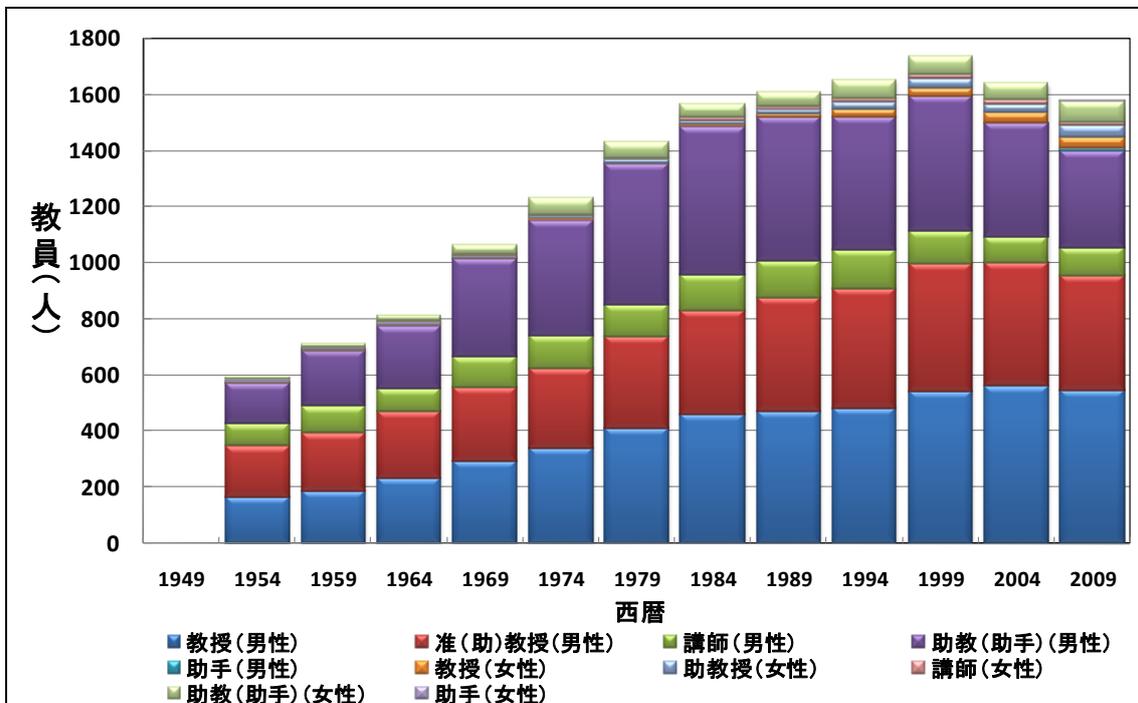


11-4. 広島大学の女性教員

【広島大学の教員数】

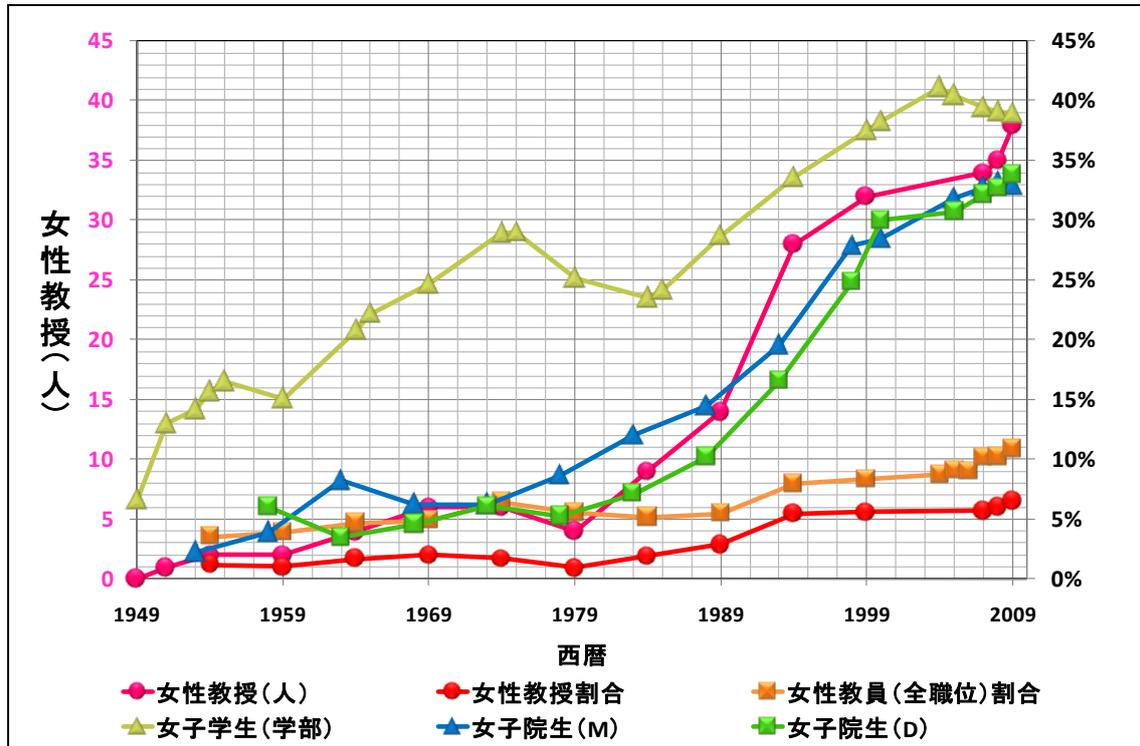


【広島大学の教員数 (内訳)】



### 【女性教授数と女子学生の割合】

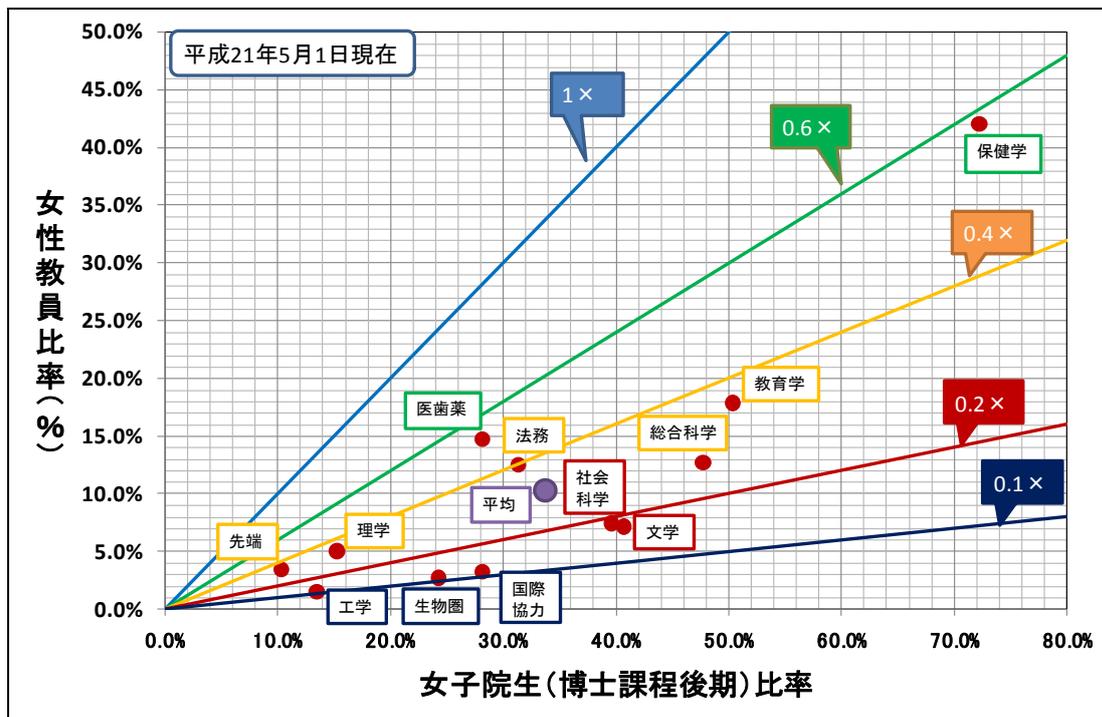
女性の教授（人数）は左軸に，女子学生の割合は右軸に対応している。



女性の教授（人数）が増加しはじめてから，女性D生の割合（%）が増加し始めている。

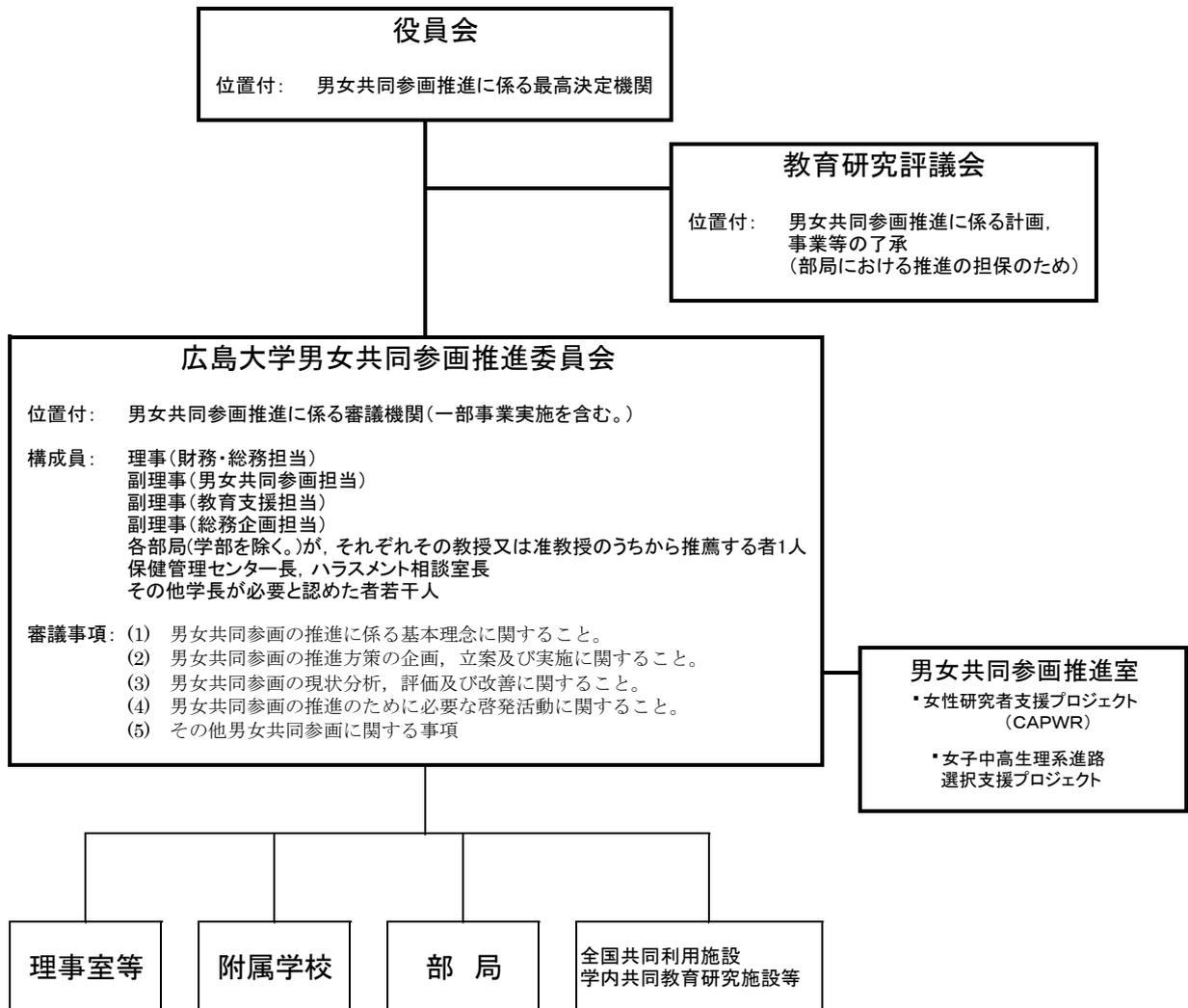
### 【女性教員の割合と女性D生の割合】

それぞれの研究科の女性教員の割合と，その研究科の女性D生の割合の比較を示す。



## 12. 広島大学の男女共同参画推進

### 12-1. 広島大学における男女共同参画推進体制



(平成 21 年 4 月 1 日現在)

### 12-2. 広島大学男女共同参画推進委員会規則

(一部のみ抜粋)

第 2 条 広島大学(以下「本学」という。)に, 本学における男女共同参画を推進するとともに, 男女共同参画社会の構築に積極的に寄与するため, 広島大学男女共同参画推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

第 5 条 委員会に委員長及び副委員長を置き, 委員長は理事(財務・総務担当)をもって充て, 副委員長は委員の互選によってこれを定める。

第 9 条 委員会に, 第 4 条に規定する審議事項のうち, 専門的事項について企画, 調査及び処理を行うため, 部会を置くことができるものとする。

第 10 条 委員会の事務は, 財務・総務室職員福利グループにおいて処理する。

### 1 2 - 3. 広島大学男女共同参画宣言

男女は、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画し、政治的、経済的、社会的及び文化的利益を等しく享受する権利を有するとともに、そのような社会をともに創り出す責務を負う。平成 11 年 6 月に公布・施行された男女共同参画社会基本法においても、男女共同参画社会の実現は、「21 世紀の我が国社会を決定する最重要課題」と位置付けられており、この方針の実現のため、平成 17 年 12 月に男女共同参画基本計画（第 2 次）が閣議決定されている。

我が国においては、日本国憲法に個人の尊重と法の下での平等がうたわれ、これまでも男女平等の実現に向けた様々な取組が、国際社会の取組とも連動しつつ進められてきた。しかし、長い歴史の中で形成された性別による差別的取扱いや固定的な社会通念は、教育・研究の分野においても様々な形態で依然として存在する。知の拠点としての大学は、知の生産のみならず次世代の教育と社会的文化的価値の創造を担う重要な機関であるがゆえに、男女の特性を認識しつつ、男女間の格差を是正し、構成員一人一人の個性と能力が十分発揮できる組織であることを示す社会的責務を有する。

広島大学は、その前身の一つである広島師範学校において明治 15 年にいち早く女子部を併設し、教育界に多くの優れた女性の人材を輩出してきた。さらに、昭和 4 年に設置された広島文理科大学においても設置当初から女子学生を受け入れ、戦前から高等教育における男女共学を実現してきた。この歴史に体现されている精神をさらに発展させ、男女共同参画の今日的課題に取り組んでいくこととしたい。

また、広島大学が目指す「世界トップレベルの特色ある総合研究大学」を実現するためにも、大学における男女の対等な参画をより一層推進することによって、個人がその個性と能力をいかんなく発揮できる風土を創出することが最重要課題である。

以上の観点から、広島大学は、男女共同参画基本計画（第 2 次）の趣旨を十分に踏まえつつ、次の基本方針を基に男女共同参画を推進し、男女共同参画社会の構築に積極的に寄与することを宣言する。

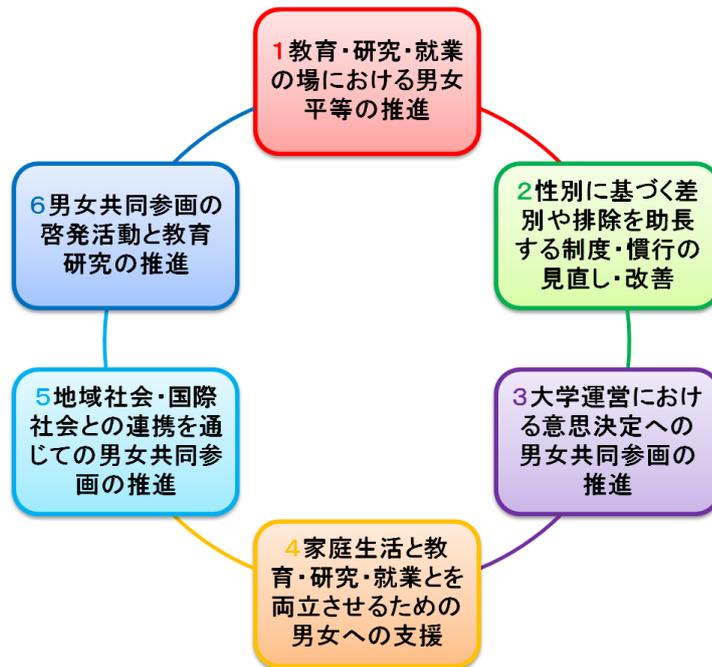
#### <基本方針>

- 1 教育・研究・就業の場における男女平等の推進
- 2 性別に基づく差別や排除を助長する制度・慣行の見直し・改善
- 3 大学運営における意思決定への男女共同参画の推進
- 4 家庭生活と教育・研究・就業とを両立させるための男女への支援
- 5 地域社会・国際社会との連携を通じての男女共同参画の推進
- 6 男女共同参画の啓発活動と教育研究の推進

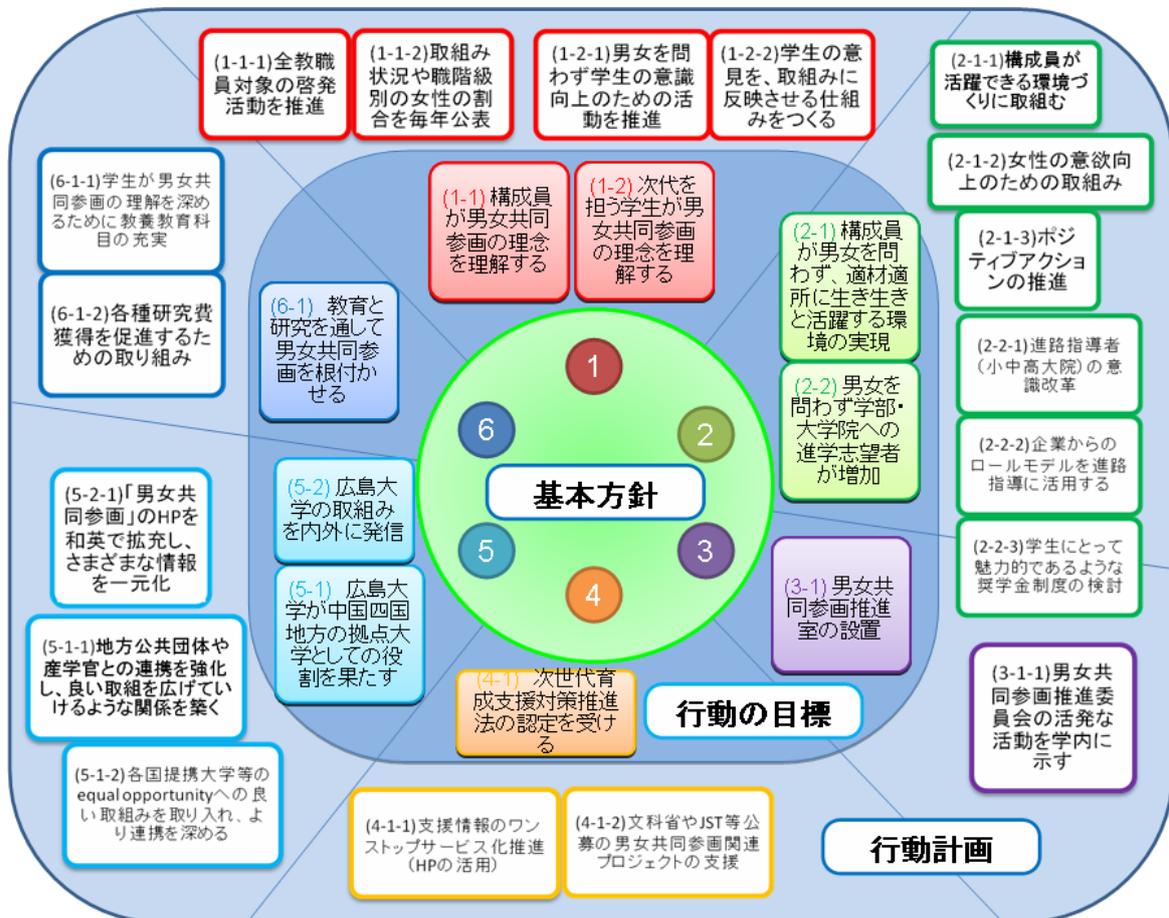
平成 18 年 10 月 17 日

広島大学

1 2 - 4. 広島大学男女共同参画基本方針



1 2 - 5. 男女共同参画推進委員会の「行動の目標」と「行動計画」



## 12-6. 「行動の目標」「行動計画」「平成19・20・21・22年度行動項目」一覧表

平成19年に広島大学における男女共同参画の「行動の目標」、「行動計画」、「行動項目」および「今年度の重点ポイント」を策定するにあたり、副理事（男女共同参画担当）が全部局において意見交換会を開催した。出された意見をふまえ、広島大学男女共同参画宣言の6項目の「基本方針」に沿って、広島大学男女共同参画推進委員会の「行動の目標」と、4年間（平成19～22年度）の行動計画を、第4回男女共同参画推進委員会（平成19年9月26日）において策定した。これらは、役員会で承認（平成19年10月15日）され、教育研究評議会で報告（平成19年10月16日）された。

また、それぞれの行動計画を具体的に実行するための、各年度の行動項目を策定した。男女共同参画推進委員会に、教育、制度、社会の3グループを構成し、すべての委員がどれかに所属することにより、効果的に活動することとした。

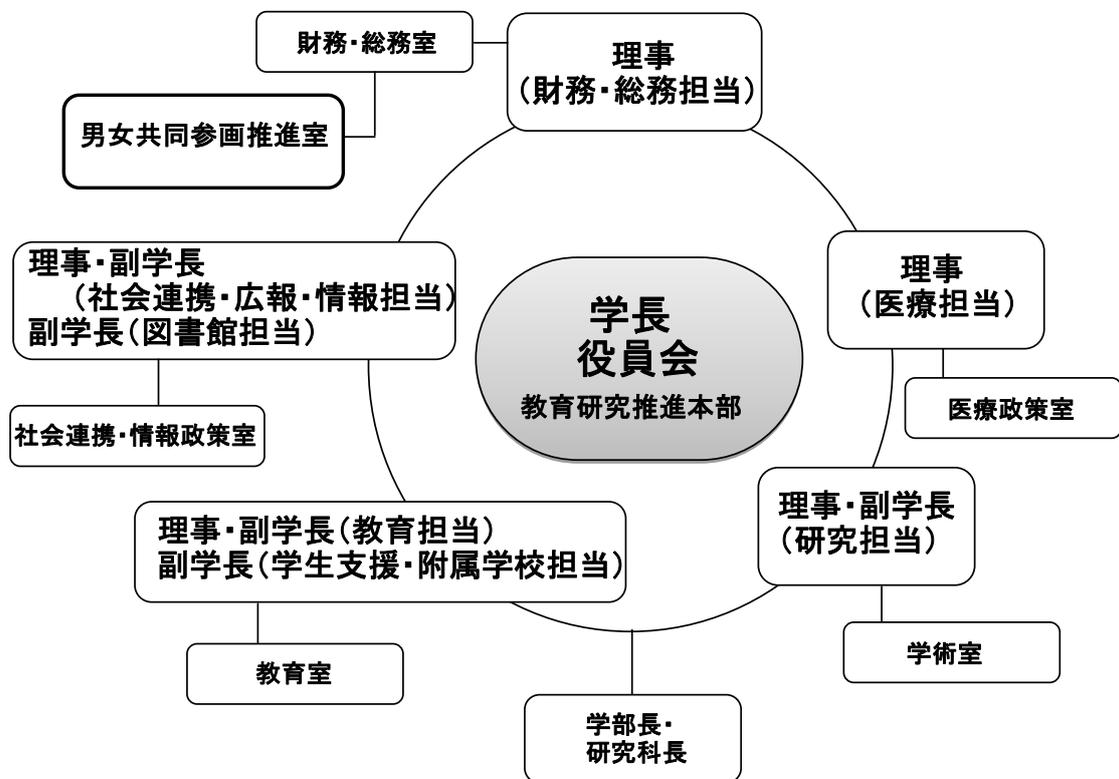
基本方針	行動の目標	行動計画	H19+H20 行動項目	H21 行動項目	H22 行動項目	担当
1 教育・研究・就業の場における男女平等の推進	(1-1) 構成員が男女共同参画の理念を理解する	(1-1-1) 全教職員対象の啓発活動を推進	[1-1-1] 達成目標と年度計画の策定	[1-1-1] セミナー等の啓発活動及び年度計画の策定	[1-1-1] 達成目標と行動計画の策定及び啓発活動の検討	全体
		(1-1-2) 取組み状況や職階級別の女性の割合を毎年公表	[1-1-2] 事務系、部局等及び全学委員会における女性比率の調査と公開	[1-1-2] 事務系、部局等及び全学委員会における女性比率の調査と公開	[1-1-2] 事務系、部局等及び全学委員会における女性比率の調査と公開	全体
	(1-2) 次代を担う学生が男女共同参画の理念を理解する	(1-2-1) 男女を問わず学生の意識向上のための活動を推進	[1-2-1] 校友会と連携について意見交換	[1-2-1] 意識向上策の検討・提案	[1-2-1] 意識向上策の検討・実施	社会G
		(1-2-2) 学生の意見を、取組みに反映させる仕組みをつくる	[1-2-2] 学生の生の声に近いキャリアセンター等と意見交換し、学生WGの設置検討	[1-2-2] 学生の意見や結果が見えるような仕組みの検討・作成	[1-2-2] 学生の意見や結果が見えるような仕組みの検証・改善策の検討	教育G
2 性別に基づく差別や排除を助長する制度・慣行の見直し・改善	(2-1) 構成員が男女を問わず、適材適所に生き生きと活躍する	(2-1-1) 構成員が活躍できる環境づくりに取り組む	[2-1-1] 保育園の運営方針に関する意見交換	[2-1-1] 学童、病後児保育及び意志決定の場に両性の意見を反映させる仕組みの検討	[2-1-1] 学童、病後児保育の本格実施及び意志決定の場に両性の意見を反映させる仕組みの検討・導入	制度G

		(2-1-2) 女性の意欲向上のための取り組み	[2-1-2] 女性教職員のMLを作成し、活用できるようにする	[2-1-2] 女性教職員のML対象の拡大	[2-1-2] 女性教職員のML対象の拡大	制度G
		(2-1-3) ポジティブアクションの推進	[2-1-3] 公募文書に男女共同参画推進を明示	[2-1-3] 女性比率向上策の検証・改善策の検討	[2-1-3] 女性比率向上策の検証・改善策の検討	全体
	(2-2) 男女を問わず学部・大学院への進学志望者が増加	(2-2-1) 進路指導者(小中高大院)の意識改革	[2-2-1] 大学説明会や出張講義等の際に、広島大学の取組を明示する(次年度以降は宣伝用pptを作成)	[2-2-1] 宣伝用pptの作成及びオープンキャンパスの際の女子高生向けの企画の検討・実施	[2-2-1] 宣伝用pptの作成及びオープンキャンパスの際の女子高生向けの企画の検討・実施	教育G
		(2-2-2) 企業からのロールモデルを進路指導に活用する	[2-2-2] 学生が就職した企業へ追跡調査し、ロールモデルをさがす(キャリアセンターや就職担当教員と連携)	[2-2-2] 学生が就職した企業へ追跡調査し、ロールモデルをさがす(キャリアセンターや就職担当教員と連携)	[2-2-2] 国内外のロールモデルの収集を継続	教育G
		(2-2-3) 学生にとって魅力的であるような奨学金制度の検討	[2-2-3] スカラーシップ等諸制度の実態調査し、学生の視点から現状を把握	[2-2-3] 学生の課外活動の支援策及び学生人材支援バンク等の企画への検討・提案	[2-2-3] 学生の課外活動の支援策及び登録学生情報システムの充実	教育G
3 大学運営における意思決定への男女共同参画の推進	(3-1) 男女共同参画推進室の設置	(3-1-1) 男女共同参画推進委員会の活発な活動を学内に示す	[3-1-1] 男女共同参画推進委員会の活動内容の明示と周知	[3-1-1] 男女共同参画推進室の円滑な運営及び今後の運営方法の検討	[3-1-1] 男女共同参画推進室の円滑な運営	全体
4 家庭生活と教育・研究・就業とを両立させるための男女への支援	(4-1) 次世代育成支援対策推進法の認定を受ける	(4-1-1) 支援情報のワンストップサービス化推進(HPの活用)	[4-1-1] 規則や事務の流れの実態調査をし、ニーズとのギャップを把握する	[4-1-1] ニーズとのギャップを踏まえた改善点の検討	[4-1-1] 次世代育成支援対策推進法による第1期「行動計画」の認定及び第2期「行動計画」の実現に向けての検討	制度G
		(4-1-2) 文科省やJST等公募の男女共同参画関連プロジェクトの支援	[4-1-2] 採択プロジェクトの学内への周知徹底	[4-1-2] 採択プロジェクトの学内への周知徹底及び支援	[4-1-2] 男女共同参画関連事業への支援	制度G

5 地域社会・国際社会との連携を通じての男女共同参画の推進	(5-1) 広島大学が中国四国地方の拠点大学としての役割を果たす	(5-1-1) 地方公共団体や産学官との連携を強化し、良い取組を広げていけるような関係を築く	[5-1-1] 地元自治体や地元企業の男女共同参画組織と情報交換する	[5-1-1] 地元自治体等の男女共同参画組織と情報交換及び産学官との連携について検討	[5-1-1] 地元自治体等の男女共同参画組織と情報交換及び産学官との連携について検討・実施	社会G
		(5-1-2) 各国提携大学等の equal opportunity への良い取組を取り入れ、より連携を深める	[5-1-2] 良い取組をしている国内外の大学や研究機関の情報を集める	[5-1-2] 良い取組をしている国内外の大学や研究機関の情報収集	[5-1-2] 良い取組をしている国内外の大学や研究機関の情報収集	社会G
	(5-2) 広島大学の取組みを内外に発信	(5-2-1) 「男女共同参画」のHPを和英で拡充し、さまざまな情報を一元化	[5-2-1] 広島大学 HP に「男女共同参画」の開設	[5-2-1] 広島大学 HP の「男女共同参画」の更新・拡充	[5-2-1] 広島大学 HP の「男女共同参画」の更新・拡充	社会G
6 男女共同参画の啓発活動と教育研究の推進	(6-1) 教育と研究を通して男女共同参画を根付かせる	(6-1-1) 学生が、男女共同参画の理解を深めるために教養教育科目の充実	[6-1-1] 男女共同参画関連の授業科目のわかりやすい一覧作成（HP にも公開）	[6-1-1] 男女共同参画関連の授業科目のわかりやすい一覧更新（HP にも公開）	[6-1-1] 男女共同参画関連の授業科目のわかりやすい一覧更新（HP にも公開）	教育G
		(6-1-2) 各種研究費獲得を促進するための取り組み	[6-2-1] 各種研究費への応募状況の調査（男女問わず）	[6-2-1] （男女問わず）各種研究費への応募を促進する施策の検討・提案	[6-2-1] （男女問わず）各種研究費への応募を促進する施策の検討・提案	社会G
			[6-2-2] 本学の教員や学生が応募可能な、全国的女性対象助成金等の一覧表作成	[6-2-2] 全国的女性対象助成金等の応募の検証及び応募の把握の改善策の検討・提案	[6-2-2] 全国的女性対象助成金等の応募の検証及び応募の把握の改善策の検討・実施	社会G

## 12-7. 男女共同参画推進室の広島大学における位置付け

男女共同参画推進室は、平成20年4月1日付けで設置された。広島大学男女共同参画宣言に基づき、広島大学において、構成員一人一人の個性と能力が十分発揮できる組織を構築するための具体的な取組みを推進する。男女共同参画推進委員会は、広島大学において男女共同参画を推進するための、平成19～22年度の4年間の「行動の目標」、およびそれを達成するための「行動計画」を策定した。また、それらの「行動計画」に対し、年度ごとの重点活動項目を決定する。男女共同参画推進室は、それらの重点活動項目の実行を支援する。さらに、男女共同参画推進室は、女性教員増加のためのポジティブアクション担当組織としての役割を果たす。



(平成22年1月1日現在)

### 13. 女性研究者支援プロジェクト実施担当者の、研究者への軌跡

本プロジェクトを進める過程において、学生や若い研究者へのロールモデルの必要性が認識された。そこで、学生対象のテキスト（5-1-5章）や、女子高生のための体験科学講座（7-1-2章）のテキストには、「研究者への軌跡」のページをつけた。

私たちの歩んできた軌跡を、若い方にむかって語る機会は、今までなかったように思う。このような文章を書くことで、自分の人生を振り返るきっかけともなった。学生対象の取組みには、男女をとわず、多くの方々に「研究者への軌跡」の文章を寄稿していただいたが、ここには、本プロジェクトの実施担当者の「研究者への軌跡」だけを収録する。この3年間、本プロジェクトを進めてきた私たちの自己紹介がわりとさせていただきたいと思う。ただ、残念ながら、全員の文章はそろっていない。この点についてはご了解ください。

---

相田 美砂子      広島大学大学院理学研究科化学専攻 教授  
専門：量子化学，物理化学，生物物理

---

研究者を目指したのではなく、気がつかないうちに研究者への道を歩み始めていた、というのが正しいと思います。大学に入るときに化学科を選んだ時は、とくに化学が好き、というわけではなく、むしろ数学の方が好きでした。そのせいか、学部4年生のときに研究室を選ぶとき、実験系ではなく、当然のように理論系を選びました。その後も、とくに研究職をめざしたのではなく、ただ、そのときのテーマがおもしろいから一生懸命取り組んだだけでした。修士課程修了後、国立の研究所に研究職として就職するめぐり合わせがあったので、そこに就職しました。このように書くと、いい加減に過ごしてきたかのように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。人生は先の方まで見通すことはできないのだから、その時その時に、一生懸命頑張る、というのが私の基本スタンスです。国立の研究所でいろいろな先輩の研究者に「厳しく」鍛えられて、少々のことにはへこたれない強い気持ちを身につけさせていただきました。研究所に就職後、約7年で理学博士の学位を取得しました。その頃には、自分を「研究者」だと言えるようになっていました。



人生における「ワークライフバランス」は、人それぞれに違っているものだろうと思います。私は、在学中に結婚していましたが、研究一筋の20歳代を過ごしました。学位授与式の後2ヶ月ほどの頃に出産し、産休以外は休みをとらず研究に戻りました。所属機関内に保育園があったので、そこに子どもを預けました。子どもが1歳半から4歳半までの3年間、家族で（子連れで）アメリカの研究所に研究者として滞在し、帰国後は、元の研究所に戻り、研究所の近くの区立の保育園に子どもをあずけました。お迎えは、私か夫のどちらかが、必ず夕方5時過ぎに行きました。このように、出産後約10年間は、子ども優先の生活パターンにしました。子どもが10歳になった頃から後は、どちらかという仕事優先の生活パターンにし、現在は、完全に仕事最優先の日々を過ごしています。

子どもは3歳までは母親が育てるべきだ、という考え方があるようですが、私はそうは思いません。保育園で、小さい頃からさまざまな関わりをもって育った方がよいということもあります。ただ、ここで、とても大事なことは、そのときに、子どもを裏切らないこと、親を信じる気持ちを持たせることです。

子どもが親を本当に必要とする、その子の人生の最初の数年間に、その子が、親を信じる気持ちを持つこと、絶対に夕方迎えに来てくれる、という信頼感を持つことが、その後の、その子の人生を決める、といっても過言ではないと思います。子どもを保育園に預けることに罪悪感を持つ必要は全くありません。しかし、いつ迎えにくるのかわからない、という不信感を植え付けてしまっただけではいけません。親を信じる気持ちを持つことができないと、いつまでも、その子は精神的に自立できない、ということになりかねません。

私は研究者という道を歩み始めていましたが、結婚も出産も、人生の一場面であり、私の研究者としての歩みを妨げるものではありませんでした。もちろん、夫にも子どもにも感謝の気持ちを持っていますが、人生を協力しあうのは、「あたりまえ」のことです。私も家族に協力し、家族も私に協力してくれる、これは「あたりまえ」のことです。これらが「あたりまえ」といえるような、そのような人生の伴侶を得ることは、人生におけるさまざまな選択のうちの一つです。

---

坂田 桐子      広島大学大学院総合科学研究科 教授  
専門：社会心理学，集団力学

---

子どもの頃から「どうして集団になると人は変わるのだろう」「なぜ集団活動は難しいのだろう」という疑問を漠然と持っていました。大学受験の頃になって、どうやら私の漠然とした関心に応えてくれるのは「心理学」らしいということが臆気にわかり、心理学が学べる広島大学を受験しました。学部・大学院を広島大学で過ごし、幸いにも広島大学で助手として採用され、それ以来ずっと広島大学で社会心理学の研究と教育に携わってきました。現在は、特に集団における人間行動のしくみや、メンバー個々人の力を活かしながら集団をうまく運営できるリーダーシップのあり方などを、実験や調査によって研究しています。



・・・と書くとずいぶん順調な人生のように思えるかもしれませんが、大学に入学してからは迷いや挫折感の連続でした。特に、大学院生の頃は「私は研究者としてやっていけるのだろうか」と悩むこともあったのですが、無我夢中で「その時にやれる最大限のこと」をやっているうちに、いつのまにか研究者になっていた、という感じです。

現在は、やりたいことが多い割に時間が足りなくて多忙な毎日ですが、学生と研究の話で盛り上がる時や、目指す研究結果が得られた時などは、本当に充実感や達成感があります。好きなことを極める道は、大変ですが喜びも大きいです。皆さんも、とにかく自分の好きなことにとことんチャレンジしてみてください！

生物学の研究者になった理由は、一言でいえば、もの心ついた時から生き物が好きだったこと、そしてそれを励ましてくれた人々との出会いがあって、私の生き物好きのアンテナを今日まで出し続けていられたことだと思えます。



生き物に関する最初の思い出は、3歳の頃、親戚から送られてきた絵本でした。物語の絵本の中に1冊、身の回りの風景の中に生き物が描かれた本が入っていて、本のページをめくっては、お散歩気分になっていました。特にギフチョウやキタテハといった玄人好みの蝶のページが好きで、しまいには、本がぼろぼろになり、父が何度か製本しなおしてくれました。実際に生き物に触れるようになったのは、幼稚園の時でした。引越した家の前が県立公園に隣接する森で、本の中でしか知らなかった生き物の世界がそこにありました。

小学校に入学して、最初の出会いはありました。担任のM先生です。M先生は、本当は天文学が専門でしたが、1年生に星の話をする機会はなかったのでしょう、生物を熱心に教えてくださいました。教室には、池のような大きな水槽の中に生き物があふれていて、花壇には、多くの季節の花が植えられていました。何よりもありがたかったのは、私が発する生き物に関する質問に面倒くさからずによく答えてくださったことです。私もそれがうれしくて、押し花標本を作ったり、観察日記をもって行ったりしました。M先生は、私が3年生になる時に転勤されましたが、「生物を好きな気持ちを大切に。将来、生物の研究ができるといいですね」という一言が、その後の励みになりました。

私の生物好きは、中学高校を経ても変わらず、早稲田大学で生物学を学ぶことになりました。大学2年生の夏休みに、館山のお茶の水女子大学の臨海実験所で臨海実習に参加したことが、私が発生生物学を専攻する契機となりました。実習は、菊山榮教授による磯の生物の系統分類と安増郁夫教授によるウニを中心とした棘皮動物の発生でした。多くの分類門に属する海産生物にふれて、私達学生は、生物の進化と多様性について実感させられました。とりわけ、私を魅了したのが、ウニの発生実習でした。卵と精子を顕微鏡下で混ぜると、精子の侵入点から受精膜があがり、それまで眠っていた卵が約1時間ごとに卵割を繰り返すようになります。半日後には、中空のボール状の胞胚が、受精膜を溶かして泳ぎだし、実習室のあちこちから、喚声があがりました。その後、胚は原腸が陥入し、プルテウス幼生へと劇的に形態を変えていきました。その間、たったの2日間でした。実験所のすぐ前には、太平洋の波が打ち寄せる砂浜が広がっていましたが、私は目の前で刻一刻形を変えていくウニの発生の美しいドラマに夢中になって、顕微鏡を夜半まで覗いていました。そして、発生過程における細胞の運命や分化を決定する仕組みや細胞の移動や形態の変化を司る形態形成運動の機構を知りたいと思うようになりました。実験所では、また、海産生物の研究者の方から、館山の臨海実験所がアメリカ人の発生生物学者である団ジーン先生のご尽力で設立されたこと、発生学の分野では女性の研究者が多いことを伺ったこ

とも心に残りました。

卒業研究では、迷わず安増先生の研究室の門をたたきました。当時、安増先生は日本動物学会の学会賞を受賞され、ウニの受精とエネルギー代謝の研究に力を注がれていました。ウニの発生の形態形成機構を知りたい私は、動植物軸に沿った胚の領域化をLi<sup>+</sup>や代謝阻害剤で胚を処理して解析しました。幸い先輩達の研究蓄積があり、内中胚葉の領域化には、16-64細胞期と孵化後の胞胚期が重要であることが分かり、2編の論文を修士課程の修了までにまとめることができました。しかし、実際何の因子が関与しているのかは解らずじまいで、ウニの形態形成機構を知りたいという思いとはほど遠い状況でした。

さて、生物学の研究者として生きていくためには、車でいえば、運転免許に相当する博士の学位が必要になります。ポストドク制度が今日ほど整備されていなかった当時、アルバイトで生計をたてながら研究を続けている先輩が多かった上に、博士号を取得した女性は早稲田の生物学教室にはいませんでした。将来の見通しもなく、体力も自信もないが、研究を続けたい私は、ある日思い切って博士課程への進学について安増先生に尋ねました。研究方向に関するディスカッション後、先生は学位を出す条件を二つ出しました。一つ目は「できれば平均的男性の2倍論文を書くこと」で、ああやっぱりという気持ちでしたが、二つ目が驚きでした。「結婚すること。」目が点になりました。安増先生は、個人的見解との前置きをされて、一度しかない人生、研究だけではもったいない、本当に研究が好きならば、子育てをしながらでも続けようとするし、続けられる。そういう人生を送っている人のほうが、研究だけの人よりも素晴らしいと思うとおっしゃり、実例をあげられました。実際、ウニの研究者には、子育てをしながら研究を続けている人が多くいました。この時の会話は、研究者の人生を特別に考えていた私の肩の力を抜いてくれたように思います。私は、博士課程入学直前に、ウニの骨片形成機構の解析により中胚葉の分化マーカーを探る方向に研究テーマを変えて、学位を取得しました。安増先生と話した二つ目の条件をクリアしたのは学位を取得した後のことでした。

「生き物のこと、知りたいこと、いっぱいあるんだ!」、小学生の息子が毎日発する質問に答えながら、研究者の原点は、好きなことを知りたいと思う気持ちだと思っています。

---

中矢 礼美      広島大学 留学生センター 准教授  
専門：比較国際教育学

---

私の経歴は、研究者として輝かしいものではありませんが、一つのケースとして読んでいただき、何かの参考になれば幸いです。

私は、高校生の時から、研究職こそ自分の職業だと思っていました。周囲にそのような人がいたわけではありませんでしたが、一つのことを深く考えていくこと、それを文章にすることが大好きでした。幼少期から、負けん気が強く、「男の子」のように振る舞い、強く、賢くなろうと努めていました。小学校時代は伝記が大好きで、それらの本を通して、「人のために生涯をささげる」のが、目指すべき姿であると思うようになりました。



地元の愛媛大学教育学部に入学した当時は、アメリカ留学ばかり考えていたのですが、アフリカやアジアからの外国人や留学生との交流を通して、先進国に住む自分の傲慢さ、浅はかさを痛感し、世界の不条理を解消することに貢献したいと強く思うようになりました。特にインドネシアの友人から「日本人が、インドネシアを植民地支配していたって、知ってた？」と言われた時は、大きなショックを受けました。すぐに自宅に帰って高校時代の世界史の教科書を読み返し、さらに図書館でインドネシアについて書かれている書物を読みあさりました。次第に、インドネシアという国家の成立、国民形成、文化の多様性・特殊性、学校教育の社会的機能としての影響力など、興味が広がっていきました。そして、開発途上国と日本の発展における学校教育の機能について社会学的に比較分析したいと思うようになり、大学2年生からは卒業論文にとりかかり始めました。同時に大学院の試験勉強も始めました。学部時代の指導教官である田中毎実先生は、教育哲学研究者でしたが、畑違いのインドネシア教育の研究を応援してくださいました。田中先生は、一を話せば十のことを汲み取って言語化して下さり、指導をしてくださる先生で、指導を受ける度にその賢さと懐の深さに感動していました。そして、「研究者」だけでなく、すばらしい教育者になりたいと思うようになりました。「研究とは、見えないものを人々に分かりやすく、見えるようにすること」「人生も研究もバランス感覚がもっとも重要」「子どもを抱っこできるのは、今だけ。思う存分子どもと接し、幸せを感じなさい」という先生のお言葉は、いつも思い出す言葉です。お見通しなのです。

また、家族も力強い応援者です。開発途上国の発展に貢献したいと話したとき、母には「あなたが井戸を掘りに行っても、せいぜい数はしれている。そのような志を持つ人間を育てるほうが効率的。それがあなたにしかできないこと」だと教えられました。大学院に行くことを両親にお願いしたときは、アルバイトで諸費用も稼いでいましたし、猛勉強の様子も国際交流活動も見ていたので、さほど驚かれることも反対されることもありませんでした。しかし、一つだけ条件がありました。それは「結婚すること」でした。両親も、仕事と家庭の両立とバランスを強調していました。

インドネシア研究を教育分野で行うために、広島大学の比較教育学研究室に入ってから、アルバイトと勉強に明け暮れました。親に迷惑を掛けないようにするため、一日も早く博士号をとる努力をしました。博士課程後期では、文部科学省の奨学金を受けて1年間留学という名目で現地調査に入り、帰国してからは学術振興会の特別研究員として研究費を受けることができるようになり、1年間は博士論文の執筆に集中することができました。大学院時代は、本当にトントン拍子で事は運びました。もちろん、家族、先生、インドネシア留学中に知り合った人たち、友人（現在の夫）による支援は膨大なものでした。指導学生でもないのに毎週インドネシア語の翻訳指導をしてくださった文化人類学研究者の小池誠先生、研究者の奥ゆかしい姿を見せてくださった故西村重夫先生、とにかく叱咤激励を続けてくださった指導教官、貧乏学生をいつも居候させてくださったインドネシアの人々、論文をいつも丁寧に読んでコメントをくれた友人たち。すべての人のおかげで、博士号取得にまでこぎつけました。

しかし、それと就職は別です。やっと広島大学の留学生センターに就職させていただけることになりました。しかしそれが決まったのは、長女の出産時。出産後2ヶ月で初就職

という状況に苦しみました。また、就職してからは留学生支援活動が中心となり、研究時間は全く取れない状況が続いて、自分は「研究者」「教育者」なのだろうか、と首をかしげることが多くなりました。しかし、その状況も教育学研究科で大学院生の指導を受け持つようになってからは、多忙を極めながらも研究者・教育者として幸せな状況になりました。ただ、学生時代のような研究はもうできません。以前の研究は、ジャングルの中、カヌーを使って奥地の学校に入り、ベッドや布団もトイレもないような女子寮で生活しながら調査を行うというような、探検家のようなことをしていました。しかし、就職してからは十分な調査時間は取れなくなり、子どもを出産してからは命が惜しく、長期間子どもと離れることがさびしくてできなくなりました。今は、できる範囲の研究しか着手することができません。しかし、これも別の研究手法や研究テーマを考えるいい機会になったと思っています。

最近、目から鱗・・・の言葉は、「先生は、自分のために生きるべきだ」という学生からの進言です。インドネシアのために、日本の子どもたちのために、お世話になった指導教官のために、目の前にいる助けを求める留学生たちのために、自分の子どもが幸せであるために、「私は、これをしてあげなければならない」と悲痛な表情で奔走していたのではないかと反省しました。そして、極力「この仕事は、今、あるいは将来の自分のためにも、やりたいことなのか？」を自問して仕事に取り組むようにしています。そうすると、自己犠牲感がなくなり、楽しい気持ちで、前向きに、仕事も子育てもできるようになってきました。同じ事をするにしても、心の持ちようなんだなあと思います。

今は人に助けられてばかりです。去年は、1年近く病気で倒れてしまい、家族にも同僚にも学生にも大変な迷惑をかけてしまいました。それを精神的にも環境的にも研究者として再生できるように支えてくださったのは、所属を超えた学内の女性研究者のネットワークでした。横のつながりの大切さを改めて痛感しました。

大学の人員削減や予算削減による業務の大変さはもちろんですが、家庭の状況もなかなか大変です。私には、3歳と7歳の子どもがいますが、両親は愛媛や鹿児島と遠く、夫も岡山へ通勤しているため、毎日目が回る忙しさです。それに、保育園のお母さん仲間もみんな過酷な状況の中で必死で子育てと仕事をやっていますから、誰かに助けてもらえるなんてことは考えたこともありませんでした。でも今は、いつも励ましてくれる女性研究者の先輩や推進室の方々が応援してくださっていると感じて、大きな安心感があります。

このテキストを読まれている女子学生のみなさんも、これから研究者を目指す中で困難な状況があるかもしれませんが、今しかできないこと、自分しかできないこと（やりたいこと）は何かを考え、信念を持って、がんばっていつてもらいたいと思います。助けてくれる人たちはたくさんいますよ。

## 14. 今後に向けて

本課題「リーダーシップを育む広大型女性研究者支援」(平成 19～21 年度)は、ミッションステートメントに、『本プロジェクトは、中核となる組織を作り、「両立支援環境形成プログラム」と「意識改革プログラム」を基盤として、本学独自の人材育成「リーダーシッププログラム」を遂行することにより、女性研究者が能力を最大限に発揮し、教育・研究活動で著しい成果をあげることを目指す』としている。

中核となる組織⇒女性研究者支援プロジェクト研究センター (CAPWR) (本報告書第 3 章)  
⇒男女共同参画推進室 (本報告書第 12 章)

両立支援環境形成プログラム ⇒ (本報告書第 6 章)

意識改革プログラム ⇒ (本報告書第 7 章)

リーダーシッププログラム ⇒ (本報告書第 5 章)

この 3 年間の取組み内容を、一つの表にまとめると、次のようになる。

両立支援環境	リーダーシップ育成	意識改革	基盤整備
キャリア支援担当員	学生対象	中高生・保護者対象	・公募文書にポジティブアクションを記載 (H19 年 9 月～)
支援者バンク	教養科目を開講	出張授業	・女性教員採用割合の目標設定(部局別) (H20 年 5 月)
研究支援員制度(子育て・介護等を要件)	テキストを作成	体験科学講座	・女性教員割合の目標設定(第二期中期目標・中期計画)
子育て支援	女子学生交流会	相談コーナー	・四半期毎に、女性教員の採用割合と割合を公表(H20 年 7 月～)
学内保育園	フェニックスサポーター	学生・女性教員対象	・男女共同参画推進室設置(H20 年 4 月)
学内学童保育	女性研究者対象	ペアリングチューター	・理系女性研究者活躍促進プロジェクト設置 (H21 年 11 月)
病後児保育	外部資金獲得セミナー	全構成員対象	・理工農系の女性教員の積極的採用開始 (H21 年 12 月～)
子育て等の協働ML	女性研究者奨励賞	セミナー	
ユビキタス研究環境	スキルアップ講座	シンポジウム	
広島県仕事と家庭の両立支援企業への登録(H20 年 11 月)	プロフェッサーシフト (研究員⇒助教)	女性教員ML	
	ポストアップ (助教⇒准教授)	HP 開設	
	特別研究員(女性枠)	地方公共団体等との連携	
		中国四国地方の他大 学との連携	

それぞれの取組みには、利用者や支援対象者から、随時事後評価をしていただいた。学内の学生や地方との連携も根付いた。それらの結果は、この報告書のそれぞれの箇所に記載してある。これらの取組みが、『女性研究者が能力を最大限に発揮し、教育・研究活動で著しい成果をあげる』ことにつながったかどうかを評価するためには、長期的な視点が必要である。しかし、現段階においても、目に見える著しい成果が、すでにでている。

- ・研究支援員制度利用者(子育て・介護等を要件)の科研費獲得率⇒62% (本報告書 6-1-3 章)
- ・女性研究者奨励賞受賞者の科研費獲得率⇒64% (本報告書 5-3-4 章)

女性研究者対象の支援制度を活用することによって、「リーダーシップ」を身につけ自立しようとする教員・研究者が育っていることは、確かだと思う。

本報告書の第 8 章に、これらの取組みを、利用者に限らず学内構成員がどのように捉えているのかを把握するために実施（平成 21 年 12 月 21 日（月）～平成 22 年 1 月 8 日（金））した学内意識調査（WEB 調査）の結果をまとめてある。年末年始をはさんで約 3 週間という短い調査期間にもかかわらず、全構成員の約 3 割の回答があった。男女共同参画に関する意識調査に約 3 割の構成員が応じたことから、「女性研究者支援モデル育成」事業を端緒とした本学の男女共同参画推進の取組みが、構成員に浸透していることがわかる。とくに春/夏/冬休み中の小学生対象の学内学童保育については、回答者の約 9 割から肯定的に評価された。地方の総合大学ならではの両立支援の取組みが全学的に認知されている。

この女性研究者支援の取組みは、単に女性研究者のみでなく、多様な人材の育成につながる。この取組みは、男女が差別されることなく、誰もがそれぞれの能力を發揮することができる「協働」の社会や組織をつくっていくことを究極の目標としている、と私は思っている。本当の意味での「男女共同参画」の意識を社会で高めるためには、まず、次代を担う人材が育っている大学で、意識改革やシステム改革を推し進めることが必要だと思う。

本報告書の第 11 章に示したように、広島大学の学部の女子学生の割合は、学部によって異なるが、平均として、40 年以上前から 2 割を超え、20 年前から 3 割を超え、10 年前から 4 割を超している。おそらくこれは日本全体の傾向だろうと思う。現在、日本では、大学進学率には、短大も含めると、男女の差はほとんどない。大学院生における女性の割合も、M 生も D 生も、10 年ほど前から 3 割を超している。これだけの女性を、日本の大学で教育しながら、いまだに、大学だけでなく、社会の方針決定の場における女性の数は少ない。そして、日本の GEM（ジェンダー・エンパワーメント指数）は諸外国に比して低い。これは日本の教育システムがおかしいのか、あるいは、せっかく育てた人材を活かす社会になっていないのか、いずれにしても何かがおかしい、と思わざるを得ない。

男女共同参画基本計画（第 2 次）（平成 17 年（2005 年）12 月決定）では、社会のあらゆる分野において、2020 年までに、指導的地位に女性が占める割合が、少なくとも 30% 程度になるよう期待し、その目標達成に向けて計画的に取組を進める、とされている。今年は 2010 年である。

この 3 年間、このプロジェクトを通じて、実施している私たちも、いろいろなことを経験させていただいた。このようなプロジェクトがなかったらお会いすることはなかったであろう、さまざまな分野の方と知り合うこともできた。この出会いを大事にしたいと思っている。若い方々に、男女をとわず、それぞれの人生を歩むよう努力してほしい、と言うならば、そう言う自分が、そのような努力をしていなくてはならない。自分の人生を歩むこと、自分の研究を進めることが、やはり最も大事なことだ、とあらためて思っている。

今後は、この 3 年間の経験や取組みの成果を基盤として、そして、学内意識調査の結果もふまえて、広島大学において、より教育・研究を進め、そして、男女共同参画の取組みをさらに進めていきたい、と考えている。これからもどうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。（文責：相田）

リーダーシップを育む広大型女性研究者支援 成果報告書

発行年月：平成22年3月

編集・発行：広島大学男女共同参画推進室

女性研究者支援プロジェクト

所在地：〒739-8524 東広島市鏡山1-1-2

TEL/FAX: TEL. 082-424-4398 FAX. 082-424-4414

(無断複写・転載を禁じます)